

ける基督教の傳播及び進歩、通例エックレシアと稱せらるゝ團體の建設、并に該團體を支配せし律法等に關するものなり。故に本書は教會歴史の第一巻と稱せらる。適切なり。其性質神學的辨證的なるよりも寧ろ歴史的なり。

殘る處の二十二書に付て最も主要なるものはポロの書簡と總稱せらるゝ十三書なり。是れ使徒ポロが己れ知る所の教會又箇人に向て基督教に關する種々の問題に付て時々書き送りしものなり。故に書簡と稱せらる。其性質は教義的教訓的なり。

第十九書は猶太人一般に向て認めし書簡なり。其の大主眼とする所は、イスラエルの古代の宗教は基督教の影象又は畫圖の一種なるを示し。該宗教は基督教を正しく了解するに於て、又容易く之を信受するに於て大に彼等を助くるものなるを教ゆるにあり。

然るに本書にはもと著者の名を附せざりしを以て、其の著者の誰なるやに就ては多數の議論常に起れり。永らくの間、使徒ポロの手になりしものとして、彼が書簡の最終に列せられたりしが、尙は其の是非に關する議論は決して絶へざりき。而して其反對論中には甚だ理に適へるが如きものも存す。該論者の憑據する最大の論確は、同書第二章三節なり。其の文に曰く、「此の如き大なる救を我儕等閑にして何で違ふことを得んや斯は始め主に託て示されたるを聞きし者ども我儕に言證たり」。爰に著者は自からを使徒の次におけり。然るにポロは決して然かなせしことなし。彼は常に自からを、基督を實看せし人々と共に列するなり。然り而して爰に著者自からとれる地位は路可其の福音書中にとれる地位なり。かく使徒に對して路可福音書の著者のとれる地位とヘブライ書の著者のとれる地位との類似は、多くの新約書註釋家をして該書を以て路可に歸せし

むるに至れり。されど路可は其うまれ異國人なり。而して該書の著者は常に自から猶太人として、其所見を述ぶるを見る。聖書註釋家中に録々たるマーニエル氏はルーアルに従ひて之をアポロに歸せり。されど本題に關する論戦場の全域を檢査し了りたる後、余輩はやはり本書はポロの眞著述なりと論結せざるを得ず。反對者の異議は容易く解し去るを得可し。該書の文体は實にポロ的にして、余輩は到底如上の斷結に到達せざるを得ざるなり。

殘る所の八書に付て、一は基督の弟なるセームスの記述せるもの、彼は西紀後六十年頃に殉教せり。猶太の大歴史家タセップスは大に彼を賞讃せり。彼は異教徒によりて義人セームスと稱せらる。次の二書はペテロの書簡なり。基督自らかの訓育を受けし十二使徒の第一のものなり。其の次の三書は第四福音書の記者約翰に屬す。又其の次の一書は基督の弟ユメの筆なり。而して最終の一書は又第四福音書の記者なる約翰の手に成る。默示録と稱せらる。斯書は新約書の古き翻譯中には看出されず。恐くは其等の翻譯の成されし後添加されたるものならん。其の所説の主意は羅馬帝國に於ける基督教進歩の状態を啓示するにあり。

爰に基督教に關して「インスピレーション」を受けたる書類の目録は終れり。他にも「インスピレーション」を受けたりと主張する書の存在するもの少なからずと雖ども、余輩は彼等の主張する所を認許する能はず。其の多くは後世の産出なり。

(二)以上列舉せしものに次で緊要なるは早代なる教會師父達の著作なり。彼等の或るものは直接に使徒に従ひ、又彼等を見、彼等と通せり。又或るものは其等の師父達に従ひ、連續して西紀後第四世紀又は第五世紀頃に達せり。此等の人々の遺書は歴史上の徵證、教義上の議論、及び教會

組織の成立、其の異教徒との衝突、終極の勝利等に關する研究に向て甚だ必要なり。總て此等の書は羅句語又は希臘語を以て記さる。輒近其の英譯したるものを合集して出版せり。彼等は容易に購求するを得るを以て爰には之を説かず。

次に此等の早代にありて基督教に反對せし二人の名を擧ぐ可し。彼等の著作の幾分は今日に傳はれり。彼等は共に希臘の哲學者にして一をセルサスと云ひ、他をボルフィリと稱す。前者は西紀第二世紀の中頃に在りし、後者は同第三世紀の中頃に在りし。

中世紀の文學に付ては格別云ふ可きものなし（基督教の研究に對しては甚だ緊要なりとは雖ども）。されど爰に一書の擧げざるを得ざるものあり。即ちトマス、アキイナスの「スミナ、セオロツカ」是れなり。

本題に關する改革後の文學は爰に列擧するの場所なく暇なし。組織神學及び教會歴史に關する著書は實に無數なり。されど前世紀の後半期より多くの強敵頻りに起りて基督教を排撃せり。其主要なる著書及び之に對する答解書を少しく左に列擧せん。

第一敵論者、第十八世紀の著者に於て、余は先づ指をキツボンに屈せん。基督教を破壊せんとするキツボンの計畫は實に廣大なりき。かゝる廣大なる計畫は嘗て觀想されたることなし。之に對してはレナンの基督教起源論は宛も巨人の側に對立する矮人の如し。さて基督教に關するキツボンの排撃論は收めて其著羅馬帝國衰滅史中にあり其中に現彰する學識の博大、鑑識の銳利、文章の壯麗、思念の深奥は實に該書をして廣大なる英文學史中に匹適ならしむ。彼は基督教主大の動機を搜檢して之を羅馬進歩の動機に對比し、而して前者の後者を壓伏すること愈々大にして愈

々羅馬帝國を衰微せしめたりと云へり。元來キツボンは異教的文化を讚稱する人にして、而して常に此の動機を以て該歴史を書きたりしなり。

第十九世紀にありては先づ、メヅイド、ヌツラウスのイエス傳を擧げざる可からず。實に歐洲諸國殊に日耳曼を攪動せしは本書なり。第一版に於て、ヌツラウスは、基督鬼神説を主唱せり。されど最終版に於ては之を撤去せり。該書は本題を研究するに於て大に參考するの價値あり。該書に次で現れたる同臭の書はナレンのイエス傳なり。レナンの説は之れなり。曰はく、イエスはヌツラウスの主唱するが如き鬼神に非らず眞實の人なり。されど此の人は甚だ奇怪なる性質の人なり。或る時は甚だ賢良なる言を吐き、又或時は狂人ならではなし難きはどの事をなせりと。該書は實に汎く世人に購讀せらる。今日すら同臭の書中にて賣高第一等なりと云ふ。文章甚だ優美にして宛も傳奇を讀むか如き快味を興ふ。基督教に關してはレナンは他に著述する所多からず。又同じく佛人にして基督教起源論を著せし人あり。其名をハーヴェーと云ふ。所述ヤ、學者的なり。

チエビンゲン派のハウエル博士の著書も亦敵論書の中に列せしめざる可からず。又獨逸人にして有名なる基督傳を書きし人あり。カイムと云ふ。其見解はヤ、異なれり。ヤ、折衷的なり。即ち正統派の見解とヌツラウス及レナン等の見解の中間に立てり。

第二、辨護者、ヌツラウスの新説に向て與へられたる第一の答解はチアンデルのイエス傳なり。チアンデルは猶太生にして基督教に轉宗したる人なり。總て彼の著述せし書は甚だ貴重なり。彼の教會歴史は此問題に關する最良の書なり。實にヌツラウスをして其鬼神説を撤去せしめたる

はチマンドルのイエス傳なり。但し該書は靈氣に充溢し哲學思想の深邃を極めたる書なり。カノン、フアラの基督傳及びケイキ博士の基督傳は此問題に關する二箇の良英書なり。カノン、リットンの「我儕が主の神性」は又此問題に關する最良書の一なり。其の内には一切近世の諸説を包括せり。恐くは此の長き論證の最良なる要略ならん。

有名なる佛國の政治家神學者たるフラサンセーのイエス傳は甚だ良好なり。優美なる佛語を以て叙述す。其の英譯は原文に比して大に劣れり。

以上は主として基督傳に關する材料を列擧せしものなるが、更に少しく教義に關する書を指示せん。

ホツツ組織神學(三卷あり)、ドルテル神學、ステッド基督教々義、チアム神學、ホセンハツハ基督教々義(三卷あり)。

爰には基督教に關する著作の略表だに掲載するを得ず。又聖書註釋書の名目をもあぐる能はず。此等の事を完全になさんには全卷を以て之にわつるも尙ほ足らざる可し。故に只如上の數書をあぐるに止め、次に第二の問題に移らん。

(二) 基督の傳、及び其為人

基督の誕生及び其に次く生活は三福音書中に見ゆ。第四福音書は之を省き、而して永遠より神と基督の間に存する關係に付て深奥なる解釋を與ふ。今基督の神性を説くに先だちて、先づ其の生活并に事業の一斑を示さん。

さて基督の誕降に先だちて、其の名を約翰と稱する人、彼に就てあかしせんが爲め世に生れたり

と云ふは三福音書の共に一致する所にして、第四の福音書も亦之に契合す。此の約翰と云ふは基督より六ヶ月前に生れし人にして、後國主の逆行を責めたるの故を以て死に處せられたりき。

夫れ基督の生れ給へること左の如し。ユダの支派の一人にして大工を職とするヨセフと云へる人ありけり。同じ支派の一女子にしてマリヤと云へるは之と聘定せしが未だ借にならざりしとき、

一日天使彼女に現れ來りて、彼女聖靈によりて孕み一男子を生まん、其の名をイエスと名く可し。かれ大なる者と爲て至上者の子と稱へられん、又主たる神その先祖ダビデ王の位を彼に予ればヤコブの家を窮なく支配す可く且其の國の終ること有らざる可しと告げたり。マリヤその言を

訝り天使に向て我未だ夫に適ざるに何にして此事ある可きやを問へり。天使こたへて云ひけるは、「聖靈なんぢに臨る。至土者の大能なんぢを庇はん。是故に爾が生むところの聖者は神の子と稱へらる可し」と。マリヤ曰けるは「我は是主の使女なり。爾の言へる如く我に應かしと。さて其孕み

たることヨセフに聞へければ、ヨセフ密に離縁せんと思へり。嚴密に云は、聘定の關係をたゞんと思へり。蓋し猶太の律法に従へば、既に一人の男子と聘定せし女子更に他に通するときは姦通

罪を以て問はれ、石にて打殺さるゝ刑に處せらるゝ。然るにヨセフはマリヤの爲めに之を好まざりければなり。恐くは其の親族なりしを以てならん。かくて此の事を思念せる時に主の使者彼が夢

に現れ云けるはダビデの裔ヨセフよ、爾妻マリヤを娶ふことを懼るゝ勿れ、その孕る所の者は聖靈に由なりと。ヨセフ此の説明に満足しけん、其後マリヤを其家に迎へたりき。恐くは此事を

して世評の餌食となさざらしめんか爲めならん。人世は風評の餌食となさんとて常に或る出來事を待ち望むものなり。ヨセフ能く之を知れり。故にマリヤを迎へて之を防げり。如才なく立ちま

はれりと云ふ可し。

さて基督の誕生ありしは戸籍査の行はれし時なりき。羅馬の皇帝は天下の戸籍を査る詔命を下せり。故に人みな戸籍に登らんとて各々その故邑に歸れり。ヨセフも亦其聘定の妻マリアと共に故邑ベテレヘムに歸れり。此に居りて産期満ちければマリア男子を産めり。時に旅舎客充ちて彼等の居處なかりしかば廐に宿れり。此の廐に宿れりと云ふは、恐くは土耳其にてミヨナと稱する廐の一部分に宿れるを云ふならん。ミヨナと云ふは廐の内に入りて高く地板を離れ、牛馬の達する能はざる部分なり。冬季嚴寒の頃爰に宿るは甚だ暖にして又安慰なり。其夜近傍の野にて牧羊者の一群其の羊群を守りつゝありしに、忽然として衆くの天軍現はれ、神を讚美て曰けるは、天上と云ふは榮光神にわれ、地には平安人には恩澤あれど。而して天使牧羊者に向て曰ひけるは、われ萬民に關りたる大なる喜の音を爾曹に告べし。それ今日タビアの邑に於て爾曹の爲めに牧主となられたまへりと。彼等互に曰けるは、率ベテレヘムにゆき、主の示したまへる其有し事を見んとて急ぎて町に至り、嬰兒と其兩親に尋ね遇ひ、野にて見たる事聞きたる事を彼等に告げ、且つ嬰兒を拜せり。又牧羊者の外、通例マツヤン又はマツなる名にて知らるゝ智者の一体も來れり然にマツなる名稱は拜火教の祭司等に與へらるゝことを、前卷にて學べり。故にイエスなる嬰兒を求めてベテレヘムに來りし此等のマツは、ペルシャの祭司等なりきと推斷せざるを得ず。さて馬太の傳へたる書によれば、彼等のベテレヘムに來りし次第は左の如し。夫れイエスはヘロデ王の時ユダヤのデレヘムに生れ給ひしが、其とき博士たち東の方よりエルサレムに來り、曰けるは、ユダヤ人の王とて生れ給はる者は何處に在らず、われら東の方にて其星を見れば彼を拜せん爲

に來れりと。ときにヘロデ王はユダヤ國に君臨せしが、之をさへて大に痛み、凡て祭司の長と民の學者とを集めて問けるはキリストの生る可き處は何所なる乎と。彼等はユダヤのベテレヘムなりと答へたりき。蓋し舊約書中馬拉基の書に此の預言見ゆるを以てなり。博士等之をさへてエルサレムを去り、ベテレヘムに進めり、前に東の方にて見たりし星かれらに先ちて嬰兒の居所にいたり、其上に止りぬ。彼等この星を見て甚く喜び、既に室に入りければ嬰兒の其母マリアと偕に居を見ひれふして嬰兒を拜し寶の盒を開て黄金乳香沒藥など禮物を獻げたりき。爰にヘロデ王は博士等を召て、其の求むる嬰兒に遇はし、我に告よと命せしが、博士等は基督を拜したる後天使の默示によりて、彼が命に従はずして去れり。蓋しヘロデ王は基督の何れの嬰兒なるかを知りて之を殺し、以て後患をたんと欲せしなり。然るに博士等は之を告げずして去りしかば、彼大に怒り、ベテレヘムと其境の内なる二歳以下の嬰兒を盡く殺せり。かゝる暴虐なる所行は歴史上其の例を見ること甚だ稀なりと雖も、されど彼元來甚だ暴虐なる君なりしことは他にも史傳の徴す可きものありて存す。

されどヘロデは其目的を達する能はざりき。蓋し天使は既にヨセフとメリーに告げて彼の暴手の達する能はざる埃及に通れしめしを以てなり。かくて彼等はヘロデの死するまで爰に止り、其死をさへて後猶太に歸れり。されどベテレヘムには行ずしてパレスチアの北方なる一小都會ナザレに往けり。

福音書は彼等埃及より歸てより基督其天職に入るまで殆んど三十年間沈黙せり。其間の事蹟に付ては只二小文の存するのみ。一は路可傳第二章中にあり。其の第四十節是なり。曰はく、其子や

や生長して精神強健に知慧みち神の恩寵その上に臨りど。他も亦同書同章にあり。其の第四十一節より第五十二節に至る間の記事是なり。曰く、

一 儲その兩親毎年に逾越の節筵にエルサレムに往きしが、彼十二歳の時また筋筵の例に循ひエルサレムに上れり。節筵の日卒て返往けるに其子イエスエルサレムに留りぬ。然るにセヨフと母これを知らず。同行人の中に在ならんと意ひ、一日程を行て親戚知音の者に尋ねしが、遇ざりければ、彼を尋てエルサレムに返り、三日ののち殿にて遇。かれ教師の中に坐し、且聴かつ問るたり。聞者みな其智慧と其對とを奇とせり。兩親これを見て、駭き、母かれに曰けるは、子よ何ぞ我儕にかく行たるや、爾の父と我と愛て爾を尋ねたり。イエス答けるは、何故われを尋るや、我は我父の事を務べきを知らざる乎。されど兩親は其語れる事を曉す。イエスこれと共に下り、ナザレに歸て彼等に順ひ居り。其母これらの凡の事を心に藏めぬ。イエス智慧も齡も彌増り、神と人とに益々愛せられたり。

かの三十年間の事蹟に付ては以上に記載せしより外に、吾人は一事も之を知らず。もつとも彼が幼時の状態を叙記せる二三の書ありて今日に傳はれりと雖ども、恐くは後世の偽作ならん。余輩は只彼は他の小兒の如くありしならん、又生長の後には兩親に孝順し、日々其の家業を助けしならん。而してヨセフの家業は大工職なりしを以て、彼も亦多分其職を學びしならんと想像し得るのみ。

福音書は再び三十歳の時に於ける彼が生活の叙記をとれり。是れ猶太の律法にありては、宗教上の職務に身を委ねんとするもの、備ふ可き齡なり。基督は其事業に入るに先だちて、約翰より洗禮

を受け、其の成滿せんと欲する將來の事業に備へんが爲めに、荒野に退けり。而して爰に悪魔の誘試を受けたりき。馬可及び約翰の二傳は之を記せず。されど馬太及び路可の二傳は之を詳記せり。今後二傳の記する所によれば誘試に三種あり。第一には、石を以てパンと爲よと云へり。蓋し基督は四十日四十夜の間、其の將來の大事業に對する大義務に付て其思念を凝し、而して飲食するを忘れしと見ゆ。故に悪魔は多分基督は大に飢に苦みおるならんと推察して、先づ此の試を與へしならん。然るに基督之に答へて曰ひけるは、「人はパンのみにて生くるものに非らず。唯神の口より出る凡の言に因る」と。云ふ心は吾人人間を支ふるものは管に肉體の料のみならず、否な更に高等なる或る力ありとなり。是に於て悪魔かれを聖京に携へよき、殿の頂上に立てて曰けるは、爾もし神の子ならば己が身を下へ投よ。蓋なんちが爲めに神その使等に命せん。彼等手にて支へ爾が足の石に觸ざるやうす可しと、イエス彼に曰けるは、主たる爾の神を試む可からずと。第三即ち最終に悪魔彼を最高き山に携へよき、世界の諸國とその榮華とを見せて、爾若し俯伏て我を拜せば此等を悉なんちと與ふ可しと曰ふ。イエス彼に曰けるは、サタンよ退け主たる爾の神を拜し、唯之にのみ事ふ可しと。終に悪魔かれを離れ、天使たち來り事ふ。

右の誘試なるものは、眞實なるものなるか、即ち基督は實際悪魔につれられて此所彼所に至りしものなるか、又は單に或る心裡の争闘をしか形容せしものなるか、今之を斷言すること難し。兩説共に多くの辯護者を有す。

基督の誘試と佛陀の逼試との間の類似は甚だ著し。而して佛陀の逼試は甚だ詳細に叙記せらる。基督の誘試は常に人間の陥り易き三要點を表せり。一に肉體の需要、二に犯險の愛、三に榮華の

愛なり。

さて基督は至大なる悪魔の誘試に打ち勝した後、其の事業着手の期熟せりと思惟せしが如し。斯時より彼始めて道を宣傳へ天國は近けり。悔改めよと叫べり。而して總てカリリヤ北部の地に遊化せり。彼は此間多くの奇跡を行へり。大抵慈善的の性質のものなり。即ち疾病を醫し、悲しめる者を慰め、貧乏者を助くる等の事どもなり。故に其の聲名いよく高く、いよく播れり。而して人々神を諷め、且つ神は再びかゝる大預言者を送りて、我儕を訪へりと云へり。彼其の教の將來の傳播の爲め、自から訓育せんとて十二の弟子を撰びしは此の間の事なり。其他に七十人を撰びしことあり。されど此等の七十人は十二弟子と同種のものにあらず。且つ傳道に送られしは只一回のみ。

基督傳道の爲めに費せしは僅かに三年許なり。而して其方所は大抵猶太の境内なり。彼は羅馬帝國の一臣民として容易く諸國に遊歴するを得たりしかど、嘗て其生土を去りて他國に遊化せしこと古記に見へず。彼又希臘語或は羅句語を解せしや、否や、疑はし。其の他國の人民に接せしは只二三會に止りしが如し。彼は偏に、長年月の間恭敬腐敗せる宗教的生命を再び猶太人の内に振起せしめんことを熱望し外國傳道に至ては其の十二弟子に打ち任せたりしが如し。而して猶太人に向ては、人間に稀れなる熱心を以て、献身的に傳教せり。彼は遍く國內諸方に遊歴し、衆生を教化せり。而して其間屢々猶太教の先導者等と衝突したりき。されど常に夫れくの方法を以て、之を斥けたりしが、終に彼等の犠牲となりて十字架の上に斃れたりき。爰には基督の傳記を細説するを得ず。前文中には彼が傳記に關する主なる書名を列擧せり。若し

彼に付て詳しく知る所あらんと欲せば其等の書に就て見る可し。爰には只彼が地上の經歷の主點を示さんと欲するのみ。故に上文説き來りし所に續きて、彼が最後の状態を概説す可し。

さて猶太の習慣にて人若しなし得るならば、踰越の節の間にエルサレムに上るを例とせり。故に基督も亦屢々其兩親とともに、又其兩親を去りて後は弟子等と共にエルサレムに上りて踰越の節を祝せり。彼は小年の時より能く猶太の律法を守り、又好んで其誠に從へり。而して其の最終にエルサレムに上りし時、かの約翰の筆によりて傳はれる高尚雄麗なる説教を垂れたりき。然るに此の説教は人民の間に動搖を起し或る者は彼を以て大教師なりと稱し、又或る者は然らずと云へり。猶太の祭司等は之を見て今や何物か彼に加ふる事なくば、彼等の權力の大に衰耗せんことを見たり。故に種々計畫する所ありしが、遂に十二使徒の一人にユダと稱するものありて基督を賣んとするを看出せり。於是密にユダに會し、若し彼を賣らば大金を與へんと約せり。かくてたくみし日は來りぬ。ユダは即ち一隊の兵卒と下吏を祭司長よりうけ、夜基督の入りたる園に往けり。此の園へは基督其弟子と偕に屢々入りしことあるを以て、ユダ能く之を知れりしなり。爰にて隊の兵卒及び其長とユダヤ人の下吏基督を執へ繋れり。弟子等は薄弱なる抵抗を與へたる後、其の主を敵手に殘して逃れ去れり。かくて基督は祭司の長の所に曳往かれたり。されど猶太人は人を殺すの權なかりしを以て、羅馬政府より派遣されたる方伯ピラトに彼を渡し又刑せんことを乞へり。ピラトは始めより基督は別格猶太人の求むる刑、即ち死刑に處す可き程の罪を犯さざりしことを知りしが如し。故に云へり。只鞭ちて釋さんと。されど猶太人は云へり。若しこれを釋せば、カイザルに忠臣ならず、凡て自己を王となす者はカイザルに叛く者なりと。蓋し基督自からユダ

ヤ人の王と稱せるを云ふなり。全体猶太人は常に羅馬のカイザルを好まず、ヤ、もすれば叛を圖れり。されど此時には甚だ忠實なる羅馬の市人なるかの如くに云へり。ピラトは遂に彼等の願を許し、基督を彼等に付せり。於是彼等は彼を十字架につけたりき。時は金曜日午後なりき。經に曰はく、爾時其地あまねく黑暗となる。又曰はく、地ふるひ磐さけ、墓ひらけて既に寢たる聖徒の身おほく甦へり、イエスの甦れる後墓を出で聖城に入りおほくの人の現れたり。さてイエス十字架につけられて後葬られたり。三日目に或る信女たち猶太の習慣に従ひて其屍を見んとて墓に到れり。而して墓の内に入りしに只其の裏まれし布のみありて、屍を見ず。(但し猶太の墓は岩を鑿ちて造れる洞窟なり) 彼等之を見て大に驚き且つ悲みしが、圍にてイエスを見たり、爾時イエスは彼等に向て彼死より甦れることを告げ、且つ彼はガリリーに往きて其處にて彼等を見んとするを十二使徒等に告げよと云へり。

此の後彼は屢々弟子等に顯れ、彼は苦をうけ、死して葬らる、されど又甦る可きことを舊約書によりて説明せり。而して後四十日間彼等の義務に就て教を垂れ又萬國にゆきて福音を傳へ父と子と聖靈の名によりて洗靈を施す可きことを命せり。然り而して基督教が一の猶太的宗派の域を脱して、世界最大の宗教たる可く膨脹し始めしは此の時なりけり。

されど基督の墓を守りし兵卒等は云へり。死体墓中より消失せしは弟子等夜竊かに之を盗み去りたるなり。而て基督の敵は皆な之を信せしが如し。

余輩が今福音書に従ひて描寫せし基督の傳記は爰に終はる。其の叙せる所の實に不完全なるは、本巻の紙數に制限あるを以て如何ともしがたし。されど茲に一問題の更に論及せざるを得ざるも

のあり。即ち上文に描寫せしが如きイエスは、眞實實在の人間なるか、又は神仙傳上の假作人物には非らざるかと云ふ問題是なり。神仙説は、上文に述べし如く、スツラウス氏及び其の他の或る日耳曼學者の主唱にかゝる。スツラウスの説に従へば、此のイエスなるものは人類全觀の象表なり、人類は即ち此のイエスなり。而して人類は神の子なり。イエス自から己を然か呼べり。イエスは日夜己が人民の手に苦められ、而して遂に十字架につけられ、死して葬られし如く、又人類は日夜自己の子孫の手に苦められ、虐待せられ、遂に十字架につけられ、葬らる。されどイエスの甦りし如く、人類も亦甦る。而して甦りては又葬られ、葬られては又甦ると。是れ通例神仙説と稱せらるゝ一派の觀想なり。上章には大陽神話を以て佛陀傳を説明せんとする人あるを見たり。爰には又人類總觀の仙譚を以て基督傳を説明せんとする人あるを見る。されど二者共に吾人を満足せしむるに足らざるなり。殊に基督傳の場合にありては上文にも述べし如く、其の主唱者は遂に其の所説を取消し、程なり。殘る影響は只或る人々の心にイエスと云ふ人物の歴史的實在は疑はしと云ふ感念を起さしむるに止まる。

レナン、カイム或は他の學者の理説、其の正統的なるを異端的なるを問はず、爰に論及する能はず。次章教義を論ずる部分に至らば再び此の問題に論及せん。

基督と同時代の記者にして、其の猶太人たると異教人たるとを問はず、基督の傳記及び事業に付て書き遺し、證據は有名なる猶太の歴史家ジョセファスの遺書中に見ゆるもの、外に傳存するものあるや否や余は今之を記憶せず。但しジョセファスは西紀後三十七年と百年の間に在世せし人なれば、其の誕生は正しく基督の死後三年半頃なる可し。さて彼のかき殘し、證據と云ふは、其

語甚だ簡單なり。多くの學者は後世の附加ならんと云へり。其語と云ふは左の如し。

さて此頃にイエスと云へる聖人ありけり。若し彼を呼んで人と云ふこと不正に非らざれば。蓋し彼は驚嘆す可き業を行ひし人又樂を以て眞理を受くるが如き人々の教師なりければなり。彼は猶太人及び異國人の多くを己に牽引せり。彼は基督なりき。而してピラトは吾儕の内の主要なる人々の建言によりて彼を十字架につけたりし時も、初めに彼を愛せし人々は敢て彼をすてざりき。蓋し彼は其の死せしより三日目に、神聖なる預言者が彼に付て此等及び其他多くの驚異す可き事を預言せし如く、再び甦りて彼等に現れたればなり。而して彼が名よりして呼ばるる所謂基督信徒なる黨類は今日も尙ほ消滅せず。

マヨセファスはもと希臘語を以て該書を記せしが、後該書はヘブライ語に翻譯されたりき。而して右に載せたる基督に關する言は其のヘブライ語譯中には之れなし。されどレナンの如き、過激なる基督教反對者すら右の語の眞實なることを認許せり。爰に基督傳の敘述を止め、次の問題に移らん。

(三) 其創說者の死に次で成立せる基督教會の組織。

上文に述べし如く、基督は其生時の間に常に其の傳道に隨從せし十二の弟子を召し、又其等の十二弟子の外に嘗て其信奉者の内より七十人を撰びて、彼が福音を宣傳せしむる爲め、諸方に送りたりき。福音書中には基督嘗て教會(現今用ゆる意味の)を組織せしこと見へず、彼は其事業の斯部分を彼が蒔きたりし觀念の自然的發達及び進歩に任せたりき。されど今日に傳はれる彼が説教及び語に徴するに、彼は其の事業の成果をして永續久住せしめんと企圖せしこと明らかなり。一

例をあげれば其のペテロに向て云へりし語に左の如きものあり。「我また爾に告ん、爾はペテロなり、我が教會をこの磐の上に建つべし、陰府の門は之に勝べからず」馬太傳十章六〇十八茲に基督の企望は永續久住し又敵の力によりて敗らる可からざる一團體を組織するにありしこと明らかなり。

又福音書の多くの部分に於て彼が説教は通例人々をして天國は近づけるが故に悔悟の念を起さしめんとするを見る此の天國及び其に類似する神の國と云ふ語は、吾人をして、基督の主要なる企望は、其の教を久住せしめんが爲め、一の教會を組織せんとするにありしことを思はしむるなり。又彼の死後に至て其の弟子等は能く主の言を体し、又正しく主の命じ玉ひし職務を領解せしが如し。何となればユダの自殺後直ちに彼等は一室に集まりて、ユダの地位を充たす可きものを撰びたればなり。而して此の集會及び其の次の諸集會に於て、かれらはすでに十二使徒によりて指導されたる一團體として運動するを見る。之によりて見れば十二使徒は萬事に於て他の人々の上に立ちしが如し。而して其の數の欠けたるときは常に之を充たす可き人を撰びたるが如し。

基督は其生時の間、彼等の行爲を支配す可き戒律を制せざりき。彼は只彼等に向て聖き生活に入れど勸誡せしのみ。故に總て基督教徒の行爲を支配する律法は彼の後に發達し組織されたるものなるが如し。實に基督教の神學并に總て教會及信徒の行爲を治するに必要なる諸律法の發達するには幾多の世紀を要せしなり。次章に於て見るが如く、此等の諸件に關する基督の觀念はかくありき。曰く此等の諸件は其の繼續者によりて發達する可しと、即ち組織的教會は彼の後に發達する可しと。而して此の組織的教會に於て、其初めより多世紀間採用されし制度は、聖職三位制なりしを見る。即ち教會は三位の聖職監督、長老及び執事によりて主理する制度を守りしを見

る。監督は長老の上に立ちて、長老は又執事の上に立ちて、各々其職を勤め、而して執事は主として信徒の世俗の關係に關する事件を處理せり、即ち貧しきもの、病めるものを訪ひ、又慈善物を分與する等の事なり。然り而して此等の位階の既に使徒後時代に存在せしことは、何人も之を合理的に否定する能はざる可し。

されど今や基督教は無數の分派に分れ、而して各々自派を以て正しきものと主張せり。

爰には其等諸派の興起發達の歴史を述ぶる能はざること、既に佛教諸宗の沿革云々に付て述べたると同じ。余輩は眞に分派の有害なるを悲む。是れ實に佛教にありても、基督教にありても教勢減殺の大原因たるなり。若し夫れ諸派一致合同の時期にして一日も早く來らば基督教の爲めにも又佛教の爲めにも賀す可きことなり。

(四) 基督教の進歩發達及び其の奉信の國民上に及ぼし、影響、

イエス、キリスト天に昇る前、其の弟子等に戒めて曰く、「劍を用るものは劍にて滅さる」と。是れ彼等に對する基督の教誡ありき。而して彼等は甚だ誠實慎嚴に此教誡を守りたるが如し。夫れ基督教は毫も地上の武器の助を求めざる宗教なり。肉体よりも寧ろ心意に其の力を向くるは創說者の大希望なりき。而して初代の基督教徒の甚だ誠實に此教誡を守りしことは疑ふ能はず。されど又、後世に至ては十字架が屢々劍の助を求めしことも疑ふ能はず。本書第三卷に述べたる黒西哥及び秘魯に於ける西班牙人の暴虐は實に基督教徒の顔に泥否な血を塗れり。而も基督教の歴史上若し只此事ありしのみならば、世人は敢て非難の矛を向けざるならん、されど其の歴史の紙上宗教の爲めに流せる血を以て印せらるゝ所少なからざるを見る。勿論爰に吾人は創說者の觀念と

其の後世に於ける繼續者の所行の間に區別を立てざる可からず。余輩は今や僧侶の大に腐敗墮落して社會を利するは愚か却て毒毒を流せるを見て、直ちに佛陀を非難し得るか。今や僧侶は大に腐敗を極むと雖ども、以前の時代にありては世に多くの貴重なる事業を成せしり。多くの恩恵を諸民に與へしなり。而して吾人は彼等復興の好運に會して再び其の失ひし所のものを復せんことを望み得るなり。基督教に關しても亦然り。彼は多くの罪を犯せり。されど又世に稀なる最大なる恩恵の父母なり。吾人は其の成せし所を謝し、又大に彼の名譽を毀損せし弊害の一日も早く消滅せんことを望まざる可からず。茲に本題外の事ながら、余を許して一言云はしめよ。其云はん欲するは基督教の輓近大に進歩せしことなり。此は該教近代の歴史を緝く人々の、直ちに認識する所ならん。五六十年前彼に對して提出されたる攻撃は今や再び提出さるゝこと能はざるに至れり。其の敵對者すら既に之を悟れり。彼は十分活力を現し、活勢を振ひて布教傳道に従事す。而して其の己を利し其の奉信者を益する事は、機會のある毎に常に之を吸収するを怠らざるなり。されど此は不幸にも佛教に付て云ふを得ず。現今の狀態にありては何れの佛教國に於ても其の僧侶間には昔時の純潔の復生するを見ざるなり。されど余輩をして本題に立ち戻らしめよ。

さて基督昇天後、其の弟子等は屢々エルサレムなる猶太教の殿堂に集り、彼等が將來に付て議せり。而して總ての集會に於て十二使徒殊にペテロは其の先導者たりしが如し。其後彼等が新しき團體の先導者の一人たるステパノは猶太人の暴徒の爲めに擊殺されたりき是れ第一の殉教者なり。されど此事件は少しも基督教徒の銳氣を挫かざりしが如し。彼等はいよゝ熱心して傳道に勇進せり。事猶太の方伯、第一のヘロデの子なるヘロデに徹せり。彼は即ち第四福音書の記者なる

ハチの弟ゼー・ムスを斬首に處せり。而して此度はや、クリスチャン小團體をして恐懼せしめしが如し。彼等は直ちに諸方に散せり。而して此の強迫運動は始めて猶太國外の諸國民間に福音を宣傳せしむる大機會となりたりき。爾後初代教會史上の一大事件起りたり。即ちソウロの事件なり。彼は猶太の一青年にして大に新派に反對し、彼等をして全く其の跡を絶たしめんと決心せり。故に教會を殘害して此所彼所の家に入り、男女を曳出して之を獄に付せり。かくて彼は彼等の跡全くエルサレムに絶へたりと思惟し、更にダマスコに尙ほ殘黨の集まれるをき、往て之をも窘迫せんとせり。然るに彼ダマスコに近けると、忽ち天より光ありて彼を環照せり。かれ地に仆る。其の時サウロサウロ何も我を窘迫やと云ふ聲をきけり。サウロ曰けるは、主よ、爾は誰ぞ。主いひけるは我なんぢが窘迫するところのイエスなり。爾爾ある鞭を蹴るは難しと。夫より彼は異教國民間に基督教を傳播せしむる一大機關たる可きことを命せられ、又ダマスコにもきて其處にて基督教徒の補助を受く可きことを告げられたりき。彼は其の命のまゝになしき。彼は其視力を害して數日間視ること能はざりしが、漸々快方に趣けり。而して世に稀れなる熱心を以て其の命せられたる事業に献身せり。彼は又上文に述べしが如き美はしき書簡を殘せり。其等の書簡は實に世界文學上の至貴至重なる寶物なり。

ポーロ又弟子の一人として數へらる。其の直接に基督の命を受けたるを以てなり。彼は其血統上猶太人なりと雖ども、外國にありて生れ又育ちたるが故に、隨て外國の事情に通ずること詳しかりき。故に其の初めより外國傳道に従事したりき。而して猶太人に對する彼の觀念は甚だ極端的なりき。彼は思惟せり全体ヘブライ人は神の指導の下にあること既に甚だ永し、故に今や其の

高妙なる教を諸國民に開示し、其の頭上に戴く處の義務を實行するの時なり。彼等は最早教へらるゝを要せず。よろしく他國民の教師たる可き時なりと。

彼の傳道は自然羅馬帝國内にありき。而して始めて異教中に存在する高尚なる各事各物と基督教とを衝突せしめたるは彼なり。新宗教に對する羅馬政府の感情は初めは輕蔑的なりしが、後其の進歩の漸々廣大を致すを見るに至ては、又漸々恐怖と暴怒に變せり。新教徒を窘迫殘害し、該教をして絶滅せしめんことを命ずる勅令は相次で下れり。而して基督教徒の蒙りし苦難は實に限りなかりき。爰に之を描寫するの暇なし。其詳細を知らんと欲する人々は教會史を繙かれよ。されど基督教は此の世界最大の帝國と戰ふて勝てり。彼は實に羅馬帝國と戰ふて勝てり。遂に其を以て基督教界の一大勢力となせり。

然り而して此壯大雄偉なる事業はポーロの着手し始めたる所なり。さるからにレナンはポーロを以て基督よりも大なりと云へり。されどポーロをして若し之を聞かしめば、彼は如何に感ずるならんか。彼は常に云へりき。彼が其等の事をなし得しは實に全く基督の力によると。

西紀後三百年羅馬の皇帝コンスタンチン、基督教に轉宗せしとき、迫害は始めて止まれり。而して從來迫害されたりし宗教は皇帝及び其朝廷の信仰となれり。時に異教は其の失ひし特權を回復せんとて微弱なる抗抵を試みたりしかど其功なかりき。然るにコンスタンチン皇帝の甥ユリアン帝位に陞りてより、基督教は再び王宮より放逐され、且つ前よりは一層烈しき迫害を蒙りたりき。されど異教は其勢力を回復する能はざりき。

さて如上の争の羅馬帝國内に進行しつゝありし間、帝國外の世界も亦此の新しき信仰を知らざ

りしに非らず。其の傳教者の奔走せし範圍は實に大ブリタンより支那に達せり。而して大ブリタンは第三世紀の初代に於て早くも轉宗せり。更に東方諸國にありては布教大に成切せり。其の教義はメソポタミア全土及びペルシャを侵潤せり。支那にありても、シリア教會は爰に多くの監督を有しき。印度にありても亦ペルシャより進入せるシリアの宜教師の力によりて大に進歩しき。然り而して此等の隆盛なる諸教會は後回々教の劍によりて悉く切り倒されたりき。後章回々教の發達を叙するとき再び此問題に説及す可し。

本題第二の點は基督教が其の奉信の國民上に及ぼし、影響なり。此點を判斷するに於て余或は偏見に陥ることあらんを恐る。蓋し余は幼より基督教を奉ずるものなればなり。されど尙ほクリスタヤン國民の弱點を見るに旨ならず。

さて基督教は殆んど各種の文明と接觸せり。希臘羅馬にありては最高の文明と戦ひ亞細亞にありては幾世紀停滞せる文明を刺激し、中央亞細亞及び大洋諸島に於ては野蠻の民種中に侵入し、又セルマニー及びアイルランド、スコットランド及びメスカンデナヴィヤ、ルシア及びコーカサス等にありては未開の民と戦へり。かく人類社會の種々の状態に接觸し又之に影響せし宗教に付ては余輩は婆羅門教の如く始めより一定の範圍内を出でず而して其内にありて懶惰安逸を貪れる宗教よりも能く、人類の進歩上に於ける其の成果を判斷し得るなり。

先づ基督教と希臘羅馬の文明の關係を研査せしめよ。希臘及び羅馬にありて一種獨立なる文明發達して高度否な異教民の文明に於ては最高の度に達せしこと疑ふ能はず。キツポンは大に羅馬の文明を愛し其の愛する所に偏して基督教を排斥せし人なるが、尙ほ羅馬帝國は腐敗したるが故に

滅亡したりと云はざるを得ざりき。其文明は道德及び宗教の基礎なき一種の智識なりき。而して此基礎なくしては如何なる國民も安寧隆盛の途上に進行すること能はざるものなり。セチカの如きブルタークの如き、當代の異教學者其者も切りに社會道德殊に婦人の道德の腐敗を慨嘆せり。而してかくて國民道德の腐敗其の頂上に達せしとき、基督教は其の上に勝利を得たりき。而して其の羅馬帝國に與へたるは此の世の富又は智識にあらすして、實に若し能く之を確守せば決して國家衰滅の憂なき道德法の意識なりけり。

未開の民種に關しては、其の波及せる所には何處にも、平和と元氣を與へたり。畏ろしき蠻民を以て充滿せる日耳曼の濕氣多き深林、蠻風の横行せる英國の霧深き平原、氷雪山なすスコットランドの高原、此等の諸國に於ける基督教の影響を考一考せよ。吾人は常に其の有益なる恩恵を與へしことを見るなり。其の一夫一婦の教は彼をして世界萬教の上に立たしむるなり。此の點に於ては佛敎は彼に劣れること遙かなり。佛陀は女人の眞性を認識せざりき。人類殊に女人類は此の觀念を獨り基督教に負ふ。基督教若し此の觀念より他に一物も產生せざりきとするも、尙ほ此の觀念のみにて彼は萬教中の最高のものと思惟せらるゝを得可し彼は實に人類の半をして他の半の玩弄物及び奴隸たるの悲境中より救出せしなり。

更に基督教をして他の諸宗教より高等ならしむる一勢力あり。即ち降生の教なり。實に神人の兩性は基督の体に於て一致和合せり。而して之を例として各人此の理想、即ち神の如くならんとする無限の理想に到達せんことを教也。聖書に曰く、「天に在す爾曹の父の完全さが如く爾曹も完全す可し」馬太傳六〇四八然り而して各人此理想に臻達せんと努力するに於て總ての助は主なる基督より授

けられんことを約せらる。時は來りぬ。今や余輩は本章を終らざる可からず。簡單に左の言を以て基督教の影響を約説せん。曰く公平なる判者として吾儕は云はざるを得ず。宗教の一系体としては基督教は、其教義大に人類一般の進歩に適し、又之を裨益す。故に今日其の影響を蒙れる諸國民の世界中最も進歩したるものなるを見るも敢て驚くに足らず。而して今や進歩發達の或る程度に達せる國民は皆な基督教國の通法を採用せり。

終りに臨んで更に一言す可きものあり。夫れ基督教國に於て尙ほ殘存する罪惡獸慾の巨多なるは、ア、疑ふ可からず。基督教は尙ほ基督教國其物の内になす可き多くの物を有す。其の事業は未だ全く成滿したるに非らず。罪惡に對する彼が争闘は日に月に激烈を加へたり。而も尙ほ吾人は歐米に於ける基督教はアルヤン人種、總ての人種中最も執拗頑固なるアルヤン人種と争闘しつゝあるものなるを忘る可からず。而して爰に於てすら、彼は他の諸宗教が天性温良なる諸人種に向てなしたるよりも多くなしたり。若し夫れ基督教は強情なる歐洲のアルヤン人種に向てすら然か多くなしたるならば、其の將來アマア諸國民に向てなすならん事、與ふならんことの如何ばかりなるやは察するに餘ある可し。

第九章 倫理的及び宗教的教義の一系統として基督教を講説す。

基督教を講説す。

本章に於ては、上章に於て佛教の教義を講説せし如く二部に分ちて基督教の教義を講説す可し。第一には倫理の一系統として、第二には更に必要なる諸教義の一系統として。

第一部 倫理の一系統として基督教を講説す。

前章に説きし如く、四福音書は基督の言行を記録せるものにして、倫理の系統を開説したるものに非らず。基督は單に言の人にあらずして、實に行の人なり。吾人は常に或事をなしつゝある彼を見れば只説き又話す彼を見ること甚だ稀なり。只一度、吾人は彼より一の説教を聴くのみ。其は全く彼が宗教の倫理的原理を開説したるものなり。エルサレムに於ける彼の言説は諸人に與へたる道徳的教訓に非らず。其祭司及び教師に導かれたる猶太の人民が、上帝の幾千年間彼等の爲めに順備したまへる彼等の責任の頂上に登る可き時機を認識せざるが故に、非常に激奮されたる精神より噴出したる聲なり。彼を排斥するによりて、猶太人は人類に對する一大天職を成滿す可き唯一の機會を失ふなり。されば感慨胸に充ちて彼は是説をなせしなり。故に該説は誤りたる而も尙ほたゞし得る希望の存する或物によりて深く激奮されたる熱き心を現せり。

如説の次第なるを以て新約書に於ける倫理的元素は甚だ乏し。惟ふに之れ基督が何たる天祐を要せずして人間理性の自然に發達し得可きものとして殘しおけるなる可し。上章にも説ける如く、人間は普通の修身法を了解する爲めに、ことさらに天來の預言者を要せざるなり。隣人を愛し、

く我儕の負債をも免し給へ、我儕を試探に遇せず、惡より拯出し給へ、國と權と榮は窮りなく爾の有なればなり。アメン

祈禱の事に次で斷食の事を教へたり。其要に曰く。斷食も亦祈禱と同じく嚴密にす可し、決して人に見せんとて公にす可からず。若し人に見せんとて、之を公に行はば、之れ偽善者の業なりと。惟ふに基督は偽善者の大敵なりしが如し。實に世に宗教は多し多くの偽善者をつくるものなし。而して又宗教上の偽善者は之を看破するに困難なるものなし。故に基督は常に此の罪業に陥らざらん様注意す可きことを弟子等に教へたりき。或る所にては彼は祭司等を責めて國民の全体を偽善者となさんとするかと叫破せり。而して爰には其弟子等に向て、斯の危険なる誘惑に陥らざらんことを勧めたり。

次には、世の財を愛することを戒めたり。此の點に關する基督の教は甚だ明白なり。基督教は曰ふ。正實にして財を得るは決して罪に非らず。されど其を得たる時はよろしく社會の安全の爲めに之を使用す可し。人若し財を以て單に己が欲望及び貧慾を充たすの具となさば、彼は人間社會の害物となる。之れ世の財を保てる人々の肩上加へる所の義務及び責任に關する最も合理的なる説明なりと信す。夫れ財貨其物の罪惡にあらざることは辨するまでもなし。之れ亦神より賜はりたる恩恵の一なり。されど之を濫用し、又全く之を用ひざることは富者の肩上に多くのおもき責を負はしむるなり。次に人を議することなく、己れ自から己を議す可きことを教へたり。次に總ての困難に於て神の約束によりたのむ可きことを教へたり。人間の神に對する關係に關する基督の感想は宛も弱き兒童の其の父に對する感想の如し。兩親は常に其の弱き兒童を助くるに

備ふる如く、神は常に我等の患難の時、我等の祈る所をさし、又我等を助け給ふなり。只我等の必要とする事は神に對しては兒童が其兩親に對するが如き單純なる従服と愛を現はすに在り。次に天國に入ることの困難なるを説けり。人若し天國に入らんと欲せば、總ての靈力を働かさざる可からず。基督の言に曰く、穿き門より入れよ。沈淪に至る路は濶く、その門は大なり。此より入るもの多し。生に至る路は窄くその門は小し。其路を得るもの少なりと。次に眞正なる宗教家は行によりて知らる。決して言によらずと教へたり。其の言に曰く、爾曹其の果によりて彼等(眞正の宗教家)を知る可し。誰か荆棘より葡萄をとり、蒺藜より無花果を採ることをせん。凡て善樹は善果を結び、惡樹は惡果を結び。善樹は惡果を結はず、惡樹は善果を結ぶこと能ざる也。我を召で主よ主よと曰ふもの、盡く天國に入るに非ず、唯これに入者は我天に在ます父の旨に遵ふ者のみなり。

以上は山上の説教の大意なり。之れ道徳の原則及び宗教的生活の本精に關するよし唯一最良の教ならずとも最良の教の一なりと云ふを得可し。之れ實に依りて以て人々の宗教的生活を知る可き最良の標準なり。上文に云へる如く宗教は屢々偽善者の匿身所とせらる。されど基督は之を禁せり。而して明白に「其の果によりて彼等を知る可し」と云へり。偽善も眞の果の外貌を備ふ。されど其は必要なる又生命の料となる果にあらず。故に今基督教徒にして總て果を結ばず、只外部の見まへにのみ心を盡くす人々あらば、其の何人たるを問はず、余輩は直に其の用の既に失せたる人なるを知り得るなり。

社會を糾合する關係に就ては、基督は愛を以て主大の動力とせり。彼は宗教の本領を釋して、神

を愛し又人を愛することなりと云へりしは既に上文に説けり。然り而して神を愛するてふことは神の造り給へる人を愛することによりて證明されざる可からず。同胞を愛せずして如何で神を愛するを得ん。吾人は人を愛することによりて神に達せざる可からず。基督教は救へて曰ふ、人間は神の像に象りて造られたるものなりと。即ち人間は地上に於ける神の代表者なりと。されば吾人若し人間即ち神の代表者に對する義務を忘れなば、又神に對する義務を忘れたるなり。聖書に曰く、

人若し我神を愛すと云ひながら、而も其の兄弟を惡まば、之れ虚言を語るなり。蓋し目に見ゆる兄弟を愛せざるものが、如何で目に見へざる神を愛し得んや。

上章宗教と道德の關係を説きし時に云へる如く、社會を支配する道德的觀念の發達は人間自からのなす可きこととしてすておかれたるものなり。宗教の本分は更に高尚なる或物を社會に注入するにあり。而して其によりて社會は一段高き理想を目標とするに至る。今イエス、キリストが其の福音中に注入せしは即ち此の愛の理なり。若し基督教の主大動力たる此の愛の道を除去せば、基督教は實に世に稀れなる怪物と化す可し。此の主大動力を各行爲中に活動せしめよ。基督教は則ち人間の嘗て天より受たる最大恩恵となる可し。余の茲に諸君に向て乞はんと欲するは、只此の道を其の日常の一切行爲中に活動せしめ、只説教又は談話の上へのみ止めざらんことなり。吾人日常の各事各物に之を適用するに於て、實に其の光榮の最大發現、其結果の最美を見る若し人それなくは其の言ふ所行ふ所は、使徒パウロの切言せし如く、なる鐘やひやく乳鉢に異ならざるなり。

余輩は基督教々義の研究に入るに先だちて、尙ほ考究す可き一問題あり。即ち基督教會に於ける家族の關係是なり。基督の社會論を講説せざりしことは既に云へり。彼は人間社會の道德的發達に付ては敢て干渉せざりしなり。之を以て總ての方所、總ての時代に於ける教會の合意に任せしなり。されど家族に關しては場合は全く異なれり。彼は家族の觀念を以て一の宗教上の事柄となせり。

古代の民種即ちアルヤン、セミチック、及びモンゴリアンの如き開化民種又はアフリカの如き野蠻民種の何れにありても家族の觀念は、猶太の聖書中に見ゆる族長時代の觀念に異ならず。即ち一家族の父を以て該家族中最勝のもの、該家族の王となし、他は一切彼の命令に順從し、彼の言を服膺せざる可からざるものとす觀念なり。かゝる觀念は第一に一夫多妻の俗を生じ。第二に奴隸蓄用の俗を生ず。多くの妻妾及び多くの奴隸はかゝる社會制の下には自から必要となり來るものなり。

基督は其の説教の始めより、此の觀念に反對せり。彼は家族の整理に於ては男女兩性の同權なるを説けり。而して此の觀念は直ちに一夫多妻の俗を斷滅するに至らんことはあへてうたがふ可からざるなり。女性若し男性と同一權力を有せんか勿論一家族に於て其男性が自由に他の女性を其家族中に加ふること能はざるは辨するまでもなし。かくて家族の員數は大に減少し。隨て奴隸も亦多妻と共に消失するに至る可し。されば多妻及び奴隸蓄用の俗は真正なる基督教の原理に反對せるなり。然るに一夫多妻の俗は基督教會の初代より嚴禁されたりしと雖も、奴隸の蓄用は種々の形体を變じて吾人の時代までも連續したりき。されど今や總ての基督教國に於て此の習俗は全

く其跡を断ちたりと思ふ。又余の知る所にては今尙は一夫多妻俗と共に奴隷俗を固守するは只回々教國民のみなるが如し。

男女兩性同じ權力を有すと云ふは、基督の教なること、既に上文に云へり。故に基督教會にありては、男女一度婚を結ばず、姦淫の故ならずは、離別すること能はず。姦淫を犯すによりて只彼等の關係は斷絶す。而して無罪なる方は再び結婚するを得。馬太傳五章三十一、三十二、

夫婦たるもの、次に守る可きは子に對する義務なり(もつとも子のある場合のみ)親たるもの其子を養育するに於て大に勤めざる可からざることは新約書中諸所に教へらる。親たるものは其の子に接するに常に愛を以てす可し、怒を以てす可からず。又常に彼等を愛し、決して苦む可からず。以弗所書に曰はく、父なるものよ爾曹の子を怒らすること勿れ、主の警戒と教訓を以て養育べし第六節

孔教の經書に於ては、余輩は子の親に對して守る可き義務の記載せらるること甚だ多きを見る。雖も、親の子に對して守る可き義務の記載せらるること甚だ少なし。されど基督教は問題の兩面を見る。故に子の親に對するが如く、親も亦子に對する義務を有せりと説けり。茲に親の守るべき義務として與へられたる教誡は二重性なり。第一には彼等は其子に對しては刻薄なる可からず、主の僕に對するが如くなる可からず、眞に親たるの情を以て愛す可しとなり。第二には主の警戒と教訓を以て養育べしとなり。

子の親に對する義務は従服することなり。されど只の従服に非らず、愛より出でたる従服なり。兩親に従服せざることは、聖書中最大罪業の一として記載せらる。此點に關する聖書の教は其の嚴格なることに於ては、敢て孔門の教に譲らざるなり。

以上説述するが如にして、家族の整理せられたるとき、即ち妻は夫の右に坐し同權を有する補助者として彼を助け、敢て次等の地位に下らず、而して其の子には兩親共に愛を以て之に接し、愛を以て之を養育し、子も亦愛を以て親に仕へ、愛を以て其命に従服するとき、即ち基督教の所謂家族なるものは完成するなり。而して此の家族を單位とし之を聚合せば即ち幸福なる社會進歩的なる國家は組織さる可しとなり。

余は上來説述する所によりて、聊々基督及び其弟子等の教に従へる理想的國家の綱概を描寫し得たりと信ず。若し時間と紙面の許さんには、更に進んで如上の家族の觀念を基礎として其の上に建設されたる社會とプラトンの理想的國家とを比較對檢せん。今は時間もなく紙數の都合もあれば、遺憾なから之に説き及ぼさずして次の問題に移らん。但し余の見る所によれば、此の比較對檢によりて吾人は基督の説教せる人間社會の体制は希臘の哲學者及び後世其説を奉せる人々の主張する体制よりも遙かに勝れることを知り得可く、又基督教は如何にプラトンの説及び其他の希臘哲學と異なるかを知り得可しと信するなり。

第二部 諸教義の一系統として基督教を講説す。

今や基督教は數多の宗派に分れ、而して各宗自己の神學を有すれども、其等の諸神學は皆な後世種々の研究を経て、多くの歲月を経たる後、産出したるものなり。聖書其物の中には多くの教義の明説せらるゝを見れども、未だ確乎たる教義の系統の存するを見ざるなり。

されば問題は愛に存す。曰はく、「此等の諸教義の依て作られ、又完成せる神學系統の依て確制せられたる憑據(權威、權輿)は何所に存するか」。ルーテルの以後、近世の新教は教義の權輿として

は只聖書を認許するのみ。然るにローマ、カソリック教會及びギリシヤ教會は聖書の權威の外に、又教會の權威を認許す。即ち其の信仰の系統を形成するに於て人間の權威を認許す。然り而してローマ、カソリック教會は此場合に於て新教よりも大なる便利を有するが如し。彼は聖書の外に、人間理性の權威を認許することによりて、新教の立ち向ふ能はざる多くの困難に打勝てり。されど過ぎにし諸時代に於ては聖書の準許せざる又進歩的理性の排斥する多くの新しき教義教説中に自から己を埋めたりき而して其等の諸教義は法王中最も思慮なき人の創作せしものなり。但し爰に云々の教義教説と云ふは、法王無繆説、マリア純潔懐胎説等を指すなり。

今余輩をして基督教諸教義の系統を檢せしめよ。

第一に上帝存在の觀念を考究せざる可からず。之れ基督教の根柢なればなり。

(一)最勝實在者の存在の觀念、新約書中に於ては余輩は上帝の實在を推論辨證する所あるを見ず之れ基督及び其の弟子等は總て猶太人にして、且つ常に猶太の境内を出でざりしを以て、而して總て猶太人は上帝の實在を確信し、之を疑ふものあらば嚴刑に處せられし程なりしを以て、敢て其の必要を感せざりしが爲めならん。

然るにポロの改宗後基督教の汎く羅馬帝國內に傳播するに及んで、新福音の宣傳者は常に多神教偶像等と接觸し來りしを以て、彼等は千差萬様の八十萬神を崇拜する異教徒に向て、彼等の所謂神とは如何なる神なるかを明説するの必要に迫られたりき。一例をあげれば使徒ポロアゼンスに於て希臘哲學と接觸し來りしとき、彼は上帝の存在に對する彼が信仰を告白し、彼が地位を明説せざるを得ざりき。而して其の説述の明快遒健なる實にポロの口より出でしものなる事

疑はんとて疑ふ能はず。之れ有名なる希臘史家カルチニウスの主唱する見解なり。さてポロの言に曰はく、

われ途を行くとき爾曹が敬拜どころの者を見しに、識らざる神にと刻書し一の祭壇を見出せり。故に爾曹が識らずして敬ふ此者を我なんぢらに示さん。それ宇宙と其中の萬物を造り給へる神は是天地の主なれば手にて造れる殿に住たまはず。かつ衆人に生命と氣息と萬物を予へば物に乏きことなし。人の手にて事へらるゝものに非らず。また此神は凡ての民を一の血より造り、悉く地の全面に住せ、預め定め給へり。此は人をして神を求めしめ、彼等が或は揣摩する事あらん爲なり。然れども神は我儕各人を離るゝこと遠からざる也。それ我儕は彼に頼て生、また動、また存ことを得るなり。爾曹の詩人たちも我儕は其裔なりと云ひしが如し。如此われらは神の裔なれば其神を金銀または石など人の工と巧を以て造れる者と均しく意ふ可からず往者に蒙味し時は神これを不問に爲給しが、今は何處の人にも皆悔改むることを命じ給ふなり。蓋神すでに其立し所の人により義を以て世を鞠べき日を定め、此事に就ては彼を死より甦らせて其證を衆の人に予たまへば也。

爰に吾人は基督教神學の恰好なる綱概を見る。其の言は實に能く概括的に基督教思想の全域を明示せり。而して今其の各點を精細に研究せば以て基督教々義の全部に就て恰好なる觀解を獲取し得可し。されど爰には之をなす能はず。次の點に移らん。

基督教の第一、基礎の觀念は上帝存在の觀念なること既に述べたり。次に考究す可きは神の性質なり。新約書中諸所に於て吾人は、父と子と聖靈として神を叙するを見る。例はへ洗禮式に於て

は父と子と聖靈の名によりて洗禮を施す。馬太傳二十又約翰傳第一章に於ては基督は神の言、即ち神の想として叙せらるゝを見る。之れ言語は人間の理性を現はす如く、基督は神の理性即ち神の思想を現はすの義なり。

基督の神性に關して新約書中如上の文言あると共に、又神の靈を以て一箇の別体として示す處の多くの文言あり。馬太傳第十二章に曰く。

是故に爾曹に告ん。人々の凡て犯す所の罪と神を潰ウグスことは赦されん。されど人々の聖靈を潰

ことは赦さる可からず。言を以て人の子に背く者は赦さる可し。然ど言を以て聖靈に背く者

は今世に於ても亦來世に於ても赦さる可からず。三十一

聖靈に關する文言は其數多く、又其意明らかかなり父と子と聖靈としての体の別に關する此等の文

言よりして通例三位一體性説(三位一體説)として知らるゝ神學説は發達したるものなり三位一體と

は即ち神は其の性チヤクに於ては一なりと雖ども、其の体タマシに於ては三なりと云ふ義なり。

今述べし如く、三位一體性説は既に聖書中に現はると雖も、其の概念及び領解は人間理性の普通の

作法に反するを以て、之を會得すること甚だ難く、教會に於ても明かに信仰の一箇條として之を

記入するまでには多少の歲月を要せし程なり。ドルチル氏曰はく。

基督教の三位一體神説は非クリスチャン世界に於て創生せしものに非らず。されど其の本然

の内容は客觀的クリスチャン天啓よりクリスチャン信仰の意識に移れり。但し其の教會的概

念はクリスチャンの領解力の勤勉より起れり。神に對する應有的ユニテリアン教説と永續せ

る争闘の進行に於て、教會はかくして永く異教的及猶太教的元素によりて困められたるが今

各種のモナルキアン説を超越し、三位一體性として神を觀念するまでは意識的に其の信仰の傳來を保存すること能はずと確信に達したりき。(ドルチル神學第一卷三六一頁)

右引用せるドルチル氏の言に於て、三位一體性説は漸々教會に因て發達形成されたるものなるを見る。第一には其の創説者の意識中に存在せり、第二には教會内にありし猶太的異教的元素の攻撃に對する城堡として用ひられたり、第三には其を形成するに於て教會は屢々種々の形体にて現れたるユニテリアン傾向及び反對と争はざるを得ざりき、第四には基督教普通の教義にして、之を捨てたる宗派は直ちにクリスチャンと稱すること能はざるに至る。余輩はドルチルは此の重大なる事柄に關する基督教徒の思想に付て正しき解説を與へたりと信するなり。

次に吾人は三体各々相互の關係及び彼等が職務を考究せざる可からず。父は神性の根原として頭に立つ。宇宙創造の職は彼に屬す。子の職務は罪の内より人類を救ひ出し、又真理の道を彼等に示すにあり。聖靈の働は人類が基督の啓示せる道に進みて其の理想に達せんとするを助くるにあり。子と聖靈の二者は父宇宙を創造せるとき之を助けたりしが、又之を保持することをも助く。三位一體の觀念は印度及び埃及の古き宗教の或るもの、内に發見せらる。されど基督教の三位一體的觀念は全く基督教的にして、又異教國民の多神教或は猶太の一神教とは全く別派のものなること、疑ふ可からず。

されど該教義を辨護し又之を疑議するは本書のあづかり關する所にあらず。余は只歴史的立脚地より如上の解説を與へたるのみ。余は又爰に此の教義が遂に信條の系体中に受容せらるゝに至るまで、多年間教會を苦めたりし此教義に關する論評を叙述する能はず。かゝる業をなすは教會歴

史の本職なり。されど讀者は上述する所によりて、基督教の根柢たる、又之れなくしては確かに基督教は一の獨立なる團體として瞬時も他宗教と對峙すること能はざる此の三体一性説に付て明かなる觀念を得られたらんことを望む。

天地創造説に付ては、基督教は猶太教の教説を受容せり。而して父は子の手を通じて宇宙を創造せりてふ觀念の外、別に斬新のものあるを見ず。

萬物これに由て造らる、造られたる者に一として之に由らで造られしはなし。約翰傳第一卷三節

且つイエス、キリストを以て萬物を造りし神の中に世の始めより以來かくれたる奧義如何を衆の人に悟らしむ。以弗所第一卷九節

右引用せる所によりて見れば、基督は神の理性なり、智慧なり整然たる宇宙の秩序は基督によりてなりあがれるものなり。

神と宇宙の關係に付ては、基督教の思想はヘブライ一神教的にして、神物同視する印度凡神教の思想とは全く異なれり。基督教は猶太教の如く、神と宇宙とは別体のものなり而て彼は創造者として、宇宙は受造者として相關係す。又前者は無限的にして、後者は有限的なり、神は恒久不變にして、宇宙は常に變遷するものなりと教也。

宇宙間に於ては人間は獨り萬物の主長なり。一切動物は彼の下の下にあり。彼は靈を有す、而して彼等は之を有せず。靈を有するを以て、人間は愈々高等なる發達を成すを得れど彼の心裡には又始祖より傳はれる罪惡の傾向あり。而して基督の天より下り、十字架上に斃れたるは、即ち此傾向を治せんが爲めなり。總て彼を信じ、彼が足跡を踏むものは此の遺傳病より救はるゝを得可し。

基督の足跡に従ふには、彼が教會に入らざる可からず、教會とは地上に於ける彼が奉信者の團體、地上に於ける神の王國なり。人々の教會に入らんと欲せば、先づ其の入らんとする教會の教義に従ひて聖き生活を送るべきことを告白せざる可からず。此の誓約に次で、彼は父と子と聖靈の名に依て洗禮を授けらる。而してその時より彼は新しき政府即ち神の王國の一臣民となりサタンサタンの政府は彼の上に權力を失ひ、而して彼の以前に犯せし罪は悉く宥さる。

此の洗禮式は猶太教の割禮式の地位におかれたりしもの、如し。故に家族全体に適用さる可かりき。小兒は其幼時の間兩親の監督の下にありて、兩親と共に一家族を組織すると思惟せられたりき。故に兩親の授洗されしときは、尙ほ彼等の監督の下にある處の小兒も亦授洗されたりき。之れ少くも改革時代まで初代の基督教徒の了解し又實行せし所の思想なり。

洗禮式に次で均しく緊要なる式あり。聖餐式と云ふ。今此の式の起源を尋ぬるに左の如し。イエス賣さるゝ晩に、パンをとり謝して擘き、弟子等に予へて曰けるは、此は爾曹の爲めに予ふる、わが身体なり、我を記ん爲めに此を行。また食してのち杯をとり曰けるは此杯は爾曹の爲めに流す我血にして、立る所の新約なりと。之れ即ち聖餐式の權輿なり。

さて此の儀式は單に一種の記念式として制定せられしものに非らず、其旨趣には更に或る意味を含めり。即ち之によりて吾人は昇天せる主と結合し一致するの旨趣を含めり。若し夫れ單に紀念的のものなりしならんには、基督はパン及び葡萄酒を以てことさらに之れ我が体なり之れ我が血なりと云ふの必要なし。基督は紀念主義記號主義よりも更に進めり。而して總て其を受けたる人々は其れによりて彼と一致し、彼の犠牲を分受し、又彼の足跡に従ひ得る一種の聖式を制定せり。

吾人は常に彼を記憶せざる可からざるなり。何ぞ聖餐式を受くる時のみに限らんや。愚案するにイエス、クリストによりて制定されたる聖餐式に關しては、正統派基督教の教説はプロテスタント基督教の教説よりもよく該式の精神及び該式の制定されし時に適合するが如し。確かに該式は一種の記念式と云ふよりも更に多くの或物を意味するものなり。

右の聖餐式及び洗禮式は總て基督教會の二大聖式なり。古代の或る教會は病人結婚等の聖別式を加へたり。但し總て此等の儀式は新約書の諸處に記載せらるゝを見らんと雖も、されど基督自身の制定せしものと見へず。

以上の二大聖式の外又基督自身の命じ玉へる二事あり一は祈禱にして他は斷食なり。

祈禱に於て吾人は神と一致す。之れ吾人の神に近づき得る唯一の方法なり。而して祈禱は二箇の方法にて行はる。(一)は箇人的即ち私の祈禱なり。此の場合に於ては吾人は神と交通しつゝあることは何人も之を知らず。之れ神人秘密の交通なり。(二)は公の祈禱なり、之れ基督の教會に屬する人々が一所に集會して、共に祈禱をさゝぐるを云ふ。此種の祈禱の早代より行はれたること疑ひなし、且つ各日曜日の教會集會及び其他の教會集會の基礎とせられたりき。實に長年月の間、基督教をして其の無敵の強敵の攻撃に反抗し、能く其の團結を維持せしめたるは公の集會なり。更に公の祈禱と私の祈禱の中間に立てる一種の祈禱あり。即ち家族の祈禱なり。之れ全家族一室に集りて行ふ日常の祈禱を云ふ。此の場合に於ては父は其の家族の長として僧侶の用務を辨す。一々の家族に於ては、父は最勝者なり。而して眞理と正義の道に其家族を導くは彼の義務なり。然り而して日々受けし恩恵を謝し又來らん時の間にも常に恩恵を興へ玉はんことを懇願する

簡單なる祈禱を以て、其の目を始むるより、他に此の大義務を盡し此大天職を成滿するの道なし。

余輩は來世の状態即ち人間死後の状態に關する基督教の觀念に移る可し。

さて基督教は猶太教の上に建てられたるもの、否な寧ろ猶太教より發達したるものから末世に關してはヘブライ人の有すると同じ教説を有せり。但し其の説述猶太教よりは一層明白なり。其説の要は左の如し。人間は靈物二体より成立す。即ち靈と肉より成立す。死は單に人間が更に高等なる存在に發達する一状態に過ぎず。宛も地に蒔かれたる種子が一たび死し、又腐敗したる後に、一の植物は發生し、強健に生長し、又果を結ぶ如く、箇人も亦土を以て被れたる時に、智慧及び其他一切の性能の更に高等なる域に發達し得可き境に移る。此の點に於ては、猶太教の思想は甚だ明亮ならず。されど彼等も亦確く此教説を信せしとするに非らずんば、正しく説明し難き多くの文言ありて舊約書中に存す。とにかく靈魂不滅の説は基督教の礎をなすものなり。而して此の證として基督教の教師等は基督教復活の例を擧ぐ、哥林多前書第十五章に曰く、

キリストは死より甦りしと宣傳ふるに、爾曹のうち死より甦ること無しといふ者あるは何ぞや。もし死より甦る事なくばキリストも亦甦らざりしならん。キリストもし甦らざりしなら

ば我儕の宣ふるどころ徒然また爾曹の信仰も徒然からん。十二節 十四節

さらば若し死より甦ることなからんには、基督の宗教は徒然かる可し。換言せば建設さるゝ必要なかる可し。佛教に於ては其の全体の傾向は出来るだけ人類をして箇人的存在の永續を斷絶せしめんとするにあること既に前諸章に於て學べり。涅槃寂靜に達すること早ければ早きだけ幸なりとは、彼の教ゆる所なり。而して靈魂の不滅を信するを以て最大の異端となせり。基督教は正に

其の正反對に立つ。彼は靈魂不滅説の上に其の宗教を建設し、其と共に立ち、又其と共に倒る。是れ二者の互に大に異なる點なり、されど余輩は爰に此等の二教義の孰れが能く人間の理性に適切するか、孰れが能く、哲學科學の近世の成果に和合するやを辨論する能はず。只一事を指示しておかん。即ち箇人的存在は恒久的發達の法則の下にありて無限の時間を貫通して永續する觀念は、何たる他の觀念よりも能く、否な最も能く人類の進歩を獎勵する事是なり。余の見る所によれば、此の教義は一切他の諸教義よりも能く、樂天思想を激発す。正當なる方法にて其の時と能力を利用せんとするの精神を挑發し、又此精神の實現に向て大なる勇氣を興ふ。彼は人間の存在は目的なき夢幻に非らざることを教也。人間は或る盲目なる物質的原因によりて卒然出現せる物質的要素の集合体にあらずして、創造者が睿智的働作の睿智的部分なるを教也。實に基督教をしてシヨペンハウエルの厭世説ハルトマンの無意識説よりも一段高位に立たしむるは此の通識哲學にぞあるなる。

基督教に於ては又此靈魂不滅説に結着する一教義あり。即ち未來賞罰説なり。基督教の教に従へば、此世界に於ける人間の生活は無限の生活の初めなり。而して此世界の生活には二條の道ありて人は孰れなりとも自由に進行するを得。其の二條の道とは、一は報賞に至る道にして他は刑罰に趨く道なり。而して中間の道なし。只此の二道あるのみ。正義及び報賞に至る道は甚だ狭小にして且つ險惡なり。されど罪に趨く道は甚だ廣大にして且つ平坦なり。と云ふ義は、徳及び正義の實行は罪業を犯すは容易にわらずとなり。されど終極の果に至ては大に異なれり徳及び正義の難行道を撰ぶ人は永久に進歩す可し。かゝる生活の報賞は窮りなき天國の福樂を享くることな

り。其人は死後神の前に至り、而して彼のさきに其處に至れる天使聖者等の仲間に入る可し。此の天國と云ふは即ち一切の聖人哲學者等が幾千年間獲得せんと思考せる理想の終極なり。プラトンの時より今日まで總ての學者が就て思念し又著述し、而も何の果をも得ざりし共和國なり。其は完全なる幸福及び安寧の社會なる可し。而して其の國即ち天國の住民は其の時の半を神を讚美する爲めに費し、又他の半を世界の住民に送らるゝ惠の命令を傳ふる爲めに費すが如し。

舊新兩約書中に見ゆる所にては惡人の受く可き刑罰は熄へざる火にて焼かれ、而して火にて焼かるゝことが肉体の上に生ずる一切の苦痛を受くることなり。爰に火と云ふは眞實自然の火の義にして、又邪道を歩める人々は終に悉く墮落す可き火の池火の海ありて實存すとの義なるか。或は天國より追はれ神の前に到り、聖者の社會に入る能はざる人々の受く可き苦痛を、單に具體的、比喩的に現はしたるものに過ぎざるか。少くも今日にては基督教國の人々の見解一致せざるが如し。左に基督自身の言を擧げて以て、此の善惡の終りの裁判の有様を示さん。

人の子おのれの榮光を以て諸の聖使を率ひ來る時はその榮光の位に坐し、萬國の民をその前に集め、羊を牧ふ者の綿羊と山羊とを別つが如く、彼等を別ち、綿羊をその右に、山羊をその左に置く可し。斯て王その古にをる者に曰はん。吾父に惠まるゝ者よ來りて、創世より以來なんぢらの爲めに備られたる國を嗣げ、蓋なんぢら我が飢へし時われに食せ、渴しとき我に飲せ施せし時われを宿らせ、裸なりし時われに衣せ、病みしとき我をみまひ、獄に在しとき我に就ればなり。是に於て義者かれに答へて云はん。主よ何時なんぢの飢たるを見て食はせ、また渴きたるに飲まし、乎。何時主の旅したるを見て宿らせ、又裸なるに衣せし乎、何

時主の病また獄に在を見て爾に至りし乎。王もたへて彼等に云はん。我まことに爾曹に告ん。既に爾曹わが此兄弟の最徴者の一人に行へるは即ち我に行しなり。

遂にまた左にをる者に曰はん。罰せらる可き者よ、我を離れて悪魔と其使者の爲めに備へたる熄ざる火に入よ。蓋なんぢら我が飢し時われに食せず、渴しき時我に飲せず、旅せし時われを宿らせず、裸なりし時われに衣せず、病また獄に在し時われを顧されば也。是に於て彼等また答へて曰はん。主よ何時なんぢの飢又渴また旅し、また裸また獄に在るを見て主に事へざりし乎。其とき王もたへて彼等にいはん。我まことに爾曹に告ん。此最徴者の一人に行はざるは即ち我に行はざりし也。此等の者は窮なき刑罰にいたり、義者は窮なき生命に入る可

馬太傳第廿五章
三十一、四十六

爰に基督の火と云へるは自然的の火を意味するか、又は單に心靈上の苦痛を形容するに過ぎざるか、即ち神を離れ、天國に入る能ざる人の受く可き心靈上の苦痛は、肉体の火に焼かれたるときに受くる苦痛の如く激烈なりとの意か、確然斷言することは難し。蓋し神の大能力として火炎に充ちたる大海を造くるぐらひは敢て難きに非ざること、吾人の信じて疑はざる處なり。されど基督は果してさる意味にて爰に火と云へりしか疑なき能はず。而して彼は爰に心靈上神より分離することを意味せりとなすこと、最も蓋然的なる解釋なるが如し。使徒ポロは復活に於て箇人的存在の全体は心靈的存在と化す可しと云へり。若し然らば、總て天福又は天苦は物質的なるより寧ろ心靈的なる資質のものと解するが適當ならん。茲に余輩は基督教を其の歴史的方面及び教義的方面より描寫せんとする計畫を成滿せり。其の説

ける所の深遠ならずして單に表面的に止りしは、蓋し本書第一部の性質上實に已を得ざるなり。然ど第二部に入り、各宗の諸教義を比較、對論するに至らば、深く彼等が底蘊に進入して以て痛快なる批判を試みる。

今本章を終らんとするに當て、總ての基督教派の受容信奉せる二種の信條を示さん。第一は使徒信經と稱せらる。但し其名は使徒信經と稱せらると雖ども、恐くは後世の産出ならんと思はる。

我は天地の造主、能はざる所なき父なる神を信ず。

我は其獨子、我らの主イエス、キリスト、即ち聖靈によりて孕みし處女マリアより生れポン

テヲヒラトの時、苦を受け、十字架に釘られ、死して葬られ、陰府に下り、三日目に死人の中

より復活り、天に昇り、能はざる所なき父なる神の右に坐し、彼處より生る人と死せし人を

裁判せんか爲めに來り玉ふ主を信ず。

我は聖靈を信ず、我は普き聖公會聖徒の交接、罪の赦免、身体の復活、永遠き命を信ず。ア

ーメン。

第二はニケヤ信經と稱せらる。蓋しコンスタンチン大帝がニケヤ市に於て召集せし大公會の開會中に組織されたるものなるを以てなり。既に前章中に述べし如くコンスタンチン大帝は基督教を信奉せし羅馬帝國第一の皇帝なり。而して帝の治世中神と基督の關係に付て大諍論始まり、遂に二大派に分れたりき。一は基督の神性を主張し、他はアリユスと稱する監督に誘導せられユニテリアン流の觀解を唱説せり。コンスタンチン帝は此の問題の永く結着せざるを見、且つ宗派の争よりひきて帝國の安危に及ぼさんことを恐れ、乃ち上述の公會を開設したりしなり。時は西紀後

三百二十五年なりき。而して爾時基督教國の諸方より集り來れる監督殆んど三百十八人ありき。其の會議は數月間連續したりしが、終に左の信條は制定せられ、而してユニテリアン主義は眞正なる基督教を表はせるものに非ずとして排斥されたりき。後該信條は前上の信條即ち使徒信經の如く基督教諸派全体の確定信條として今日に傳はれり。但し右二者は其の性質上毫も差違なきものなること、彼等を比較對照せば明らかに知らる可し。只ニケヤ信經は基督の性質に關する句をや、布衎修飾せることに於て使徒信經と異なるのみ。

我は能はざる所なき、父なる獨一の神、天地を總て、見ゆる物と、見えざる物の、造り主を信ず。我は獨一の主、イエス、キリスト神の生給ひし、獨の聖子、即ち總ての世の前に、父より生れ、神よりの神、光よりの光り、眞神よりの眞の神、造られずして生れ、父と一體にして、萬物を造り、人なる我儕の爲、又我儕を救はんが爲めに、天より下り、聖靈に因て、處女マリアより肉体を受、人となり我儕の爲めに、ポンテオピラトの時、十字架に針られ、苦楚を受け、葬られ聖書に従ひて、三日目に復活へり、天に昇り、父の右に座し、生る人ど、死せし人を、裁判せんが爲に、榮光を以て、再び來り給ふ主と其國の終りなからんことを信ず。我は聖靈なる主、命の與へ主、父と子より出で、父と子と共に拜み崇められ、豫言者によりて言給ひし主を信ず。我は「アポストロ」の普き一の公會を信じ、罪の赦しを得んが爲めに一の「バプテスマ」を信認し、死せし人の復活と、後の世の命を望む。アーメン。

若し右の二信條の外、廣大なる基督教文學の全体は悉く消滅することあるも、余輩は只彼等によりて以て基督教は如何なる根本的觀念の上に其の諸教義を建設せしかを了解し得可し。

第十章 摩哈嘿教(回々教)

余は摩哈嘿教をも亦、三章に分ちて講説せんと欲す。最初の章即ち本章に於ては、本宗研究の材料及び本宗發生の因縁を講述し、次章即ち第十一章に於ては、本宗開祖の傳記及び爲人、本宗の傳播及び其國民上に及ぼし、影響を叙述し、最終の章即ち第十二章に於ては、一の教義的宗教として本宗を講説す可し。

さて余輩門外漢に向ては殆んど探知し難き奇質を有する一宗教を研究する難事に進入するに先だちて、余は先づ余の依據せし材料に付て少しく述べおかん。之れ又讀者諸君の後一層深く本宗を研究せんとせらるゝ折の參考ともなる可し。

摩哈嘿教に關する外國人の著作は甚だ僅小なり。而して摩哈嘿教徒自身の手になりしものは信據する能はず。されど幸にも一書の存するありて、内には本宗に關する萬般の智識を包藏せり。其一書とは即ち古蘭なり。故に若し古蘭の傳存するなからんには、本宗の研究は甚だ困難なるものあらざる可し。さて古蘭は摩哈嘿自身のかき下せしものなりと云ふ傳説には、未だ疑訝を挿みし學者なく、且つ其の編纂記録されし以後、毫も之に添加せしものなきを以て、今日吾人の實看し得る古蘭は實に預言者摩哈嘿のかきしまゝなる可し。而して其の言語甚だ美はしく、亞刺比亞文學中之に匹敵するもの一もあるなし。實に摩哈嘿教徒が本書の天來を主張する最大證據は其の言語の美はしきにあるなり。今茲に本書の如何にして完成せしかを述ぶるは敢て無用にあらざる可し。摩哈嘿は屢々寂莫たる深山、幽窟の内に退きて、爰に數日を費し、而して其の幽窟を出づる毎に

古蘭の一章又は數章を携へ來りて、之れ天使ガブリエルによりて天より傳へられたるものなりと云へり。而して其地の人々、殊に反對者が彼の所説の眞實を疑ふときは、彼は常に答へて曰へり。爾曹若し我が云ふ所を信せざれば、よろしく行きて、かゝる高壯なる言語にて述べられたる一章だに携へ來れど。左に古蘭によりて詳しく彼か言を示さん。

斯古蘭は神の外、如何なる者によりても編述さるゝ能はざりき。されど斯書は其の前に啓示されたるもの、保證、聖書の説明なり。一切萬物の主より送られたるものなり。之れ疑の挿む可きなし。若し人ありて摩哈嘿其を偽作せしに非らずやと云はゞ答へよ、されば爾曹はかくの如き一章をだに持ち來れ、而して若し其實を告ぐるならば神の外汝は誰に向て其の祐助を求め得るやと。(阿爾古蘭第一卷如那品)

摩哈嘿は其生時の間既に懷疑家に對する方策を預設せしこと明らかなり。懷疑家に對しては彼は常に云へり。爾曹我教を信するか、若し然らずば此の如き教を案出せよと。而して彼は終に勝利を得たりき。總て反對者をして縫口沈黙せしめたりき。反對者は彼の教の如きものを案出すること能はざりき。著者は多年間亞刺比亞語及び其他のセミナツク諸國語を學べり。而して今、舊約書中詩歌的なる部分僅少を除きては、一瞬間だに古蘭と比較され得可きものなしと云ひ得るなり。もつとも古蘭は散文にてかゝれたるものなれども、其の聲調よく整ひ、之を朗讀せば宛も詩歌を吟詠するが如き感あり。セミナツク國民殊にシリヤ及びアラビアにありし基督教徒は之に匹敵する、否な出來可くは之に勝れる文章をさへ、作成せんと試みたりしが、總て其功を奏せざりき。今や文章又は其所詮の美はしきを以て、其の書の始源の人間のならざるを證する能はざるは云ふ

までもなし。若し古蘭の文章の美はしきを以て其の始源を神明に歸せば、セキスピアーや、マコレの作をも亦然かせざる可からず。但し今古蘭を以て文學上の一生産として、之を見るに於ては、吾人々類、殊にアラビア語を學ぶ人々は摩哈嘿に向て大に謝する所なかる可からず。蓋し亞刺比亞語に於ては古蘭を除きては、他に見る可き書の存するもの甚だ僅少なればなり。

譯者曰、百十三
章は百十四
章の誤なる可
し。

さて古蘭は百十三章に分たる。悉く天使カブリエルによりて神より預言者摩哈嘿に傳へられたるものなりと云ふ。最長の章には二百八十六節あり。該章は牝牛品と稱して、古蘭中第二章に位す。之れ舊約書出埃及記第三十二章の復寫なり。但し出埃及記第三十二章には、猶太の人民、埃及より通れて、荒野に入り、爰に多年を過す間、其の先導者たるモーセ神の法律を受けんため、シナイ山に登りしあとにて、該人民が黄金の犢を作りて之を拜せしことを記す。

又最短の章は三章あり。各章只三節を有するのみ。

古蘭の各章は又左の語を以て始まる。譯者曰、但し第九章に於てのみ之れなし。而して其の理由に就ては種々異論あれども爰には之を述ぶる能はず。

之れ又回々教徒が總て事をなさんとするに當て先づ誦する句なり。

第一章は摩哈嘿メッカに於て天より受けしものと云ふ總て誠實なる回々教徒は祈禱として之を用也。其の用法基督教徒の主禱文を用ゆるに同じ。左に之を擧げん。

萬物の主なる、最大慈悲者なる、裁判の日の王なる神に讚美を捧ぐ。我儕は汝を拜し、又汝

より祐助を離む。我儕を導きて正義の道、汝の恵む人々の道に進ましめ給へ。汝の怒を蒙れる人々の道、又迷へる人々の道に至らせ玉ふ勿れ。譯者曰、「萬物の主」を譯せる語は「アラビヤ」語にては「アララミナ」は諸世界の義なり。故に直譯せば「諸世界の主」と云ふ可し。然るに著者は「ロートレット」の會社出版の英譯古蘭の譯を可とせし「セ、ロード、オ、オ、アル、クリナエナス」の義に解せられたるを以て、爰に萬物の主と譯せり。但し該英譯古蘭の附註によるに「アララミナ」は諸世界の義なれども、古蘭中には正しく、人間、鬼神及び天使の三種の靈性を意味すと云ふ。最終の章は人間品と稱せらる。之れ亦、毎日の祈禱として用ひらる。されど第一章の如く汎く用ひらるゝに非らず。而して其所詮はや、佛教の祈禱に類す。

我は、我を奸猾に(神より)遠ざけ、人間の心に邪事を起さしむる陰唆者(惡魔)の害より又人間及び鬼神より遁れんために、人間の主、人間の王、人間の神に行く。

回々教の信條は甚だ短く又簡なり。古蘭の第百十二章是なり。

神は一神なり、永遠の神なり。彼は生まれず、又生まれず。而して彼の如きものなし。

之れ基督教に對して提出せる教なること明らかなり。回々教徒は大に該章を崇敬し、其の價值は全古蘭の三分の一に適すと云ふ。新しく該教に入る人は、先づ該章を誦讀せんことを命ぜらる。

古蘭の或る章には其の初に或る文字を附加せり。而して其意義に就ては衆論區々たり。左に二三の例を擧げて之を説かん。例へば第七章阿爾阿羅布品阿爾阿羅布とは地獄煉獄の分界の儀の初めには、A、L、M、S、の四字、第十九章迷理品基督の母なる迷理の事の初めには、K、H、I、A、S、の五字あり。其他の多くの章の初めにも相似たる文字あり。左に諸の解説を列舉せん。

(一) 通例回々教徒は、其等の文字を以て全く解説し難きものなりとなし、而して其の内に含有する秘密は只神と預言者のみ之を知り、人間は決して之を知る能はずと信ず。(二) 其等の文字は只

讀者の注意を牽く爲めなり、と主唱するものあり。彼羅門教の章節にも略なる文字ありて、始めは只讀者の注意は字街の創造者せらるゝに、後には一の神とせられ遂に至りしこと第五章に説けり。(三) 是れ各次章の主意を示すものなりとなすものあり。(四) 各章中主要の語の主要の文字なりとなすものあり。(五) 或る學者等は各文字夫れ〳〵に一の意味を含むひとして解説す。例へば上に示せし如く、第七章の初めにはA、L、M、S、の四文字あり。而して今此派の人々の解説する所によればAは神アハム、Allah、Lは天使ガブリエル Gabriel、Mは摩哈嘿 Muhammed、Sは平和アサラム、Salamを意味す。

以上古蘭中最とも緊要なる數章、古蘭一般の組立、及び其言語の美はしきこと等に付て述べたり。次に古蘭の内容の性質に關する余輩の見解を述べ可し。今此の點に關する余輩の見解は左の數語を以て約説するを得。曰く、古蘭は其の言語の美はしき程度だけ、否なそれよりも多く、其の内容は趣味なく、精神なし、否な多くの場合には全く愚昧の言に過ぎず。而して左の二事實を以て此言を説明するを得。(一) 全篇單調的なり。之れ屢々同事を反復するより起る。(二) 辱す可き抄偷主義なり。其の内に存する猶太教及び基督教の聖書よりの引用は皆て人間の作りたる最も辱す可き真理の倒亂なり。之れ明らかに摩哈嘿は猶太基督教の聖書を熟知せざりしことを示す。若し然らざらんには、彼はかゝる誤謬を犯かさざりしならん。余は爰に新舊兩約書中より彼が引用せし全体を掲載する能はず。蓋し古蘭全体の三分の一は兩約書中より引用せるものにて、成立すればなり。されど吾人の驚く事は茲にあり。曰はく、何故に摩哈嘿の引用はかく誠實ならずして扭歪的倒亂なるかと。而して之れ彼は直接に猶太教及び基督教の聖書を研究せしにわらずして、第二の手を通じて之を學びしによる可しと云ふより他に満足なる解説わらざるなり。又一説

あり、曰はく、摩哈嘿古蘭を編纂せる時、サルギユースと云へるシリア人の補助を受けたりと。されど余の管見は之れなり。曰はく摩哈嘿は其旅行中に見聞せし諸般の傳説中より此等の物を書きしならん。

本書最終の章に於て、摩哈嘿の教義を講述するとき、余は古蘭中より多く引用せん。以て讀者をして該書所載の事柄の如何を更に明解せしめん。

古蘭は總て回々教徒の神聖視する處の書なるからに、大なる尊敬と注意を以て保存せらる。而して該教徒は「ラママン」と稱せらるゝ月の間に之を朗讀するを例とす。之れ斷食の月なり。此時には各信徒は朝より晩まで全く諸種の食を斷ち、而して終日古蘭を朗讀す。かくして此の斷食の三十日間には該書は數度讀了せらる。爾後彼等は之を皮箱の内に收め、翌年「ラママン」月の立ちかへるまでは再び之を繙かず。又該書の用語は全くアラビア語なるを以て、之を了解するもの甚だ僅少なり。余は二億萬の回教徒中之を解するもの實に一千万に過ぎずと斷言するを敢て憚らざるなり。更に其朗讀せらるゝ時期は只毎年一ヶ月に過ぎざるを以て、隨て其の信徒日常の生活上に及ぼす影響は基督教國に於ける聖書の如くに大ならざるなり。但し基督教界に於ては、聖書は日々各家族内に於て朗讀され、又各日曜日には會堂に於て牧師の説教あり。

タトヒ回々教徒は外國語を以て古蘭を翻譯せざりしと雖ども、歐洲の學者は殆んど基督教國內の各言語を以て之を翻譯せり、佛語譯あり、獨逸語譯あり、魯西亞語譯あり、伊太利語譯あり、西班牙語譯あり、英語譯ありて存す。而して英語譯には二種あり。何處にても容易に購求するを得可し。第一は前世紀の中頃に存在せしジョヨイヤ、セール氏の譯なり。氏は其譯に附するに緒論及

び略註を以てせり。此等を見て、余は回々教に關する氏の智識の實に博大なるに驚く。外國人にして氏は深く該教の教義文學に精通せるものは稀なる可し。該譯は近年ロンドンなるロートレンツ會社より出版せり。其價甚だ廉なれば何人も自由に購讀するを得可し。

第二の英譯はマクニス、ミニョラー氏出版の東洋聖典集中なる故バルマー將軍の手に成りしものなり。今之をセール氏のに比較するに余は其の百餘年後に出でたるにも拘はらず、又其の亞刺比亞語學の研究の大に進歩せる時代に出でたるにも拘はらず、別に勝れたる點あるを見ず否な彼に對して一步譲る所なきかを疑ふ。

英語を以て記したる古蘭の註釋書中には、ホエリー氏のを以て最良とす。四卷あり。他にも歐洲語にて記したるもの存するならんが、余は未だ之を知らず。

古蘭の原書に付ては、余の知る限にては、互相殆んど同一にして其間大差あるを見ず。勿論全卷一人の手になりしものなるを以て、其の校合保存等は新舊兩約書よりも甚だ容易なりしならん。余は古蘭の原書三部を藏す。一は千七百七年前に筆記されたるもの、二は百八十五年前に筆記されたるもの、三はコンスタンチノープルに於て印刷されたるものにして未だ十年を経ず。右の三本は其年代の差上述の如く大なりと雖ども、其原文の間、別に差違あるを見ず。又古蘭最古の書本は現今セント、ピタースブルフ圖書館に保存せらる。之れ今より二十年前魯軍中央亞細亞に侵入せし時、ホクハラ府の大寺院にて奪取せしものなり。但し該本は今より殆んど千二百六十年前摩哈嘿の次の代に筆記されたるものなりと云ふ。されど余の所藏する書本は甚だ古く、又貴重なるものなり。之れ千八百八十七年余の日本に渡る途中、波斯に於て回教徒より得たるものなり。余

は爰に之を携へ來りて君の劉覽に供せんと欲したりしかど、或る理由によりて博く諸人の閱覽し得る場所に送りたれば、今諸君の閱覽に供し得るは他の二本のみ。

回教徒の手になりし註釋は甚だ多し。されど爰に之を列擧するの必要なし。註解附の亞刺比亞語古蘭にて最良なるものは、千八百八十年即ち今より百五十年前ベルシャのダブリツに於て出版されたるものなり。古蘭の書本は今日にありてすら甚だ稀有なり。而して其價甚だ大なり。されど富祐なる回教徒は其價を顧みずして之を得んと欲す。余は幸にも、二部まで古き書本を藏するを喜ぶ。

摩哈嘿教の研究に於て、上述の古蘭及び註釋に次で、緊要なるは摩哈嘿の傳記に關する書なり。其等の書中にて左に三書を擧げん。(一)最良の摩哈嘿傳は恐く蘇國人ムイル博士の作なる可し。氏は多年間印度に住し、印度にある該教の信徒に就て實地の研究を施したる人なり。(二)獨逸人、ムイル博士の作なり。氏も亦多年間印度及び他の回教諸國に住し、回教文學に付ては博大なる智識を有せし人なり。(三)セイド、アフメド氏の摩哈嘿傳なり。該書の價値は其の内容に存せず。只其の著者は回教徒にして、且つ其の名セイド(主の義)の意味する如く、預言者摩哈嘿の苗裔なりと云ふ點にあり。

上述せるセールス氏の緒論は甚だ貴重なり。又其の附註は該教の研究者に對しては實に好指南者なり。

レナン氏の回教論は甚だ面白し。されど氏の他の著作の如く、誠實を欠くに似たり。

余は今本題を終るに當て、回教研究の一奇質に諸君の注意を牽かんと欲す。何をか一奇質と云ふ。

即ち世界萬教中にて只一部の書を研究するのみにて、其の宗教の全体を知り得るは恐くは獨り回教に限らんと云ふ事はれなり。總て他の諸宗教は教義發達の歴史を有す。基督教及び佛教に付ては前諸章に於て之を述べたり。又前諸卷に於て講述せる諸宗教に付ても然り。然るに獨り回教のみ然らず。彼は教義進化の歴史を有せず又其の教義に付てか、戒律に付てか、孰れにもせよ、衆僧相集りて協議せしことなし、即ち所謂公會なるもの、嘗て開設されたることなし。實に一切の諸事は總て全く摩哈嘿自からの手にて古蘭中に確定されおるなり。

(一)摩哈嘿教を發生せし原因并に境遇、

摩哈嘿教はセミナツク宗教の一なり。而して今やセミナツク情操の發生せる第二の大宗教たるなり。基督教は風光明媚なるシリアの國土に於て猶太教より生れたるものなり。されど摩哈嘿教は寂莫乾燥なる亞刺比亞荒野の兒なり。

亞刺比亞は其地理上の形勢に於ては、印度に異ならず。二者孰れも亞細亞大陸の大半島を形成せり。かく其の外貌の形勢に於ては二者大に類似すと雖も、其の内質に至ては全く正反對なり。一は四季綠草を以て充ち、江河清流をたへ、森林鬱蒼たり。而して香雨絶へず炎暑をばらふ。然るに他は其の全面殆んど乾燥荒瘠なる砂土を以て被はれ、只僅少なる地方を除きては、終年天水の降下することなし。又川亦く、林なく、而して突兀たる岩石を以て被はれたる山嶺は輝々たる日光に焼かれて地獄の山もかくやと思はるゝばかりなり。されば今印度は殆んど三億萬の人口を有するに、之に反して亞刺比亞は其の人口一千萬に過ぎざるを見るも、敢て驚くに足らざるなり。又印度は甚莫たる上古の世より今日まで常に犯儉者の侵略する所となれる亞刺比亞は其の歴

史の初めより今日に至るまで、嘗て侵略者の擾亂を蒙りしことなきを見るも敢て怪むに足らざるなり。羅馬帝國は世に知られたる限の國土の上に其の國旗を翻さんと企圖しき。されど亞刺比亞砂漠の毒熱には敢て其の勇兵を爆らさんとせざりき。今日すら地圖面上にては亞刺比亞は土耳其に屬すと雖ども、實際に至ては土耳其の勢力は毫も、駿馬に跨りて侵入兵を鐵蹄に蹴散らす剛膽勇猛なるアラブの上に及ばざるなり。實に土耳其に對する彼等の關係は主従の關係にあらざりて、宗教的同情の連絡に過ぎざるなり。

強大なる自然の能力、鋭敏なる心力を具せる國民にして——總てセミナツク諸民種の之を具せしことば疑ふ可からず——幾千年間外國の交通を閉鎖し、單獨孤立するときには、此の孤立が原因となりて一種の特殊性を發生するに至るものなり。もつとも此は總ての場合に適用する能はず。多年間自から外界より隔離せる國民にして、格別特殊なる性質を發生せざるものも多く存す。されど尙ほ亞刺比亞人は總て他民族の有せざる特殊性を有せり。亞刺比亞にありては各家族は別離獨立せる王國なり。國土自然の性質は大市府の建設を容さず、又大家族の興起をも容さざるなり。故に總ての回教國に於ては、一夫多妻主義は實に見るに堪へざる有様にて行はるゝに、獨り亞刺比亞の回教徒のみ敢て之に感溺せず。天幕に馬、若し出來く可くは妻、此の二者或は三者は彼等が、偏に保持せんと欲する所のものなり。而して大危難、又は必要の場合には自己及び其の馬の安全を保持せんが爲めに、其の妻を犠牲に供するをも敢て憚らざるなり。妻を得る最易の業なり。されど我が馬のもさ(死)たるるときには、如何して新しき馬を得ん」とは、世人の熟知する亞刺比亞人の通言なり。

さてかゝる觀念によりて訓育され、かゝる觀念を以て圍繞する、人民の内に摩哈嘿教は發生せしなり。故に本教の發生興起を研究するに先だちて、まづ彼等を檢査せざる可からず。之れハトヒ趣味なき業ならんも。

摩哈嘿の以前には、亞刺比亞人はヤハリ今見るが如く諸部落に分かれたりき。其の國土の地理上の位置及び表面の状態は最も部落的生活に適せり。巨多の人民を支へ得る平原は甚だ稀なり。故に亞刺比亞の歴史上、嘗て全國一統の大帝國起りしことあるを見ず。

古代の亞刺比亞人に付ては、吾人の知る所甚だ僅少なり。されど嘗て彼等の文明の大に進歩せし時代ありしこと疑ふ可からず。近世の文明國は摩哈嘿前亞刺比亞人に負ふ所多し。天文學は其の一なり。

清朗なる亞刺比亞の天空はよく天象の觀察に適せしならん。化學も亦其の始源を亞刺比亞に發せり。實に化學^{ケミストリー}てふ語其物は亞刺比亞語なるなり。勿論古代の亞刺比亞人の天文學又は化學に關する觀念は今日の觀念と同一なりと云ふに非らず。されど彼等は最初に道を開きしものなることは何人も敢て疑を挿まざる可し。古代亞刺比亞人の天文學は星占術の一種なり。されど星占術は正しく現今の天文學の父なること疑ふ可からず。化學に關しても亦然り。亞刺比亞人の觀念は大に吾人今日の觀念と異なれり。實に今日の觀念、即ち各元子の究極性に達せんとする科學的方法是其起源甚だ新し。亞刺比亞人の化學は一種の魔術なりき。即ち一の物質を他の物質に變化せしむる方法なりき。一例をあぐれば、眞鍮を變じて黄金となし、鐵を變じて銀となさんとするが如き方法を研究せり。されど今日の化學は古代の亞刺比亞人の觀念の論理的過程を経て進化發達

せるものなること敢て疑ふ可からず。
更に亞刺比亞の文明が近世の文明に傳へ得たりし一點は建築の觀念なり。されど此の點は未だ明らかならず。即ち近世の建築は如何程其の元の觀念を古代の亞刺比亞人に負ふやは未だ明らかならず。今日に傳存する亞刺比亞古代の建築の遺蹟は未だ波斯又は印度に於けるもの、如く十分研究されたり。之れ上文に述べし如く其國は殆んど無政府の狀態なるが故に歐洲の旅行者は其の内部に進み入ること能はざるによる。若し歐洲人にして此國を旅行せんと欲せば、先づ言語容態一切亞刺比亞人に擬せざる可からず。而も不幸にして其の亞刺比亞人に非らざることを發見するときは直ちに暴手にかゝりて敢なき最後をどげざる可からず。余輩は一日も早く善良なる政府の建設さるゝありて、全國を開通し、旅行者をして其内に入り、總て古代の亞刺比亞の隠れたる珍寶を自由に研究するを得せしめんことを切望して已まず。

更に爰に觀過す可からざる他の一點あり。即ち古代に於ける亞刺比亞人と埃及人との關係是なり。さて古代の亞刺比亞人は其の文明上如何程古代の埃及人にかりたるや、或は古代の埃及人が古代の亞刺比亞人に負ふ所は何物なるやと云ふ問題は未だ解説を得ず。されど予の見所は左の如し。セミナツク諸民種は西方亞細亞の或る地方に於て大に進歩したる文明、中央亞細亞に於けるアルヤン諸民種よりは遙かに進歩したる文明を發達したりき。而して四五千年前彼等の分散の起りしとき、各獨立なる支族は亞刺比亞、西里亞、埃及及び其他の諸地方に於て一の獨立なる王國を建設せり。彼等後世の交通は勿論彼等が觀念の交通を助けしならん。されど此等の觀念を發生する原因其物は國土に自然なるものなりき。決して他より假りたるものには非らざりき。今や

天下を支配する三大人種即ちアルヤン、セミナツク、及びモンゴリアンの三大人種は各々自己の別性を有す。而して其別性は他より假りたるものに非らざるなり。セミナツク人種の古代の團結は、或る觀念を産出したたりき。而して其等の觀念は今日も尙ほ彼等の別性特質として消へもく彼等が子孫の内に殘存せり。

諸君は、余輩の亞刺比亞の文明に付て論じつゝありし時代は、前文に於て摩哈嘿時代亞刺比亞として叙記しつゝありし所のものに非らず、余輩の爰に説述しつゝあるは摩哈嘿前時代の古代の亞刺比亞なることを記憶されざる可からず。つらく考ふるに、各國民は一種の壯年時代を有するが如し。彼は此の時代に於て其の勢力の頂點に達す。而して此の時を只元氣のまゝに費さずして、能く將來の爲めに之を利用する國民は幸福なり。一たび壯年の元氣去り、一たび自然の勇氣散せば其の國民の終は近づけるなり。然り而して余の知る所にては、之れセミナツク諸民種の最大の弊習あり。彼等は其の元氣盛りには毫も將來に備ふる觀念なくして思ふがまゝに其勢力を消費せり。而して備へなき國民は容易く敵の餌食となるものなり。右述べし所、之をセミナツク諸民種の歴史に徴せられよ。余の言の敢て諸君を欺かざるを知られん。然り而して亞刺比亞獨り此の數に漏れざりしなり。

余は本題の主點に至るに先だち、爰に説及するなくして進行する能はざる更に一點あり。即ち亞刺比亞人の言語及び詩歌是れなり。疑ひもなく、亞刺比亞語はセミナツク語族中最とも發達したる言語なり。此の國語は世に稀れなる多數の語を有す。例へば獅を表はすに殆んど六百の語あり。又神の名に向ては、一千以上の語あり。他は推して察す可し。勿論かく廣大なる發達をなせる國

語は其國民其物の進歩の大なるを示す。其は實に其國人内部の眞狀を示し、彼等が心力の活潑なるを示す。然り今日の亞刺比亞人には其跡を見る能はざる程の進歩を示せり。然るに亞刺比亞語は又セミナツク語一般の喉音質を有す。而して此の喉音なるものは、唇音及び他の諸音の如く階和流調ならず。故に國民交通の具となすには甚だ不便なり。レナン氏は其著セミナツク言語史中に云へり。動詞の發達の不完全なりしはセミナツク言語の最大欠點なり。之れ大に彼等の進歩をして遅延せしめたりきと。余は氏の説に賛同し、動詞の發達の不完全なりしは、總てセミナツク諸民種の進歩上一大姐疑をなせりと論ずと雖も、喉音の過多なるは更に大なる姐疑をなせりと思惟す。余輩若しアルヤン言語發達の歴史を、梵語より現今の歐洲語に下りて檢査せば余の今述べし言の眞實なる説明を看出す可し。彼等は漸々喉音字をすて、多くは唇音字を以て之に代ゆるが如し。之れ佛蘭西語に於て見るを得可し。而して獨り原始アルヤン語の喉音を固持する日耳曼語は人類の思想を互に連結する一般の具となるの機會を失へり。余輩の説述しつゝ、ありし亞刺比亞の文明は又壯嚴を以て自然を描寫せる巧妙なる詩歌を産出せり。かゝる詩歌は只古代の進歩せるアルヤン及びセミナツク、諸民種に於て發見さるゝのみ。余輩は彼等の詩歌に於て生命を與ふる大海を見、又各物の壯大なる基薄の上に寫さるゝを見る。是れ古代の希臘人か叙事詩と稱せし處のものなり。而してモンゴリアン人種の摸倣せざりし處のものなり。諸君若し約百記又は摩訶布羅多の如き叙事曲を採て、之を支那の詩經と對比せよ、自然及び總て自然の運行に對する觀想の間に大なる差違あるを明解するを得可し。されど各者又特殊獨箇の趣味を有せり。必ずしも一を以て他に勝れりとなす可からず。支那の詩歌は溫柔、優雅なる

美を具し、人間に於ける美情に訴ふ。然るにセミナツク及びアルヤンの叙事詩は粗野なり、されど思想の高壯と含蓄の廣大なるに至てはモンゴリアン詩歌中其の比を見ず。言を換へて云は、セミナツク及びアルヤンの詩歌は自然に對する廣大なる觀想を基礎とし、モンゴリアンの詩歌は人情感情を基本とせり。故に前者は壯大にして、後者は雅美なり。然り而してセミナツク及びアルヤン人種をしてモンゴリアン人種に例なき包容の廣大なる詩歌を發生せしめたるは此の根本的觀想なり。モンゴリアン人種の詩題となれるものは鷲の谷の戸出づる初聲なり、うらゝけき春の野づらのつぼすみれなり。されどミルトンの如きアルヤン詩人は其の犯險的想像を満足せしむる主題を得んが爲めに、其の美想をして無限の宇宙に翔翔せしむ。されどセミナツク人種は其原始の狀態に止まれり。アルヤン人種の如く人情的の部分を發達せざりき。此二人種はもど共に同一の詩想に従へりしこと上文に説けり。即ち高壯と壯大に達せんことを言として、其作中には優美人情の元素を注入せざりしこと是れなり。されど時代の經過するに従ひ、アルヤン人種、殊に希臘人に誘導されたる歐洲人は此の誤謬を覺れり。然るにセミナツク人種は毫も進歩せずして只其の極初の階段に止れり。モンゴリアン人種も亦雅美に加ふるに高壯を以てせざりき。故に彼等の詩歌も亦セミナツク人種の詩歌と同しく格別進歩せざりき。説て爰に至れば、吾人若し完全なる詩歌を見んと欲せば、之をアルヤン人種に求めざる可からざること明らかなり。

以上の數員に於て一の完全なる描寫を示さんと試みたる亞刺比亞人は摩哈嘿時代の亞刺比亞人にあらず、又摩哈嘿の誕生直前の時代、即ち基督教及び猶太教が其の住民間に轉宗者を作らんと試

みつゝありし時代の亞刺比亞人にもあらず、されどユダヤ、バビロニア、アツシリア、及びカルデア等のセミチック諸國民が西亞地方に旺盛を極めつゝありし時代の亞刺比亞人なり。是れ實にセミチック人種が總て其の競争者を壓倒したりし時代なり。アルヤン人種が半開半野蠻の狀態にて新しき住土を求め、亞細亞の廣原に漂泊しつゝありし時代なり。

上文に叙述せし如く、亞刺比亞は其の國土自然の性質よりして嘗て堅固なる一大王國を結成せざりき。又摩哈嘿時代以前にありては其姉妹國の如く人類の運命上に大なる影響を及ぼす能はざりき。されど尙ほ最初のセミチック移住者が亞刺比亞の「オーシス」及び平原に入り、爰に文明社會を開設し、市府を建設せし時代、且つ其の祖先より遺傳せる心力の尙ほ活潑にして元氣を備へし時代にありては、上文に列叙せしが如き觀念を産生し、以て大に人間の智識を富ましめしなり。吾人は彼等に向て謝する處なかる可からず。されど亞刺比亞人は其の摩哈嘿教を發生し、且つ其を以て人類の上に大なる影響を及ぼし、又及ぼしつゝある事に於ては、決して吾人の忘失す可からざる事にてあるなり。

今余輩をして摩哈嘿誕生直前の時代に下らしめよ。時に亞刺比亞人は三種の宗教の下にありき。一は亞刺比亞古代の多神教にして、二は猶太教、三は基督教なり。されど土民間にありて最も強大なる勢力を振ひしは原始セミチック多神教なり。猶太教は諸外國に於ける彼等今日の狀態によりて知らるゝ如く決して深く他國民の富豊なる沃土及び思想に根下することなき奇妙なる外國植物なり。マトヒ他國に住居すと雖ども彼等は常に其の土民と隔離孤立する人種なり。彼等は四圍の外物を吸狀同化する能はざるなり。故に外國にある外國人として止まるなり。決して其地の影

響を受けて變化するとなし。今余輩の説述しつゝある時代の亞刺比亞に於ても亦同じかりき。彼等は其の國の遂に滅亡せし以後は諸國に散亂し、亞刺比亞の廣原にも亦入り來れり。而して其地の土民は血統上彼等と最も親近なる關係を有するものなるにも拘らず、尙ほ今日魯西亞に在る彼等の同胞の如く、全く土民と隔離し、孤立せり。實に千年餘を経過し來れる今日すら尙ほ然るなり。他と隔離し、之と接觸せざる人民が人類の運命を形成する上に何たる影響をも及ぼす能はざるは自然の果なり。而して猶太人の歴史は此の言の好實例なり。

猶太人は摩哈嘿以前の時代に多く群をなして亞刺比亞に移住したりしかど、尙ほ彼等が宗教的思想を土民の上に印着せんとはせざりき。彼等若し此の事業に意を注ぎたらんには、恐くは摩哈嘿は興起するの機會を得ざりしならん。彼等は既に業に時期を失へり。故に摩哈嘿出世の時に當て如何に彼か事業に向て反對を試むるも總て功なかりき。摩哈嘿も亦猶太人に對しては甚だ刻なりき。基督教徒に對するよりも一層刻なりき。之は古蘭によりて知らる。但し其の類似を云はば、摩哈嘿教は基督教よりも猶太教に對して大なる類似を有するなり。然るに摩哈嘿は猶太人と呼んで豕と云へり。蓋し亞刺比亞人の觀念にては豕は最も不潔なる動物なるなり。又、彼等を責めて、卑劣漢なり人情を解せざるものなりと云へり。

摩哈嘿は能く猶太人を解せしが如し。既に説述せし如く、同胞の宗教上の平和に對して全く無頓着なるは猶太人主要の特質なり。而も他人の憤然驟起して同胞の爲めに熱血を絞り、紅涙を流して、彼等を神の前に導かんとするあるを見れば、必死の力を振て之に反對するは、又彼等が一奇質なり。但し余は摩哈嘿は猶太教よりも勝れたる宗教を興せりと云ふに非らず。余は決してかく

云ふに非らず。只他宗教に對する猶太人の状態に付て一言するのみ。
 今余輩をして亞刺比亞にある基督教の状态に轉せしめよ。さて猶太教の亞刺比亞に入り來りしは自然の膨脹によるに非らず、其奉信者たる猶太人が其の國滅びて四方に散亂せし結果なり。されど基督教にありては然らず。彼の愛に入り來りしは、其の内部に滲透する活勢の膨脹にあるなり。基督教は既に使徒時代に愛に傳はれり。使徒行傳第二章を讀むに、祭日を守らんが爲め天下の諸國よりエルサレムに來れる人々の内に亞刺比亞の猶太人ありしを見る。彼等基督教に轉じて其國に歸りし後には大に布教上の働をなせしこと明らかなり。又同書第九章ポロ改宗の條下には、かゝる早代に於てすら基督教は既にダマスコまでも播まりおりしことを見るなり。而してダマスコは亞刺比亞と亞細亞大陸とを結合する關門なるを以て、此等の早代に於て、福音書は既にシリアより亞刺比亞に傳はりおりしと想像するも敢て誤謬にあらざる可し。

今日にありては吾人は、亞刺比亞に於ける基督教會の状态に關して信據す可き書を有せず。斷片零墨より集め得る知識は實に僅少なり。されど余が見る所にては、一事の正確疑ふ可からざるものあり。即ち亞刺比亞に於ては基督教は嘗て盛大を致さざりしこと是れなり。其の主要なる原因と云ふは、恐くは其國土の地理上の位置、及び住民の状態にあるなる可し。即ち地理上にては容易に交通し難き位置に在るなり。而して其の住民は沙漠の内に隊をなし、水草を負ふて移轉せり。かゝる人民を文明に導くは容易の業にあらざる。又基督教の運命は其初めより歐洲及びアルヤン人種の方に向て進めり。とは雖も余は猶太教より起りたる基督の宗教は總てセミナツク民種に不適當なりしと云ふに非らずかゝる臆説は歴史的事實によりて一擊の下に打ち壞かる可し。北方亞

弗利加の亞刺比亞人は基督教を以て希臘羅馬の文明にかへたりき。シリアの諸民族は全く基督教に轉じ、波斯、印度、及び中央亞細亞、否な支那にまでも之を宣傳せり。されど羅馬帝國の建設は最もよく福音宣傳の道を備へしこと疑ふ可からず。佛蘭西、日耳曼及び英蘭土等の豊沃なる異教地は新宗教の種を蒔くには、當時大に腐敗を始めつゝありしセミナツク瘠土よりも數層有望なりしなり。

物あれば其の成立を窮め、事あれば其原因を探るは吾人々類の通性なり。而して其成立、其原因に就て明確疑ふ可からざる證據の存在せざる場合には、最も應有的なる假定を案出す。今亞刺比亞に於ける基督教の事蹟に就ては明確なる事實の傳存するものなし。故に余は右に説述する所を以て、何故に基督教の事業は亞刺比亞に於て成功せざりしかを説明する、最も信す可き假説となすなり。基督教も猶太教に同く原始亞刺比亞人の多神教を掃去する能はざりし事に付ては直ちに論及す可し。されど亞刺比亞にありては、他の諸國に於ての如く、基督教は其義務を盡さざりしこと、其天職を成滿せざりしこと、敢て疑ふ可からず。若し然らざらんには新しき預言者は土生の宗教を掃去せし如くに基督教を掃去する能はざりしならん。げに基督教若し亞刺比亞人に向て其義務を盡せしならんには、摩哈嘿及び彼が宗教は決して現起せざりしならん。摩哈嘿を刺激して一神教に到らしめしは實に亞刺比亞傳來の多神教なりけり。

余輩は此の驚嘆す可き人物の傳記を約説するにさきだち、亞刺比亞古代の宗教を略述す可し。上文に述べし如く、亞刺比亞の半島は往古の時代よりセミナツク民種の住息する所たりき。其の證據は亞刺比亞の言語中に存在せり。此言語はシリア語へブリユ語等と同じ語族に屬す。彼等の

間の關係は甚だ親密にして、實に彼等は近來一言語より分派せしものと假定し得る程なり。マトヒ今日に於ては余輩は未だ彼等の宗教に付ても同事を證明し得る程の憑據を有せずと雖も、されどよしかゝる假説を設くるも余輩はあまり眞理を離れざる可し。亞刺比亞の宗教はアツシリアカルデア又はバビロニアの宗教に類似する物なりと云はれ、當らずとも遠からざる可し。セミチック人種が彼等の歴史の初代より占有せし方所は彼等が競争者たるモンゴリアン人種及びアルヤン人種の占有せし程廣大ならざりき。原始の時代よりセミチック人種の住土は西南亞細亞の内にて二大河の間に狹まれたるメソポタミアよりシリヤに達する一帶の地なりき。又メソポタミアは原始セミチック人種最古の住土なりしこと疑ふ可からず。而して東南に於ては亞刺比亞に達せり。後又阿弗利加の一部にも移住せり。されど其の膨脹の範圍廣からず。隨て其の内に發生せる觀念も亦、北はシベリアより南は南米の大陸にまで散布せる諸民族に於ての如く巨多又種々ならざるなり。

古代の亞刺比亞人は、總て他のセミチック諸民族の如く、一の最勝神の古き觀念を有しき。彼等は此神をアルラフ、ヤアラと呼べり。高き神の義なり。神道の神の觀念に異ならず。日本語の神又上を意味す。されど此の高神の觀念は亞刺比亞の宗教にありては、猶太人の外總て他のセミチック諸宗教に於ての如く、大に腐敗せり。而して此の高神の禮拜は全く忘失され、無數の小神其の地位を充たせる時代は來りき。高神の名は全く忘失されざりき。されど彼の禮拜は消失したりき。後世の亞刺比亞人は毫も此の神に注意せざりきと云ふ。殿地は二部に分ち、一部は高神に、他部は他の諸神に捧獻せり。而して高神の殿地は全く耕作せず打ち捨て置き、小神の殿地は能

く修理せり。マトヒ、高神の殿地より水流れて小神の殿地に下るも、彼等は之を妨ぎ止めざりき。但し亞刺比亞の如き國土に在りては、水は常に甚だ貴重なるものなるを記憶す可し。されど若し小神の殿地より流れて高神の殿地に下らんか、直ちに之を妨ぎせり。約説せば亞刺比亞人は、高神は彼等の利用に供するにはあまりに高大なりとの思想に達し、而して彼等に接近し得る數多の小神を創造せしなり。蓋し此の如くなるは總ての國民、總ての時代に於て多神教の進行する大道なるが如し。人類はもと、宇宙の創造者保護者として一切萬物の上に高く立てる一の最上神の純粹なる觀念を有せしものなるが、されど漸々に彼より離れ、彼の性質を誤解するに至れり。人類は四圍の事物の性質を以て彼れ最上神の性質に混淆せんと試む、而して其の結果は多神教となりて現はるゝなり。

多神教を奉ずる上に、亞刺比亞人は又日月星辰等の諸天体をも拜せり。偶像教即ち物体の禮拜は總ての多神教國に於ての如く爰にも亦汎く行はれたりき。摩哈嘿は偶像禮拜者に對すること甚だ刻なりき。彼等と呼んで畜生と云へり。又蜘蛛を以て之に比せり。其の言に曰はく、「神の外に他の祐助者を求むる其等の人々は蜘蛛の如し。蜘蛛は自から家を造る。されど總ての家屋中にて最もも薄弱なるものは蜘蛛の家なり」(古蘭、蜘蛛品第二十九)又其の信徒に告げて偶像禮拜者の爲めにはマトヒ親族朋友たりとも祈る可からずと云へり。摩哈嘿の以後は彼の宗教は偶像禮拜の總ての種類總ての形体の大敵となれり。而して回々教の會堂には偶像に似たる一物も存せず。

古蘭の内には摩哈嘿の時代に尙ほ亞刺比亞人の間に禮拜されおろし種々の偶像を記せり。而して

其の内には女性のものあり。是れ古代のセミチック人種間に禮拜されおろしものと同質のものなること明らかなり。

余輩は次巻に於て世界の残りの諸宗教を講ずる時、再びセミチック人種の宗教に説き及ぼす可し。爰には只摩哈嘿の強大なる勢力が暴風の如くに其前に在る一切事物を席捲せし時代に當て亞刺比亞に活動しつゝありし種々の宗教的勢力を概説するに止む。此等の諸勢力の中にて、古蘭中に見ゆる所にては、異教は最も猛烈なる反對を致せしが如し。彼は一々摩哈嘿教の進歩に抵抗せり。基督教又は猶太教にして若し亞刺比亞人に向て其天職を盡せしならんには、巨多の人類は一たび其の下に來れば再び脱出すること能はざる宗教的信仰の轡を負はざりしならん。

第十一章

摩哈嘿の傳記、彼が宗教の進歩及び其の人類の進歩上に及ぼしし影響。

摩哈嘿は強大なるコレイシユ種屬中有名なる、ハシューム家より出づ。此のハシューム家と云ふは世々メッカの市府に住し、富豪を以て聞へたりき。摩哈嘿の祖父に當れるアブド、アル、モタルレブはアビシニアなるクリスタヤン諸王の支配を脱し、祖國の自由を回復せんとて屢々戦へり。摩哈嘿の父アブド、アルラフ(神の僕)は即ち此の剛勇なるモタルレブが十三男六女中最も鐘愛されたる人なり。彼は容貌甚だ優美なりしが如し。傳説に言ふ。アブド、アルラフ猶太血統の美人アミラフを婚りしとき、メッカの女子二百餘人は羨嫉のあまり惱死せりと。

未來の預言者は此の幸福なる好遇に結びし第一の果實なり。而して此の果實の成りしは西紀後五百七十一年四月二十日の事なりと傳ふ。彼の誕生に付ては古蘭は沈黙せり。されど後世の傳説には奇話怪譚多し。或は天使下りて彼の誕生を預告せりと云ひ、或は誕生の日には一切生物歡喜の聲をあげたりと云ふ。されど此等は皆々後世の想像なること疑ふ可からず。下文に述ぶる如く、摩哈嘿は自から奇跡を行ふの力を有せずと云へり。

彼は其國俗に従ひて其の誕生の時に、摩哈嘿と名づけられたりき。摩哈嘿とは讚美さる可き人、尊重さる可き人の義なり。或る學者は此の名は後世信徒が彼の徳を讚稱して興へたるものにして彼が本名に非らずと云へり。されど他の學者は又此預言者の前にも既に此名は通例箇人の本名として用ひられおろしことを發見せり。

さて彼は上文に述べし如く貴き家に生れたりしかば、其幼時には甚だ不幸なる生活を送れり。彼の兩親は彼尙ほ幼少なりしときに世を去れり。故に彼は其の叔父アブ、ダレブの手にて養育されたりき。アブ、ダレブは善良なる性質の人には非らざりしが如し。摩哈嘿の幼時、叔父アブ、ダレブの保護の下にありし間の事蹟に付ては今日に傳存するもの甚だ少なし。されど吾人は今日の亞刺比亞の兒童の如く彼は日々廣野に出で、駱駝を守りしならんと想像し得。而して其の青年に達せしとき彼の叔父は只駱駝六匹と奴隸(少女)一人とを彼に與へて家を出だしたり此の叔父の虐待は大に彼が將來の生活に影響を及せり。彼は其の宗教的誠律中切りに孤兒を憐み恵む可き事を説けり。

かく其の叔父の爲めに父の遺産は奪はれ日々の食をさへ得難きに至りしかば、即ち其駱駝を賣り、市府の住民の羊及山羊を牧してからくも其日を送れり。是れ亞刺比亞人の最も賤める業なり。かくて二十四の年に達するまで、此の賤しき業に従ひしが、彼が大事業に入るの端緒は爰に開かれたり。彼がメツカの富裕なる寡婦の家に入りしは實に此の年なり。此の寡婦は其の名をカヤシャフと稱して汎く隣近の諸邦と外國貿易を行へり。摩哈嘿は大に彼の寵愛を得、年々シリヤ及び埃及に送らる、隊商と共に此等の地に行商せり。而して古代の埃及及び希臘羅馬の文明を學べり。遂には猶太教及び基督教の聖書よりして彼が將來の事業に必要な知識を得たり。かく一方に於ては彼の吸收性は彼が將來の大責任に備へん爲めに諸方より來れる諸般の知識を收攬するに汲々たりしと雖ども、彼は又其の主婦に對する義務に至ても決して怠らざりしことは、主婦の寵愛愈々彼の上に加はり、遂に之と階老同穴のちぎりを結ぶに至りしを見て知らる、

なり。然り而して此の新しき境遇は卒然賤しき駱駝追を起して幾億萬の生靈の偶像となるまでに至らしめたりき。

かくて其齡四十歳に達するまで、其家を管理し、又貿易に従事せり。而して此齡に至て始めて預言者として世に打ち出でたり。其の二十四歳にしてカヤシャフの家に入りしより、此年に至るまで、殆んど十六年の間、彼は常に諸國に旅行して、萬般の知識を其胸裡に蘊蓄したりき。

寡婦カヤシャフと婚を結び市府の名望家となりし以來の彼が經歷に付ては其の幼時の經歷に付てよりも今日に傳はれるもの多し。彼は市民一般の間に甚だ尊敬され親愛されたりしが如し。彼等は彼を呼んで、アル、アミンと云へり。アル、アミンとは「誠實なる(人)」の義なり。彼は舉動嚴格にして、其の性や、酷に傾けり。されど大に小兒を愛したりきと云ふ。又甚だ亞刺比亞傳來の古宗教を崇奉し、常にメツカのアルラフ堂の方に向て祈れりとぞ。而して屢々ハラ山に入りて、茲に數日間斷食祈禱を勤修せりと云ふ。

而して此の十六年の間は彼は其の最も愛する妻カヤシャフに向てすら嘗て其の未來の大目的を告げざりき。されど其心裡に於ては日夜未來の計畫に付て心思を勞せしこと疑ふ可からず。幾夜が夢も結はず過せしならん。

彼始めて天使ガブリエルによりて未來の一大天職を告示されたりし時の狀況として左の如き面白き傳説傳はれり。曰はく、アママン月の或日に彼は例の如く、ハラ山に入りて幽靜に就き、除かに思念を凝しつゝありし間、日は山に入りて、空に星光を見るに至りぬ。彼は思念の疲に堪へざりけん。うとくとまどろみしが、いつしか天使ガブリエルの其前に現れおるを見たり。爾時天

使は手に絹の巻物を携へおりしが、静かに之を摩哈嘿に授け、且つ之を開きて精讀せんことを命ぜり。此のくしき現象に驚愕せる預言者は、彼目に一丁の文字なければ之を讀むこと能はずと答へき。天使は更に口を開きて此の巻物は彼の前にモーセ、及びキリストに授かりたる天啓の府なりと云へり。摩哈嘿此の言を聞きて、大に勇を鼓し、之を開けば、開卷先づ彼が眼に映せしは古蘭第九十六章の初二句なり。

なべての物を造りにし、

凝りし血を以て人間を、

作りしなれが大君の、

御名にたよりて讀めよかし。

筆の用を教へにし、

知らぬを人に教へにし、

恵の深きながきみの、

御名にたよりて讀めよかし。

隨手に古蘭と云ふ語の意義に付て一言しおかん回々教の聖書を古蘭と稱するは、實に右に掲載せる第九十六章中の「讀めよかし」てふ語より起れるものなり。

但し古蘭とは讀む可きもの、義なり。譯者曰、古蘭とは亞刺比亞語にして回々教の聖書をさしたるもの、詳しくは「アミン」(セフェースフル)の「アル」と同じ、故に英語の冠詞「the」を附するときは「アル」を省きて「セ、コラン」と云ふを常とする。されど我國語の如き冠詞なき語に於ては、いさよのまに「アルコラン」と稱するが可ならん。又「コラン」は動詞「カラア」より來れるものにて「カラア」は讀むの義なり。此の讀むてふ動詞より轉化せる「コラン」を以て回々教の聖書の名となす所以は本文に於て著者の述

ぶるが如し。而して回々教徒は只に聖書の全体のみならず、各章各節をも亦「コラン」と云ふ。又(アラビア)學者中には「コラン」は讀む可きもの、義にあらすして、所謂「コラン」を組織せる諸章を集めたるもの、義なりと云ふものあり。蓋し「コラン」の轉化し來れる「カラア」と云ふ動詞は讀むの外に集むるの義をも有すべしなり。されど亞刺比亞人と同種にして同種の語を用ゆる猶本人も亦其の聖書の全体若しくは其の一部を表はすに「カラア」なる語を用ゆる。而して其の「カラア」なる語は「コラン」と同じ始源同じ意義の語なり。此の點より見れば「コラン」を以て讀む可きもの、義となす方は正しきが如し。

摩哈嘿は之を見て大に驚けり。されど巻物中の語は一語も發せず、只我は文字を解せずと云へり。故に天使カブリエルは三たび其の命令を繰返せり。而して摩哈嘿は其のたび毎に或る答をかへせしかば、天使は堪へ兼ねて、彼が肩をつかみ、彼か身を震動せり。ふられて摩哈嘿は愕然夢さめたり。而して恐怖身を襲ひ、身体戦慄せり。即ち竊地に家に走せ歸へりければ、妻のカザシャフ夫のすがたのたゞならぬを見て大に驚き且つ怪み、其故を問へり。摩哈嘿初めは言を左右によせて實をわかさざりしが、遂にハラ山にてありし始終を物語れり。カザシャフ之を聞くや否や直ちに摩哈嘿の信者、隨喜者たらんことを申し出でつ。而して秘に之を其甥ワラカフに告げたりき。ワラカフは少しくヘブリー語に通じ、又少しは舊約書にも通じたりき。彼も亦之を聞くや、否や、直ちに信者たらんことを申し出でたり。且つヘブリー語の書中より語をひきて、預言者の降臨の明らかに預言されるを證せり。更に摩哈嘿が山上に於て見たりと云ふ異象は彼も亦之を見たりと云へり。

永らくの間、摩哈嘿は只秘かに其の教をのべ、且つ只己が家族内に於てのみ、信徒をつくれり。次に彼が教に入りしは、其の奴隸のザイドなりき。而して彼はこの故を以て自由を與へられたりき。されど身を終るまで常に摩哈嘿に従ひて最も忠實に之に仕へたりき。かくて其の信徒は漸々に増加し來り、遂には之を秘密にすること能はざるに至れり。是に於てか、摩哈嘿は一日大宴

會を設け、彼が眷屬及び彼が種族中にて最も主要なる人々を招けり。宴酬にして、彼は卒然として起ちあがり、偶像禮拜の大罪なること及び神怒の大なることに付て、強健なる説教を垂れ、而して後彼が天職を彼等に宣言せり。彼曰はく、我は現來兩世の幸福を爾曹に與へんと。時に既に彼の教に入りたる甥のアリーは起ちて、摩哈嘿の事業を助けんことを誓へり。全客之を聞きて一大茶番となし、哄笑して各々家に歸りき。

アリーの父にして、摩哈嘿の叔父なるアブ、クレブは市府の名望家にして、大に市民の尊敬する所たりき。彼は摩哈嘿及び己が子の計畫を以て甚だ危険なる業と思惟し、百方術をつくして之を止めんとせり。されど摩哈嘿は之に答へて曰へり。たゞひ日月力を協せて吾に逆ふも吾は敢て進まんぞ。アブ、クレブは甥の決心の堅固なるを見て、遂に敵の害を拒ぎ、彼が安全を保護せんことを誓へり。

摩哈嘿と其の反對者の間の争は日々強大を致せり。而して其の争の愈々強大を致せば致すほど、いよいよ信徒は増加せり。摩哈嘿傳道を始めてより第十年、彼の叔父のアブ、クレブと彼が妻なるカヂヤフとは溘然世を去れり。此二人は摩哈嘿の事業を助けしこと實に大なりしを以て、彼は大に之を悲めり。故に回々教徒は此の年を稱して悲の年と云ふ。

アブ、クレブの死後、摩哈嘿に對するコレーシヨ族の同盟は愈々強大を致し、彼は遂にメツカを遁れ出でざるを得ざるに至れり。故に彼は其養息ザイドを伴ひて、メツカをさる六十里許なるマイトと稱する一小市に往けり。されどマイトの住民は彼を厚遇せざりき。否な一日暴徒起りて彼を市外に引き出し、彼若し此の市を立ち去らずは、打ち殺さんと云へり。是に於てか彼は再

びメツカに歸れり。而してメツカに於ては彼が不在中に信徒は大に増加せるを見たり。之を見て彼は大に勇氣を得揚言して曰はく、我は一夜の間にメツカよりエルサレムに至り、而して其所よりモルセが彼の以前になせし如く天に昇れり。然るに此の言はメツカの市民の怒を惹起し、彼が信者すら彼をすつるに至れり。此の時に當て若しアブ、バキルの彼を助くるなかんには彼の宗門は全く滅亡せしならん。アブ、バキルは早く摩哈嘿の教に入りし一人にして、又市民の間に強大なる勢力を有せし人なり。彼宣言して曰く、預言者の自から行へり云へる事は出來可からざる事にあらず。殊に預言者自から然か言へるに非らずや。吾儕何ぞ之を疑ふ可んや。吾は堅く之を信じて疑はざるなりと。かくて民心は一變しぬ。初めには彼が聲價を滅せんとせし事が今は却て彼が名聲を高め、彼か信用を大ならしむるの具となるに至れり。

翌年即ち天使ガブリエルハラ山に於て摩哈嘿に現はれしより第十三年には彼が敵對者の勢力、愈々増せり。而して彼が生命は實に薄氷を踏むが如く危ふかりき。爾時メツナの市府より七十二人の男子と二人の婦人來り、摩哈嘿を迎へて曰はく、若し吾儕か市府に來りて教化し給は、吾儕誓て敵害を拒がんと。摩哈嘿は欣然として之を容せり。預言者故郷に尊ばれず(基督の言)とはよく云へるものかな。

摩哈嘿メツカを遁れてメツナに至りしことは摩哈嘿の生活上二廻點を作れり。回々教徒は此の年を以て彼等が宗教の誕生年となすも宜なるかな。之れ明治廿八年より千百十三年以前なり。此の年を稱してヘツラと云ふ。ヘツラとは亞刺比亞語にして「ハツラ」てふ動詞より來れり。「ハツラ」は遁るゝの義なり。彼等は又此の年を以て紀元と定め、之より前後に年代を算ふ。

此の遁走に付ては多くの傳説あり。内には奇話怪譚も多し。左に其の一を示さん。摩哈嘿は二人の従者を隨へてメッカを遁れ出でしに、敵對者は兵を使はして之を追へり。追撃甚だ急なりしかば、摩哈嘿の一行は一洞窟に入りて之をさけたり。時に追兵洞口に來りて其の内を檢せんとしけるに、蛛網内に張り滿ち、且つ其の入口には新しき鳩卵の散在するを見たり、之れ皆奇跡なり。追兵之を知らずして思へらく、此の洞窟内には近頃人の入りたる跡見へずと。即ち爰を去れり。是に於てか摩哈嘿の一行は無事に危難を遁れ、遂にメシナに着しき。

メシナに於ては摩哈嘿は大に款待されたり。市民は先づ良地を撰びて之を献せり。摩哈嘿は乃ち爰に一家屋を造りて之に居を定め、且つ之を以て唯一眞神の禮拜所とせり。

かくて摩哈嘿はメッカの敵害を免れ、爰に安全を得たり。且つ市民の尊崇至らざるなく、信徒の數も大に増加せしかば、是に於て彼は大に攻撃的侵略的精神を惹起せり。彼は是までメッカにありては、常に宣説して曰へり、彼の天職は單に人類を慰安し、神の道を教ゆるにありと。然るにメシナに於ては信徒の數は大に増加し、且つ其内には勇猛なるものも多かりしは之に勇氣を得て、彼は切りにメッカの市民に對して攻撃的の傾向を現せり。屢々其の信徒を送りてメッカにありては、敵對者の商隊を襲はしめたりと云ふ。

此の時まで摩哈嘿の宣説せし言は皆な平和なる性質のものなりしに、爰に調子は一變せり。彼は切りに戦争を説き、且つ戦死者は天國に於て大なる報賞を得可しと云へり。左に少しく古蘭中の文言を引きて之を示さん。

爾曹眞實の信徒等よ。爾曹は爾曹の敵に對して必要なる順備を整へ、而して隊を分ちて又は

一大隊をなして戦争に行け。爾曹は神の道の爲めに戦へ、而して現世の生活を以て、來る可き世に代へよ。神の道の爲めに戦ふものは如何なる人にも、又其の戦死すると、勝利を得るとに拘はらず、神は確かに大なる報賞を彼に與へ玉ふ可し。故にサタン（サタンに於て啓示された一なり）の友に逆ふて戦へ、

サタン（サタンに於て啓示された一なり）の謀計は弱ければなり。阿爾古蘭第四章女人品（メシナに於て啓示された一なり）故に彼等不信者に對して順備せよ、なんぢらの備ふる力及び馬隊は如何にあるとも、其によりて神の敵、汝の敵及び彼等の外の不信者（汝彼等を知らずとも神は能く知れり）を恐怖戰慄せしむるを得可し。而して神の道を保護する爲めに費す所は如何なるものなるにもせよ爾曹は其の報賞を得可し。決して不正の所置を受くることなかる可し。オ、預言者よ、誠實なる信徒を獎勵して戦争に行かしめよ。若し汝の人の二十人、忠烈なる心を以て屈撓せざるときには、彼等は二百人を撃破するを得可し。而して若し汝の人百人あるときは、未だ信せざるもの、千人を撃破するを得可し。蓋し彼等は悟らざる民なればなり。（阿爾古蘭第八章奪掠品）

汝不信者と闘ふときは、彼等が首を打ち切りて彼等のうちに大殺害を行へ而して綱を以て彼等をつなげ。而して後彼等を釋すか、又は贖金を強取せよ。而して神の眞實道の爲めに戦ふ人々には、神は彼等の事業をして滅びざらしむ可し、神は彼等を指導し、又彼等の心情を正しく修め玉ふ可し、而して彼等に告げ玉ひし天國に彼等を導き給ふ可し。さらば眞實の信徒等よ、爾曹若し神の道の爲めに戦ふことによりて神を助けなば、神は爾曹の敵に對して爾曹を助け玉ふ可し。されど不信者に對しては神は彼等を滅ぼし、彼等が業をして功なからしめ

玉ふ可し。(阿爾古蘭第四十七章摩哈嘿品)

右三ヶ所引用せし内、第三の始めの文言(彼等が首を打ち切れ)に付ては、余は始め英譯の古蘭を讀みしとき、聖書の内の文言としては如何にもあまりに殘刻なるものなり、之れ英譯の誤りならんと思ひ、直ちに亞刺比亞語の原文を檢せしに、余は其の誤譯に非らざることを知りたり。但し亞刺比亞文にては *Alzaraba Alzikab* とあり。即ち「彼等が頸をさり去れ」の義なり。古蘭中右に引用せしが如き文言は實に多く爰に悉く之を掲載するの要なし。其等によりて以て一斑の性質を察知するを得可し。今右に引用せしが如き文言は如何なる現象を吾人の心眼に映せしむるや。吾人は爰に山賊の頭が其の手下を集めて最も殘刻なる戦争に趣くに當て、世間一切の報賞を彼等に約し、又之に加ふるに未來の報賞を以てするを見るなり。再び本題に立ち戻りて、續て摩哈嘿の傳記を述ぶ可し。

さて摩哈嘿はメッカを連れてより六年間、メツナに止りて、偏に其の奉信者を教練し、又増々新しき奉信者をつくるに汲々たりき。而して此の五六ヶ年間に於ける彼が生活は大体的上より觀察せば、毫も山賊の主領の生活に異ならざるなり。第六年の終りに、遂に自から千五百の練軍の將としてメッカに打ち立てたり。而してメッカに近づける頃、使を遣はし市民に告げて曰はく、我は千五百の兵を率ひて來れり。されど其目的とする所は單に我が祖先の廟なるカハ寺を拜せんとするにあるのみ也。されど市民は彼如何なる謀計をたくみおるやも計られねば大に警戒し、且つ直ちに使を送りて曰はく、汝若し市府に入らんとせば、血の雨ふらすの慘狀を現す可し也。而して其使者は有名なる酋長なりしかば、摩哈嘿は之と十年間の休戦を約せり、而して其の間には兩

黨の徒は自由に轉黨することを許せり。

今日よりしては摩哈嘿の此の遠征の眞の目的は如何なりしか窺ひ知り難し。されどとにかく此の遠征の結果は摩哈嘿にとりては甚だ満足なるものなりしこと疑ふ可からず。是れまでは無責任なる癡狂者と見做されし摩哈嘿が此時其の最も恐る可き敵對者と同等の資格を以て條約をとりさむるまでの地位に達せしなり。而して此の平和條約の行はるゝ間には摩哈嘿は決して懶惰に日を送らざりしことは、此の條約の結ばれし後一年に、彼は亞刺比亞の境外に布教を試みしことによりて知らるゝなり。摩哈嘿は先づ亞刺比亞内の總ての酋長に書を送り、神より送られたる唯一眞正の預言者として彼を受けんことを勧めたる後、更に使をペルシャ、コンスタンチノール及びアビシニア等の諸國王に遣はして、同事を勧めたりき。亞刺比亞の歴史家の傳ふる處によれば、ペルシャのクハスル王は其書を読んで大に怒り、之を寸斷し、又使者を追へり。更に亞刺比亞の近境に屯在する一將に命じて、摩哈嘿を捕へ、之をペルシャの首府に致さしめんとせり。使者歸りて其の次第を復奏しければ、預言者は曰へり。彼我が書を裂きたるが故に、神は又彼が國をささき玉はんと、且つ彼が死の遠からざるを預言せり。而して其の預言は間もなく事實に現れたり。但しペルシャ王の命を受けたる一將が、摩哈嘿を捕へんとて亞刺比亞に侵入し來りしとき、其の國王は卒然崩去ましまして、其の宰臣の一人之に代りて位に陞りたりき。

コンスタンチノールの王は基督教を奉じおろしかば(亞刺比亞の歴史家の告ぐる所によれば)、摩哈嘿の書を得て大に其の答に苦みたりき。而して遂に其の使者に答て、曰はく、我は既に年老ひたれば今更宗教を變ずること能はず也。されど大に摩哈嘿の宗教の將來を祝し、又其の使者を

款待して歸せり。かくて四方より歸り來れる使者は多くは好答を携へ歸れり。

「ヘツラ」後第八年は二箇の大事件を以て有名なり。第一は亞利比亞有名の士クハレド、エブ、ワ
リード及アムルの二人の改宗なり。彼等は後摩哈嘿軍中最も拔群なる將軍となれり。シリアを
征服したるは前者にして、イヨプトを克服したるは後者なり。第二は基督教徒と回々教との第一
の衝突なり。新宗教は漸々膨脹して、シリアに於けるギリシヤ人の市府に達せり。最初の戦に於
ては十万の兵士を有せしギリシヤ人は三千の摩哈嘿軍を破り、其三將を殺せり。されど次に摩哈
嘿軍の將として遣はされたりシクハレドは大激戦の後、全く希臘の軍を粉碎し、巨多の分捕物を
携へて凱旋せり。而して「神の劍の一」なる稱號を得たりき。

さて第八年の暮に至て、曩きに兩黨間に成りし平和條約は破れたり。回々教徒の歴史家の説によ
れば、其の原因はメッカ黨の或る者がメッカにある預言者の信徒を殺したるに在りと云へり。果
して其の言の如くなるや、否やは疑はしと雖も、とにかくメッカの市民は切りに該條約の修補
を望み、殊さらし一人の酋長をメツナに遣はして再び會議を開かんことを乞へり。されど摩哈嘿
は之を斥け、且つ其の使者に會見するをだに否めり。故に使者は已を得ず、アリー及びアナバ
キルのもとに至りて、斡旋を乞へり。されど之れ亦其功なかりき。故に彼は非常に失望してメッ
カに還れり。

使者アナバ、サフイアシメツナを出立するや否なや、摩哈嘿は直ちに諸將に令してメッカへ出陣す
るの順備を整へしめたり。蓋し同府の市民の備なきに乗じて之を驚愕せしめんためなり。彼が戰
略はボナルパートの戰略に異ならざりしなり。かくて彼メッカに近づきし頃には其軍一萬に充ち

たり。メッカの市民は毫も戦闘の用意なきに、無意にかゝる大軍の潮の如くにおしよせ來りしか
ば、驚愕なす所を知らず。到底抗戦の功なきを覺りて直ちに降を乞へり。摩哈嘿軍は即ち市府に
入れり。而して逆殺暴行を擅にしたりき。亞利比亞の歴史家は云ふ。此等の暴行は毫も摩哈嘿の
知らざりし所なりと。或は然らん。かく精神の過度に激昂せる場合には、如何に智徳兼備の名將
と雖も到底一人の力を以ては一萬あまりの兵士の奮氣を制する能はざるものなり。かくて市民は
全く摩哈嘿に降り、彼が宗教に入り、以て劍の害を免れたりき。されど最要なる先導者、強敵た
る三酋長一婦人は摩哈嘿自身の命令によりて斬られ、而して他は悉く釋されたりき。

メッカ克服後、亞利比亞全半島は摩哈嘿教に轉宗せり。而してメッカは全國の首府にして、且つ
ラルラフの大寺は爰に建立されたりしを以て、遂に亞利比亞の宗教的生活の中心となれり。亞利
比亞人は古き宗教の中心は傾き、而して新しき宗教は古き宗教の全く知らざりし多くの物を與ふ
るを見て、敢て之を信奉するに困難を感せざりき。

メッカに於ては市民は數月間、偶像と古き寺院の破毀に従事せり。而して一年たゞざる内に古き
多神教の面影も残らざるに至れり。

後摩哈嘿はメッカを以て彼が本城首府とせり。而してアル、カバの寺院を轉じて回々教の禮拜堂
となせり。今日すら回教の信者は少くも生涯に一度は爰にまふするを以て義務となせり。

摩哈嘿は「ヘツラ」後第十一年、六十四才の齡を以て此の世を去れり。彼は預言者として運動せる
二十四年の間に、駱駝追の賤しき境涯より起りて亞利比亞全体の政治上、心靈上の大君主の位に
陞れり。彼は又荒野の産兒たる亞利比亞人に向て彼等が歴史上嘗て現はれしことなき一致と活動

の精神を注入せり。沙漠の産兒たる半開の亞利比亞人をして希臘羅馬の文明の繼續者たらしめたり。彼が亞利比亞人に向てなせしことの大なるは決して疑ふ可からず。されど彼の影響は他の諸國民に於ても亦善良なりしか、下文に述ぶる所を見よ。

之より世界に於ける回々教進歩の沿革を叙するに先だち、摩哈嘿の容貌及び性行に付て少しく述べおかん。余輩が彼の容貌氣質に付て知る所は左の如し。彼は中肉中身なりしかど、威嚴自からに備はれり。而して背は廣く胸は潤く、又頭は大にして、顔面は卵形、色艶はうるはし、目瞳は黒くして眼光は鋭く、眉は長く且つ濃くして、黒鬚口邊に滿生し内には白齒皎々たり。

彼は又思念に耽り、沈鬱の傾向あり。而して神經は過敏、感覺は鋭敏にして、性激し易く、微少の惡臭又は微少の体痛にも堪ゆる能はざりき。基督教徒にして彼の事蹟を傳へし人々は云へり。彼は屢々拘擥を起し、而して其の間全く意識を失ふことありきと。されど此の言果して眞なるや否やは斷言し難し。とにかく古蘭又は回々教徒の記録中には此の言の證據として引用す可きものなし。此の言恐くは、彼長時間に亘りて默想を修し、而して其の間には如何に親密なる人と雖ども、其の前に至るを嚴禁するの習慣を有せし事實に基きて想像をめぐらせしものならん。彼の性格に付ては、上文中彼が暴風の經歷に付て述べし所は、彼が内部の性格を闡明する上に大なる光明を與ふるならん。人間内部の思想が其の外部の行爲の上に影響するが如く、否な更に大に、外部の境遇は其の心的靈的格の上に反動し、又之を變成するものなり。人間の歴史中にて全く境遇の影響外に超出せる人を見ること甚だ稀なり。而して若しかゝる理想的人を見んと欲せば、汎く歴史を探らざる可からず。とにかく摩哈嘿に於ては、吾人は之を見ざるなり。

摩哈嘿の行狀は少くも、批評的歴史家によりては、二時代に分たる可し。第一時代は神命を受けたる時よりメッカ遁走の時まで、即ち彼が生活中にて、神命を受けたるときより一の大將として成功せしまでの間の部分なり。第二時代は彼の成功せしより死に至るまでの間の部分なり。其神命を受けし以前の時代に付ては既に上文に述べたり。此の部分は只彼が將來の行路の順備としてよりは外に趣味なし故に爰には只後の二時代に於ける摩哈嘿を研究す可し。

第一時代、摩哈嘿は其壯時、基督教及び猶太教と接し、彼等の状態を實着せしとき、大に悟る所ありしならん。即ち亞利比亞傳來の偶像禮拜及び多神教は大に腐敗せり、今や全く之を破壊して新しき宗教を建設せざる可からずと。されど余輩の爰に怪むは、彼は何故に純粹なる基督教又は猶太教を其儘に用ひずして兩者を混濁し、而も兩者の孰れにも劣れる系統を組織したるやと云ふことなり。勿論之を満足に答解するは容易の事に非らず。恐くは摩哈嘿自身の外に之を解するものなからん。されど左に少しく余が推想せる所を述べん。(一)既に上文に述べし如く、猶太教も亦基督教も、共に摩哈嘿の時代には活潑なる元氣なかりしなり。猶太教は當時殆んど死滅し、而して基督教は數多の宗派に分裂せり。(二)人類の預言者、人世の改革者たらんとする摩哈嘿の大望、(三)彼が神聖なる天職に付ての意識、及び己れは基督よりも舊約書の預言者よりも一段勝れたりとの自識の、強大切實なりしこと、(四)終りに總ての原因中にて最も大なるもの、即ち宇宙萬物を支配し、人類の安寧進歩の爲めに萬事を指命する攝理なり。

其の事業の初期に於ては、摩哈嘿は大改革者、及び宗教的先導者たるに必要な總ての資格を現せり。腐敗せる亞利比亞人の内に在りて、彼は其妻及び市民と共に驚嘆す可き生活を送り、誠實

なる(人)』と稱せられたりき。夫れ不幸は傲慢なる人に謙遜を教ゆる良教師なり。摩哈嘿も運命の反對を蒙れる限りは善良なる精神を現はし、其の前に當て基督教が既に人世中に注入したりし道を以て彼が宗教の大本とせり。故にメツカ遁走前同所に於て啓示されたりて古蘭の諸章に於ては其所詮健全なり。但し文學上より批評すれば前章にも述べし如く、其中の主要なるものは總て聖書より抄倫したるものなり。然るに彼運命の厚遇を受くるに至るや、其性格の根礎上一大變化を萌せり。之まで真正なる道四海同胞主義及び免敵主義等を宣説せし預言者が、今や上文に引用せしが如き諸文言を揚言し始めたり。但しメツカ及び遁走後メツカに於て啓示されたる諸章に於ては、預言者は其前の述作に於てよりも獨立なる蘄新なる精神を現せりされど其蘄新なる思想を現はすこと愈々多くして而して愈々殘刻を現せり。

カヂヤフ生時の間其の摩哈嘿との關係は甚だ福樂なりしこと、既に上文に云へり。蓋し荒野にさまよふ賤しき駱駝追が社會樞要の地位にのぼるに至りしは、一に全く此の寡婦の富財と權勢によりしなり。されば彼年老ひて如何に容色衰へたりとも、人間の通情として摩哈嘿之を離別し、又は外に増す花を手折る能はざりしは疑ひなし。されどカヂヤフ死するに及んでは、おさへおさへし彼が淫亂心は爰に爆發し始めたり。後彼が閨室には日に増し妻女の増加するを見る。惟ふに摩哈嘿の乏點は爰に最とも顯著なるが如し。左に古蘭中より一例を示さん。ザイドは始め摩哈嘿が奴隸なりしが、彼の教に入りたるの故に放釋され、自由の人とせられたり。されど尙彼の養子として彼と共に止まりしことは既に上文に述べたり。今ザイドに妻あり、ザイナブと云ふ、甚だ美なりき。而して摩哈嘿は其の媳婦たるザイナブに向て煩惱を起せり。ザイドは之をさとりた

り。是に於てか彼は左の二條件の一を撰ばざるを得ざりき。曰はく、其の妻をさりて、己が生命を全ふするか或は其の妻を離さずして、危難を受くるかど。ザイドは前件を撰びて、其の妻を去れり。されど如何にして摩哈嘿は其の媳婦と婚し、而も國人に對して己が信用を保持するを得しか。之れ摩哈嘿にとりては難事にあらざりしなり。さてザイナブの離婚後、直ちに、古蘭の一章は告示されたり。而して摩哈嘿は其の媳婦なるザイナブと結婚せんことを命せられたり。余は左に此の點に關する古蘭の文言を其のあるがまゝに引用せん。讀者は以て自から事の眞狀を想像し給ふを得可し。

而して其時汝は、神が恩寵を與へ、汝又恩惠を與へたりし彼(ザイドを意味す)に、汝自身に汝が妻を保て、而して神を畏れよ、と云へりき。而して汝はなんぢの心に於て神が発見せんと決心し玉へる物を隠し、而して人を畏れき。されど汝、神を畏るゝは更に正しかりき。然るにザイドが彼女に關する件を決定し、彼女を離別せんことを決心したるときに、吾儕は婚姻に於て彼女を汝に結ぶ。恐くは刑罰は、真正なる信徒が彼等の養息等が其の妻等に關する件を決定したるときに、其の妻等と結婚するに於て彼等の上に加へられん。而して彼等は神の命を守らざる可からず。されど彼に先だち、神の福音を持ち來り、神を畏れし而して神の外何者をも畏れざりし人々に關する神の律令に適順して、神が彼にゆるし給ひし事に於ては、如何なる刑罰も預言者の上には加へられず而して神は適當なる主計者なり。摩哈嘿は爾曹の内の何人の父にもあらず。されど神の使徒、使徒等の印璽なり。而して神は萬事を知る。

(阿爾古蘭第二十三章同盟品)。

右の文言によれば摩哈嘿はサイナフと結婚するを否み、天啓下りて彼に迫りしまでは之を敢てせざりしが如し。されど通俗の歴史に傳はる處にては、一日摩哈嘿サイドの家を訪ひしが、彼は不在にして、獨り妻サイナフの家を守るを見たり。時にサイナフは化粧中にて美しき肌を現しおれり。摩哈嘿之を見て煩惱むらくと起り來り、堪へ兼ねて叫べり、思ほし召めすがまゝに人の心に向け給ふ神を讚美すと。サイナフ此の語を聞きて、後之を其夫に告げたり。サイドは事の己が生命に及ぼさんことを恐れてか、或は其の主に対する愛情の深かりしが爲めか、とにかく直ちにサイナフを離別せり。摩哈嘿之を見て心は矢たけにはやれども、世の人のおもはく如何を慮り、しばらくは結婚せんとはせざりき。時に新しき天啓は下れり。而して彼が心を決せしめたり。其の天啓と云ふは、右に引用せる古蘭の文言なり。其の大主意は左なり。曰はく父、媳婦と婚するは自然の法則に背く。何人と雖ども之を犯す可からず。されど摩哈嘿は何人の父にもあらず、彼は大預言者なり、欲するがまゝに萬事を行ふを得と。彼か名聲權勢の進歩と共に彼が情慾はいよく増大せり。遂には限り知られぬまでに至れり。古蘭に見ゆる所にては、彼は初めは二人の妻を許されしが、次には三人、其の次には五人、又其次には七人、而して遂には欲するだけの數を許されたり。世界の文學中恐くはか程に肉情の發現せるを見るものあらざる可し。

オ、預言者よ、吾儕は汝が給料を與へたる汝の妻、及び汝が右手の保持する、神が汝に與へたる捕獲の奴隸、及び汝が妻となさんと欲する場合には汝と共にメッカより遁れたる汝の叔父の女、伯母の女(父方母方共に)并に總ての他の信女(若し之を諾せば)を與へたり。之れ汝

にのみ與へられたる未曾有の特權なり(阿爾古蘭第三十三章同盟品)

實に然り、實に未曾有の特權なり。余は曾て他にかゝる特權を主張せし人あるを知らず。此の天告によりて、後摩哈嘿は彼が近親一切の娘を以て己の物とせり。更に進んで既婚未婚に拘らず、如何なる女も皆な我が物なりと主張せり。但し爰に用ひられたる亞刺比亞語の「イムラト」は未婚女より寧ろ既婚女を意味する語なり。若し此の命令にして實際に嚴行されたらんには、如何なる女も安全に其の夫に仕ふる能はざる可し。又夫たるものも、安全に其の妻を保つ能はざる可し。蓋し何か少しく心にすまぬ事あらば、妻は直ちに其夫をすて、預言者の内宮に通るゝに至る可ければなり。

かくて内宮の妻女は大に増加せり。摩哈嘿は之を整治する方法を考へざる可からざりき。されど天は中々に親切なり。爾時又彼が衆妻に向て新しき啓示を下せり。

爾曹預言者の妻等よ。爾曹何れのものも明白なる悪事を行は、其刑罰は倍せらる可し。而して此は神にありては容易き事なり。されど爾曹何れのものも神及び彼の使徒に従順し、正しき事を行は、吾儕は之に二倍の報賞を與ふ可し。且つ吾儕はかゝる女の爲めに、天國に於て光榮の産を備へたり。爾曹預言者の妻等よ、爾曹は他の女の如くあらず。爾曹若し神を畏れば、あまりに慇懃なる言辭を用ゆるなかれ、其の心に淫亂の疾ある彼は貪る可ければなり。されど適宜なる言辭を用ひよ。而して爾曹の家に在りて靜かに坐せよ。又愚痴の前の虚飾に煩はざるゝことなかれ。又祈禱の時をよく守り、布施を與へよ。又神及び其の使徒に従へ。何んとなれば爾曹は預言者の家屬なるが故に、神は偏に爾曹より虚しき憎惡怨恨を去り、且つ完全なる清淨法によりて爾曹を清めんと欲し給へばなり。(阿爾古蘭第三十三章同盟品)

余輩は更に斯種の文言を引用するの要なかる可し。余輩は公平なる論者等と同じく左の斷結に達着するなり。曰はく、摩哈嘿は嘗てかゝる高き位にのぼれる而して最も罪惡に汚れたる人物の一人なりと。彼を以て佛陀又は基督に對照せんことは思ひもよらぬことなり。

或る歐洲の學者はシャイレマンの如き人物と對照して摩哈嘿を辨護せんことを試みたり。勿論余輩若し斯流の人物を標準として彼を批評せんには別に彼此云ふ可きことなし。されど彼は自から人類を正義の道に導かんが爲めに神より送られたる預言者なりと揚言せり。さればマトヒ彼の所行はシャイレマンやボナパルトに比して遜色なきも、余輩は彼を稱讚する能はざるなり。上文中彼に付て云へる言、或は刻に亘りし所あらん。されど是れ余輩が彼の自から任せし天職を尊崇するの餘り、爰に及べるものなり。

今本題を終るに當て、更に一事の述べおかんと欲するものあり。即ち或る回々教徒の學者は、新舊兩約書中摩哈嘿の降臨に關する預言ありと主張する事なり。今古蘭を檢するに其の第六十一章戰隊品に左の文言あり。

而してマリアの子なるイエス云けるは、汝曹イスラエルの子等よ、誠に我は爾曹に送られたる神の使徒なり。我は我の前に宣傳されし律法を堅め、我が後に來る可き預言者の好きおとづれを告げんが爲めに來れり。其の預言者の名はアフメドと稱せらる可しと。

此のアフメドと云ふ語は摩哈嘿と云ふ語と同じ動詞より轉化し來れる語にして、其の意義も粗同（即ち讀む可き）じ（人の聲）然と新約書中にはかゝる文言なし。而して聖約翰福音書中には左の如き基督の言あり。曰はく、われ眞に爾曹に告ん、我往は爾曹の益なり、若也かすは訓慰師なんぢらに來らじ、

若也かば彼を爾曹に遣らん」と。回々教の學者等は又此訓慰師とは摩哈嘿の事なりと云へり。余輩は今別に彼等が摩哈嘿の天職を證明せんとて聖書中より引用する他の諸節を列擧するの必要なし。摩哈嘿の爲人品格は基督の告げ玉へる訓慰師の如き高尚なる位地を充たすにはあまりに下劣なり。

之より回々教の進歩及び其影響を叙述す可し。摩哈嘿の死後、繼位の争は永く決せざりき。摩哈嘿の從弟にして又彼が最も鐘愛せし娘ファチマを婚りしアリイは、最も彼に縁近きもの、法律上最も合格したる身分として繼位を望めるは自然の數なりされど多くの信徒は之を許容せずして云へり。預言者の位は世間的のものに非らず、故に摩哈嘿の從者中宗教上心靈上最も勝れたる人は其血統の如何を問はず之れに降る可しと。兩黨の云ふ處は孰れも或る度までは正常なり。而して毫も譲ることなくして互に争へり。余輩は爰に摩哈嘿が直弟子の間に起りし内亂を敘するの暇なし。只其の結果を約説せば、アリイの黨は遂に破られ、而して摩哈嘿の位は其從者によりて後永くアラビヤ、マヌカス及バクダッド等に於て建設されたりき。されど争は全く癒えざりき。而して其傷痕は今日も尙ほ殘れり。即ち今日の回々教徒は二派に大別せらる。第一はスチー派と稱して、摩哈嘿の位は最も有徳なる者の降る可きものなり。必ずしも血統にあらずと主張せし黨派の子孫なり。此の派は摩哈嘿教國の大部分を領す其現今の大主は土耳其のサルタンなり。彼は預言者の正當なる繼續者と思惟せらる。而て實際上にては土耳其に從屬せざる回教諸國民すら大に彼を尊崇せり。第二派はシーヤ派と稱す。即ちアリイ黨にして、只波斯に存するのみ。彼等はアリ及び其子孫を以て摩哈嘿の眞正なる繼

續者として受くるなり。さて此の二派は根本の思想に於ては全く同一にして、且つ他の眼よりは外部上にも別に差違ありとは見へぬ程なれども、されど實際上に於ては相敵視すること甚しく、其の互に憎悪するの度は異教徒に對するよりも大なり。

余輩をして再び余輩の傳記に戻らしめよ。摩哈嚙の死後彼が外舅たるアブ、バキル彼が繼續者として布告されたりき。マトヒ多數の信徒は心をオスマンに屬せしと雖ども、されどオスマンは常に大なる尊敬を以てアブ、バキルに接したりき。さて預言者の繼續者即ちアブ、バキルは信徒間に起れる僅少なる小内亂を鎮定したる後、世界全体を席捲せんとの大望を起し、且つ其の事業に着手し始めたり。今回々教徒の着手せし此の大戦争は二重性なりき。即ち一方に於ては波斯帝國と戦へり。時に波斯に於ては基督教の傳教は其の宣教師の熱心によりて大に進歩しおろしと雖ども、尙ほ人民の大數は古き拜火教の奉信者なりき。又他方に於ては歐洲のクリスチヤン諸強國と戦へり。當時歐洲の天地は二大派否々寧ろ二大帝國に分れいたり、即ち一はコンスタンチノープルを首府とせる東帝國にして、他は西帝國なり。

此の時に當ては波斯帝國も、クリスチヤン帝國と共に其の勢力衰へ、元氣枯れいたりしを以て、回々教徒の羽翼を伸すには實に幸時機なりき。

波斯帝國は第一に降れり。實に一戦を以て萬事終れり。されど其人民の心裡に深く回教の信仰を注入するには幾多の世紀を要したりき。而して今日にては古き波斯帝國の遺民はシーヤ派を奉せり。此は既に上文に於て云へり。

基督教に對しては戦争は容易にあらざりき。其は幾世紀の年月を送れり。否な實に十三世紀以前

に始まりし争が今尙ほ行はれつゝあるなり。されど勝利の聲は他の旗の上にとまれり。此等の二大宗教争闘の歴史を其の始めより終まで叙述せんには幾卷の書を要す可し。余輩の今爰に要することは只其歴史の上に一瞥を投ずることなり。其詳細を精究するに非らず。

上文に述べし如く、カリドは一軍の將としてメンゴタミヤよりシリヤまで克服せり。而して彼に屬する將校の一人アムルは直ちに埃及を襲撃したりしが、全く之を征服するにはあまり困難を感せざりき。埃及の克服を以て回々教は今や多數の要國の主となれり。

カリフの繼位者は歐洲全体を克服せんと決心せり。而して此の目的を達せんが爲めに、サラセン軍(歐洲人が亞利比亞の侵入軍に與へたる名稱)は二軍に分れ、一軍はコンスタンチノープルの方向に進み、他軍は亞弗利加大陸の北部諸國を克服し、夫よりプロラルタルの海峡を渡りて、歐洲に入りたり。彼等が目的は歐洲全土を席捲してコンスタンチノープルの軍と會合せんとするにありたりき。之れ實に嘗て一ヶの將軍の腦中に湧き出でたる最大謀計なり。彼等は全くスペインを克服したりたる後、佛蘭西に侵入せり。されど爰に彼等は従前とは異なる國民を見たり。佛蘭西人は生來軍人的なり。之れまで扶搖羊角の勢を以て進撃し來りしサラセン軍は有名なる佛軍の將チャールス、マーチルの爲めに全然打ち破られたり。時は西紀後七百三十二年なりけり。歐洲人は實に此の勝利によりて亞利比亞人の暴政を免れたるなり。

此時佛軍若し破れたらんには、其の結果の人文進歩の上に及ぼす可かりし影響は如何なりしぞ。惟ふに歐洲今日の状態は埃及及び回教の影響を蒙れる他の諸國の状态とは大差なからん。

サラセン軍一たび佛蘭西より追ひかへされし後は、再び其地に足をつくる能はざりき。されど

永く西班牙にどまりたりしが、遂には又爰よりも追ひ掃はれたりき。而して彼等がかく永く西班牙に滞在せし結果は、今日の西班牙をして歐洲の諸國民中最とも纖弱なる最とも奴隸的なるものとならしめたり。

サラセンス軍は幾百年間コンスタンノールを攻撃したりしかど、中く其の目的を達する能はざりき。西紀後七百八十二年有名なる亞刺比亞の將軍ハレム、アル、ナシードは再び之を攻撃せり。されど又其功なくして遂に平和條約を締結して還れり。西紀後千四百五十三年コンスタンノールは遂に土耳其回を教軍の爲めに占領されたり。彼等は今日も尙ほ之を保てり。余輩若し此等の二宗教衝突の歴史に最終の一瞥を投せんか、今日にては基督教は曩きに亞刺比亞の劔刃にてきりどられし殆んど各事各物を回復せしことを見るなり。今やメツカの宗教の從者として存する政府は只土耳其及び波斯の二者のみ、而も彼等現今の狀態は動搖常なく、あはれ其の最終の顛覆は遠きに非らざるが如し。

文明文化の進歩上回々教の及ぼし、影響に付て更に少しく述ぶ可し。

此の宗教の開設者の私の生活及び公の生活并に彼が繼續者等の行事に付て加へたる上述の批評よりして、諸君は直ちに思惟せらるゝならん、かゝる人々によりて指導されたる運動は人類の物質的并に心靈的進歩の上に決して善良なる結果を生ずる能はざるならん。若し摩哈嘿の宗教に關する世論にして如斯に一致しおらんか余輩は爰に之を論ずるの必要な可しされどかゝる廣大なる問題に於ては、余輩はかゝる一致を望む能はず。故トマス、カーライルの如き學者すら、其英雄崇拜論に於て摩哈嘿教を以て人類の上に與へられたる最大恩恵の一なりと論せり。余が記憶

中より左に彼が言を示さん「摩哈嘿を見よ。彼に於て吾人は魔術の如く一言を以て粗暴なる亞刺比亞人を變じて神の子となせし人を見る」カーライルは哲學者なり、疑ひもなく人類社會の内部的運動を精観したる勁眼家の一人なり。尙ほ如何なる哲學者も一瞬間に歴史上の確事實を破壊し得る理論を生ずる能はず。カーライルが英國人の精神を熟知せしことは余輩の疑はざる所なり。されど彼はセミチック思想の發達史をも亦能く領解せしか疑なき能はず。彼は預言者としての英雄として摩哈嘿を描寫せる内に、彼は人類一般の進歩上に於ける摩哈嘿教の影響に付ては其の知る所甚だ少なきを示せり。夫れ今より二千年前にありて其の文明は希臘羅馬の文明に抵抗せし國民は何處にありしか、アレキサンドリアの哲學は何處に發現せしか、是れ阿弗利加大陸の北部にあらざりしか。三千年前より拜火教の下にありし波斯と比較せば波斯今日の狀態は如何にあるか。一時は羅馬及びアゼンヌと競争せし小亞細亞の市都は今如何になれるや。否な亞刺比亞其れ自身の現今の狀態は如何。彼は摩哈嘿前時代に比して如何なる進歩をなせしか。余輩はざる點あるを見ず。否な其の實體の進歩に至ては大に墮落せりと云はざるを得ず。夫れ吾人は第十九世紀の一大哲學者が摩哈嘿を以て一大英雄なりと稱讚したればとて其れが爲めに強大なる歴史的事實の勢力に向て吾人の兩眼を閉ぢざる可からざるか。否な決して然らざるなり。歴史は如何に大家なればとて一箇人の故を以て事實の眞實を曲げざるなり。

摩哈嘿教の影響は其波及せし所、至れる所に不良の結果を生せり。文學上に於ても亦思想の自由に於ても。人或は曰はん、希臘の哲學が基督教に厭倒されて世人の腦裡より消失せんとしたる時に當て、之を維持保存したるものは亞刺比亞人に非ずやと。然り、希臘の哲學が歐洲に於て人氣

を失ひ而してマスカスに於て多くの奉信者を得し時代あるは史上の確事實なり。されど先づ第一に、此の希臘哲學は基督教徒によりて輸入されたるものなることを忘る可からず。通例カリフと稱せらるゝ亞刺比亞人の諸王に厚遇されたるシリヤの基督教學者は始めシリヤの領分に希臘の哲學を輸入せしか、後亞刺比亞人は之をうけつげり。されど其の亞刺比亞人の手に存せしは甚だ僅少なる年月間なり。思想の自由の許されざる國土にありては哲學は決して久住すること能はざるものなり。摩哈嘿教界にありて天折せるは敢て怪むに足らず。且つ又彼は再び爰に復活すること能はざりしなり。波斯に於てはソフィ學者によりて只一度哲學はマスナグイ及びオマル、カヤムの下に昂首し始めたりき。されど其の發現する眞の始めに於て直ちに壓縮されたりき。是れ余輩の知る所にては、思想及進歩の小光明が回々教國の上に下りし只ニケの場合なり。されど彼等は暫時にして其の力を失ひ、再び昂起せしことなし。而して今や回々教は其の支配せる國民と同じく暗黒中に沈めり。又回々教は今日に於ては、世界中最も富沃なる土地の或るものを有せり。此等の地は人類の記憶上多くの神聖なる印象を刻める地なり。嘗て神の林苑たりし地なり。されど今や回々教の壓制の故を以て全く沙漠の如くに變せり。余輩はかく回々教に對する多くの事實の上に兩眼を閉つ可きか。一たび其の苛政の下に壓せられたる國民は決して再び其の力を回復すること能はずてふ事實を忘る可きか。第十九世紀の終の近づける今日に於て、世界中最も苛政に苦める人民は回々教に住居するものどもなりてふ事實を忘る可きか。今日に於ては只野蠻未開の人民間に存在する虐殺の如きものゝ、尙ほ回々教國に於て行はれつゝありてふ事實を觀過す可きか。此等の諸事實は一齊にメッカの淫亂なる奸物の宗教の上に、譴責非難の聲を投するな

きか。

余は第一章に於て、回々教徒は愈々増加しつゝありと云へり。是れ事實なり。マレー諸島に於ては破竹の勢を以て進めり然るに今や上帝は一の文明國として日本の膨脹を南洋に向け玉へり。是に於てか、日本は早晚此の恐る可き奸敵と衝突するに至らんこと必然なり。此の敵は敢て武器を執て争はず、されど其毒液一たび民心に注入されんか其害毒を爰除せんことは殆んど不可能なり。

此までは歐洲諸強國は或る世俗的利益の爲めに、不干渉主義をとりて全く彼等の運動を不問に附し來れるが、余は信ず、日本人は決してかゝる政略をとらざる可しと。今や日本人の南洋に腕を伸し始めたるは之れ上帝此の毒液の流通を防止せしめんが爲めに非らざるか。余は切に其の然らんことを望む。

第十二章 摩哈嘿教の宗教的并に道德的教義

前二章に於て講説せる所によりて、摩哈嘿教は如何なる教義を有するかは、多少想像し得らる可し。されど本章に於ては、更に特に該教所有の教義の一斑を述ぶ可し。先づ其の教義的の教を講じ、次に其の道德的の教に移らん。

第一部、教義的の教

(一)神に對する摩哈嘿の觀念、摩哈嘿は明らかに一神教的觀念を奉じ、基督教の三位一体説を排斥し、又神人同情説即ち愛とか憎とか云ふが如き人情を比喩的に神に附する説を排斥せり。故に其所説は大に第十八世紀の英國「デイズム」に近接せり。但し英國の「デイズム」は人間界及び自然界の事情を以て神を説明することを排斥す。摩哈嘿の神は基督教の「父」にあらざれば、又猶太教の「主」に非らず、されど全く人間界を離れたる實在物なり、而して宇宙の新羅萬象一切之を不變の運命に従はしむ。摩哈嘿の所教に従へば只妻を備ふることの外には、神は殆んど此の世界の一切萬事に關係せざるが如し。

摩哈嘿は三位一体説の大敵なり。彼は決して之を攻撃するの機會を觀過せざりき。彼は三体神説を以て基督教を非難せり。但し三体神説は正統教會の初めより熱心に排斥する處なり。摩哈嘿の言に曰く。

爾曹聖書を受信するものは、爾曹が道に於ける正當の境界を超ゆること勿れ、又眞理の外、何物をも神に付て云ふこと勿れ。誠にマリヤの子なるイエス、クリストは神の使徒なり、神

マリヤに傳へ玉ひし神の言なり、神より來れる靈なり。故に神を信じ、彼が使徒たちを信じ、而して言ふ勿れ、三神ありと。之を云ふを禁せよ。之れ爾曹の爲めによからん。神は只一神なり。神は一子を有す可しと思ふ勿れ。天に在り、地に在るものは一切神に屬するなり。而して神は最大保護者なり。クリストは、神の奴なり、又神の前に近づける天使なりと云ふを、傲然嫌忌せざりき。(阿爾古蘭第四章女人品)

誠に神はマリヤの子クリストなりと云ふ人々は確かに不信者なり。蓋しクリストはかく云へればなり。曰く、爾曹イスラエルの子孫等よ神、我が主、爾曹が主に仕へよ。神を以て己れの夥伴となす人は何人と雖ども、神彼を天國より斥けん。而して彼が住所は地獄の火なる可し。而して神位を褫ふ人々は己を助くる者を有せざる可し。神人三体の第三体なりと云ふ人々は確かに不信者なり。蓋し一神の外に神あらざればなり。而して彼等其云ふ所を禁せざれば、甚しき苦痛はかゝる人々の上に下らん。彼等は不信者なればなり。(阿爾古蘭第五章擡盤品)

古蘭に於ては基督教の三位一体説を攻撃する機會を觀過せず。されど上文に引用する所によりて見れば、彼は能く此の教義を了解せざりしが如し。上文の「三体の第三体」なる語は、亞刺比亞の原語にては「サイス、サマサチン」と云ふ。是れ常に互に異端として排斥する三箇の獨立箇体を意味する語なり。基督教の信仰の基礎たる神聖なる一致は此沙漠の荒兒の無教育なる悟性には毫も領解されざりしが如し。

右の特質を除きては、摩哈嘿の神學中別に著しきものあるを見ず。彼の神は正しく猶太の舊約書

に見ゆる所と異ならず。神はあらざる所なく、其の勢能と攝理は總て其が作業の内に現はる。彼は全能なり。世に彼のなし能はざる一物なし。彼は人心の秘密を知る。故に彼より隠くさるゝ一物もなし。彼は古蘭に教へらるゝが如くに彼が命令に従ふものを恵む。されど彼に従はざるものには、現未二世に於て絶へざる刑罰を備ふ。古蘭に啓示さる此等の神性は余輩も亦確信する處なり。されど摩哈嘿は新しき宗教を興すに當て、彼より數千年の昔に猶太の宗教に於て啓示されたりしよりも神に關して更に或る高尚なる觀念を啓示せざる可からざりき。基督に因て啓示されたる神の觀念は何にたる宗教の概念したるよりも高尚なる事否な最も高尚なること疑ふ可からず。基督教に於ては神及び人の觀念は其の子孫に對する一家族の父の關係を支配する觀念となれり。余輩は爰に此の觀念の眞偽を論せんとするに非らず。されどかく高尚なる神の觀念の摩哈嘿の前に啓示されおるに拘らず、彼は其の意義を解する能はずして、大なる誤想に陥りしことによりて、上文に述べし如く、彼は明らかに神人の兩性を和合する關係の大問題を解釋するの能なかりしことを示せり。彼は自己獨箇の考究の獨斷的結果に基ける自己の狹隘なる思想に自滿せり。マトヒ摩哈嘿はアラトの如き、アリストートルの如き、カントの如き、フイフテの如き、ヘーゲルの如き、ハイバート、スペンサーの如き、自己の天才によりて箇人的理性の著しき作業の或る物を與へし人々と同種の人なりとするも、よしざる種の人なりしとするも、余輩は安然にかゝる箇人に従ふこと能はざるなり。余輩は更に廣大なる或る物を要す、余輩は更に活力ある或る物を要す、余輩は常に理性のみならず、吾人の内性の要する感情及び性力の全体を高尚ならしむる或る物を要するなり。而もかゝる大哲學者の研究に向ては大に尊敬する所なかる可からず。此等の人々は

古代の鬼神傳に於ける半神の如く遙かに凡俗の上に立ち、而して吾人の尊敬に迫りて、殆んど彼等を崇拜せんばかりに至らしむ。彼等の哲學的思想中には、讚嘆す可きものありて存することは、吾人の熟知する所なり。されど摩哈嘿にありては、場合は大に異なれり。彼が神學に於ては余輩は決して著しき又新しき何物をも看出すことなし。而も余輩の摩哈嘿に一致する能はざるは彼が神の屬性の描寫に非らず。余輩の彼に於て大に厭忌を生ずるは彼が大なる抄偷力なり。抄偷的神學書はあらゆる書籍中にて最も嫌惡す可き書なり。

(二)天地創造の觀念、摩哈嘿の創造說に於ても亦余輩は彼れ恐くは精細に舊約書に従ひしならんと想像す。然り其始源に於ても其性質に於ても、同一なり。されど摩哈嘿の所觀は少しく猶太教の說解とは異なれり。彼は恐くはセミナツク人種古代の傳説中より此等の獨立なる觀念を得たりしものならん。上文に述べし如く、彼は此問題の解説に於ては組織的ならず。總てのセミナツク民種の如く彼も亦論理的推理の法則を知らざりしなり。今古蘭第四十一章によりて彼が所觀を示さん。

爾曹は二日(一週間の最初の二日)に於て地を造りし彼を信せざるか、又彼と均しきものを造るか。彼は一切萬物の主なり。而して大地に於て、又大地の上に起れる諸山を確く植へたり。而して之を祀せり。更に四日の内に其處に住ふ可きものとして造れる所造物の食物を備へたり。爾時天の萬物を造らんと決心せり。而して天は暗黒なりき。彼は天及び地に向て從順にか又は汝等の意志に逆ひて來れど云へり。彼等は汝の命に従順して吾儕は來ると答へつ。神は即ち二日(第五及び第六の日)に於て彼等を七天に造れり。而して各天に其の職を命せり。

吾儕は光を以て下天を装ひ、且つ其處に天使等の守衛を置けり。

此の創世説は少しく舊約書の説を變更したるものなること疑なし。摩哈嘿は神の作業の第六日に於て生まれり。彼は第七日に付ては毫も云はず。但し舊約書の創世記には第七日の神業に付て左の文あり。

第七日に神其造りたる工を埃たまへり。即ち其造りたる工を埃て七日に安息たまへり。神七日を祝して之を神聖めたまへり。其は神其創造爲たまへる工を盡く埃て此日に安息みたまひたればなり。(第二章)

是れ猶太教の安息日及び基督教の日曜日の起源なり。然るに上文に述べし如く、摩哈嘿は其の事業の初めより神に對して神人同性説的なる語句を用ゐることに反對せり。彼は第七日に神安息み給へり云ふ點に於て猶太教を非難せり。古蘭に曰く。

吾儕は六日の内に天地と其の間にある萬物を造れり。而して疲勞は吾儕を襲はざりき。(第五章K字品)

古蘭は地獄及び其處にて摩哈嘿に從はざりし人々の受くる苦痛の記載を以て充滿す。されど此等の地獄は何時創造されしか、明記する處なし。

七天の觀念は古きセミナツク觀念なり。舊約書に於ては、諸天の天と云ふか如き句は屢々見ゆ。又哥林多後書に於ては聖徒ポロは云へり「我キリストにある一人のもの(恐くはポロ自からをなせるならん)を知れり。此人十四年前に挈へられて第三の天に至る(或は肉体に在りしか、我しらず或は肉体の外に在りしか我しらず神知りたまふ)かれ挈へられて樂園に至り言べからざ

る言即ち人の語るまじき言を聞けり」と。希臘の哲學者プラトンは其の「ダイアログ」の一書フェドルス中に諸天の上なる天の事を云へり。左に之を轉載せん。

諸天の上に一天あり。其處に真正なる知識の關する眞の實在物住す。此の物たる色なく、形なく、又觸る可からざる元精にして、獨り靈魂の指針なる心のみ見らるゝものなり。神聖なる睿智は心及び純粹なる智識并に適當なる食を受くることを得る各靈魂の睿智の上に養育されて實相を見るを喜び、又再び眞理の上を直視して再び、満たされ、喜ばざる、諸世界の回轉が再び彼を同一の場所に運ぶまで。此の回轉に於て彼は正義と廉節と絶對的なる智識を見る。人々の存在と稱する發生或は關係の形に於てはなく絶對的存在に於ける絶對的智識を見るなり。又同じ方法にて他の眞の諸實在物をも見るなり。(フェドルス篇)

希臘の哲學に於ては、疑ひもなく此は佛教の靈魂輪廻説及び靈魂は究竟涅槃に吸收されると云ふ説に最も近し。されど其の間には一の大なる差違ありて存することを忘る可からず。即ちプラトンは無限時よりの靈魂の箇人的實在を信じ、此觀念に忠實にして最高の天に於てすら彼等をして普遍的實在中に吸收されざらしめたりプラトンは絶對的に彼等を別在せしめたり。

(三)人間に關する觀念、人間に關する摩哈嘿の觀念は舊約書の觀念と異ならず。古蘭に曰はく、我儕は初めに土の塵にて爾曹を作り、後種にて、後少の凝結したる血液にて、後或部分は完全、他の部分は不完全に造られたる肉の一片にて。之れ吾儕其の力を爾曹に顯はさんが爲めなり。而して吾儕は吾儕の善しとするものを分娩の時まで胎内に息はしむ。夫より時至れば胎内より出で、嬰兒とならしむ。而して後爾曹をゆるして壯年に達せしむ。されど汝曹の

或るものは天折し、又或るものは其の知りし事は總て悉く忘るゝほどの老耄に達す。(第二十章巡拜品)

女は男より造られたりと云ふことは舊約書と同じ。(第三十九章軍隊品)

人間は其なす事に責任を有する一の靈魂を賦與せられたり。古蘭に曰く、

此の世に於て善をなす人々は次の世に於て利益を得可し(第三十九章軍隊品)

されど此の美はしき觀念は、回々教徒は又彼等の行爲のみ獨り善なりと信するによりて大に其價値を毀損せらる。彼等は云ふ、異教徒の行爲は總て惡なり、來世には必ず嚴罰を受く可し。蓋し異教徒なるが故なりと。古蘭に曰はく、

されど若し汝曹其の補助を仰ぐ彼等が汝曹の願を聴かざるときは、此の書は只神の智識によりて啓示されたるものなること、及び彼の外に神なきことを知れ。然らば爾曹は回々教徒となるならんか。現世を撰び又之に依て驕奢を撰ぶ人々には、吾儕は其に就て彼等か行業の報酬を與ふ可し。而て同じ物は彼等に滅せられざる可し彼等は來世に於ては地獄の火の外一の報酬も備へられざる人々なり。彼等が今世に於てなしたる事は滅す可し。彼が仕上たる事は水泡に歸す可し。(第十一章波度品)

之れ彼より以前に天啓を蒙れる基督教徒及び猶太人に對する摩哈嘿の觀念なり。彼等に對しては摩哈嘿は常にやゝ寛大なる精神を現せり。而して若し只年々の口税を拂は、回教國內に於て住居し、其國の保護を仰ぐを許せり。古蘭に曰はく、

聖書を授かりたる人々の内にて神を信せず、終りの日を信せず、神及び其の使徒の禁じたる

事を禁せず、眞の宗教を奉せざる人々に逆て闘へ、彼等遂に降服して貢税を拂ふまで戦へ。摩哈嘿は基督教徒を惡めり。之れ彼等は彼に反對し、而して彼は彼等の猶太人よりも更に畏る可き敵なるを知ればなり。彼は又多神教を以て彼等を責めたり。彼等はイエス、キリストを以て神の子となせばなり。されど猶太人は基督を信せず。されど摩哈嘿は又エズラを以て神の子となすとて彼等を非難せり。恐くは猶太人はかゝる新しき非難に一驚を喫したりしならん。されど摩哈嘿は其の見解に於て或るものを有せり。夫れ摩哈嘿時代の前後に於ては猶太人は大に富裕となり。而して善良なる預言者は之を見て親切にも彼等が富の重荷を輕めんと欲せり。而して望の如く富の重荷の下より彼等を救濟せり。實に摩哈嘿の興起後は亞利比亞の猶太人は彼が財源たりしなり。此の點に於ては彼が繼續者は決して彼に歩を譲らざりき。聞く後世に至ては、亞利比亞の諸王は猶太人及び基督教徒の敢て回々教に轉宗するを要せず、されど各々其の宗教を奉じ、而して定額の貢税を拂ふを要したりきと。今日に於ても、彼斯及び土耳其の如き、純然たる回々教國に於ては基督教徒及び猶太人は單に其の支配者のは異なる宗教を奉ずるの故を以て、特別の貢税を課せらるゝと而て此習慣は遂に回々教徒をして其下に來れる基督教徒又は猶太人に向ては貢税を課するの權利有と思惟せしむるまでに至らしめたり是れ概近總ての文明國を戦慄せしめたるアルメニアン虚政の原因なり。之れ人類の歴史上比類なき虚政なり。其等の憐れなるアルメニアン人は先づ土耳其政府に向て租税を拂はざる可からざりき。されど此の租税に向ては其の高の如何に拘はらず彼等は敢て怨言を吐かざりき。蓋し土耳其政府は彼等が正當なる政府なればなり。次に彼等は又地方の知事に向て資金を献せざる可からざりき。更にクルデシユの諸酋長

等より屢々多くの貢物を奪取されたりき。但し土耳其政府の勢力大に衰微し、其等の諸酋長を鎮制して其の臣民を保護する能はざりければなり。されど茲には之を詳述する能はず。本題に立ち戻らしめよ。

(四) 未來の賞罰、善人悪人の賞罰は終りの日に於て行はる可しと云ふ。而して古蘭中には其の日の有様を描寫すること詳細なり。

大陽は包まれ、星辰は落ち、山は崩れ、猛獸は共に集り、海は沸騰し、靈魂は再び其の身体と合し、天はもぎとられ、地獄はおそろしく焼へ又樂園の近づき來らん時、各々の靈魂は其のなせし所を知る可し。

此の叙記は古蘭中諸所に見ゆ。さて夫より先づ悪人の處刑あり。而して其所謂悪人なるものは、總て摩哈嘿に從はざりし國民に屬するものなるは云ふまでもなし。

信せざる人々は火の衣を着せられ、其頭上より沸騰せる蒸湯を打ち浴さる可し。夫によりて彼等の臟腑及び皮膚は壞爛す可し。更に彼等は鐵槌を以て打たる可し。彼等は苦痛に堪へ兼ねて密かに地獄を通れんとするときは、常にその場所に牽もせざる可し。而して獄鬼は、彼等に向て曰ふ可し。爾曹、能く燃焼の苦痛を味へど。(第二十二章巡拜品)

神はかくして悪人を刑に處したる後、摩哈嘿に從ひしものを集め、其の預言者に從順せし報賞として彼等を樂園に導く。

されど彼が主の法廷を恐るゝ人の爲に、枝葉鬱蒼たる樹木の清陰をつくれる二ヶの林苑ありて備へらる。各林苑には清泉の湧出するある可し。諸菓實は二種づゝある可し。其處に至れ

る人々は其の裏は黄金を織り込める厚き絹を以て作られたる憩床の上に安坐し、而して二園の菓實は共に其の欲する時に手元に來る可し。又嬋妍たる窈窕美人、嘗て人間又は鬼神に穢されしことなき美人は「ルビ」又は眞珠色の容貌を備へ、偏に彼を望みて來り彼を受く可し。又此等林苑の外に、更に暗緑なる二ヶの林苑ある可し。而して其の各には清水を噴出する二ヶの泉ある可し。又菓實、棕櫚及び石榴は其内に充満す可し。又舉動閑雅にして五ヶの瑠璃眼を備へたる、而して未だ如何なる人又は鬼神よりも穢されしことなき美人ある可し。其處に幸福者は綠床美布の上に横はりて其等の天福を樂む可し。光榮榮譽を具せる汝が主の名を祝せよ。(第五十五章慈者品)

回教徒近世の學者の多くは古蘭中かゝる具體的物質的方法にて樂園の狀態を叙記する文言に遭ふときは、常に是れ只比喩的描寫に過ぎずとして解し去らんとす。且つ之によりて神に對する摩哈嘿の愛及び天を信するものが樂園に於て養ふらん愛情の強大なるを證せんとす。彼等は云ふ、新婚夫婦の愉樂が世界一切の愉樂に勝れるが如く人々天に於て神及一切の眷屬知己と遭會することの愉樂は極大愉樂、最大歡喜なる可しと。余輩は此等の新しき註釋の眞實ならんことを望む。されど彼等の然らざるを如何せん。又古蘭中さる文言の存すること只一ヶ所ぐらいにして、且つ其の意義や、朦朧たらんには余輩は之を不問に附して過さん。又天に對する摩哈嘿の觀念は不道德的なりとの非難も直ちに消失せん。されど其の然らざるを如何せん。第一に此の諸天界記に見ゆる天福の感覺的物質的なることは、之に關する文言の數多にして、又其意義の實に明白なるによりて之を疑はんとて疑ふ可からず。古蘭を通覽する人は其の天界記中心靈的の意義に於ける一

事も存在するなきを見ん。實に回々教徒自からも常にかく了解するが如し。天に對する彼等が觀念は全く物質的なり不潔なり。回々教の歴史中嘗て高潔なる心靈的なる意義に上りしことあるを見ず。新しき意義は單に開祖の耻辱を覆はんが爲めの新しき發明に過ぎず。

第二に、此の天界觀は摩哈嘿の内性に適合す。摩哈嘿にして若し佛陀の如く犠牲的献身的にして其の性行高潔なる聖人なりしならんには、余輩は實に彼に對してかゝる非難を呈するを却て辱するなり。人物の高尙なるは屢々其の敵の口を縫ふて苛刻の言を發せざらしむ。されど誰か回々教の開祖はかゝる人物なりしと主張するを得ん。回々教徒自身も敢て彼か處行の高潔ならざりしを否まず。されど彼等は之れ高上なる權威を備へたる人によりて行はれたるものなるからに不正に非らず不義に非らずと辨護せんと欲するなり。彼等は主張すらく、摩哈嘿は權威を有せり。律法より上にあり、彼の行爲は他の人間を支配する律法によりて判斷さるゝ能はずと。然り人は律法より上に立つを得、されど一たび此の高上なる地位に達せんか、彼は眞に律法以上の行爲を現はさざる可からず。然り而して摩哈嘿はかゝる人物には非らざりしなり。

以上回々教の教義的部分を約説し了りたり。次に其の倫理的部分に入るに先だちて、少しく其の儀式禮典に付て述べおかんぞす。

佛陀基督と同じく摩哈嘿も亦一の教會を設立し、彼が制律教義によりて其の信徒を指導管理せんとせり。さて此の教會に入りたる人をさして「モズレム」と云ふ、降伏者の義なり。詳しく云はゞ自から摩哈嘿の教に降伏したるもの、義なり。之れ摩哈嘿の隨喜者か互に相呼稱する名なり。吾人か彼等を稱して摩哈嘿教徒と稱すれども此は彼等の知らざる名稱なり。之れ歐洲人の發明語な

り。されど惡しき發明語にあらず、佛陀の宗教を佛教と云ひ、基督の宗教を基督教と稱するに對して適切なる名稱なり。さて「モズレム」と云ふ語は亞刺比亞語にして「サラマ」と云ふ動詞より轉化し來れり。「サラマ」は強ひられてか又は自から好んでか、其の孰れなるを問はず、己れよりも強大なる勢力に降伏することを意味す。而して通例攻圍を受けたる市城の降伏を表すに用ひらる又平和の義に用ひらるゝこともあり。されど回々教徒を「モズレム」と稱するは其の第一義即ち降伏するの義より來れるものならん。摩哈嘿の兵其の手に拔劍を掲げて異教徒に迫るや、先づ「サラムヤ」と云ふを常とす。即ち「汝降伏するか」の義なり。詳しく云はゞ回々教徒を支配する律法規則を順奉するかの義なり。而して其の人若し「サラマ」(吾降伏せん)と云はゞ即ち生命を助け、摩哈嘿教會に入らしむ。若し然らざらんには、即ち彼が首をはね、妻子を擒にし強ひてメツカの預言者の宗教に入らしむ。而して其の財産は全く沒收して之を信徒に分つ。かくて此の「サラマ」なる語は漸々に預言者の奉信者と云ふに均しき意義を有するに至れるならん。今日にては回々教徒は自から「マーサールマン」——降伏したる(人)——と稱せり。

摩哈嘿の生活并に事業を約説せる章に於て、余輩は預言者の奉信者の大多數の最大動機は始めより終りまで奪掠なりしことを見たり。世間的利益を獲得せんとする此希望は盜賊の頭か好良なる秩序に於て其の下手を治むる最良誘因なりき。是れ實に半ば餓死したる亞刺比亞人をして、亞細亞、亞弗利加及び歐羅巴の全体、否な當時知られたる世界の全体の富財が彼等の手の外にあらざりしとき、其の生命をも忘れて勇戦猛闘せしめたる最大原因なりけり。多くの宗教の歴史に於て、余輩は其の奉信者が年代の經過する内漸々勢力を得て強大を致すに及んで、復讐として彼等が以

前の窘迫者の上に害を加ふることあるを見る。されど摩哈嘿教は其の眞の始めより勢力を有したるが如し。摩哈嘿メツカに住する間に受けたる困難の如きは、之を基督教が羅馬政府の下に受けたる迫害、佛陀の修行間に堪へたりし辛苦に比すれば、實に何の事かは。

摩哈嘿教の入門式は割禮なり。而して割禮なるものは摩哈嘿之を舊約書よりかりたるものか、又は亞刺比亞人の古き貴き慣例として之を維持保存せんとの旨意にて用ひたるものか、人々の意見異なれり。されどタトヒ古代の亞刺比亞人は既に其男性に割禮を施しおりしとするも尙ほ此は一般に行はれりし宗教的儀式なりと云ふ證據は未だわがらず。案ずるに此割禮を以て回々教遍通の目標となすに於て、預言者及び其の繼續者等は彼等が異教的祖先の粗笨なる國習よりも、寧ろ嚴密なる猶太教の律法を常に其眼前に置きしならん。されどたとひ回々教の割禮は猶太教より假りたるものとすも、尙ほ此の二者の間には或る根本的差違ありて存す。猶太人は男子生れて第八日に割禮を施す、されど回々教に於ては少くも十二歳以上にあらずんば之を施さず。又猶太人の割禮に對する觀念は回々教徒の觀念よりも深奥なる旨義を有せり。前者の觀念は男子割禮を受けたる日より全く教會に入るを許されたりとなり。されど後者は別に故なくして之を延ばし、或る時は成年に達するまで打ち捨置くなどの事より察すれば、其の割禮を重せず、又猶太人の如く之に神妙なる旨義を附しおらざるが如し。但し茲に注意しおく可きことは、總て回々教徒は割禮を以て預言者より傳はれるものと信ずれども、古蘭中には毫も割禮の事を記載せる所あるを見ざることなり。

眞正なる回々教徒の守る可き第一の要事は日々の祈禱、洗身、及び此等に關係する事どもなり。

爾曹眞の信徒等よ。爾曹祈禱の順備するときには、爾曹の顔を洗ひ、爾曹の眉より手まで洗へ、又爾曹の頭及び脚目より足まで摩れ。若し婦女と同床することによりて穢されるれば爾曹の全身を洗へ。されど爾曹若し病むか、旅行に在るか、又水なきときは、美はしき清き沙をとり、其を以て爾曹の顔及び手を摩れ。神は爾曹の上に困難を興ふことを好み玉はず。されど爾曹を清め又爾曹をして感謝せしめん爲めに爾曹の上に彼が恩恵を完成せんと欲し給ふなり。(阿爾古蘭第五章擡盤品)

祈禱は日に三回行ふ可し。

太陽の傾くとき、夜の第一の暗黒來るとき、及び曉の來る時正しく爾曹が祈禱を勤修せよ。曉の祈禱は天使之を視守するなり。爾曹が餘分の勤務として同じ修行を以て夜の或部分を守れ。之れ爾曹の主が爾曹を尊ぶ可き位置にあげ給はん爲めなり。(阿爾古蘭第十七章夜行品)

祈禱は誠實なる信徒の是非守る可き義務なりき。摩哈嘿が其信徒に與たる命令の中にて最良なるもの、一は爾曹は常に祈禱し正しく其濟財を拂ふ可しと云ふにあり。古蘭中には各信徒の用も可き祈禱の一定の文式なし。されど後各信徒が日に三回用ゆる一定の文式は漸々に發達せり。但し此の文式の事は既に説けり。彼等の祈禱は別に實際上の功果なし。即ち彼等は其意義の何たるかを了解せざる亞刺比亞語の祈禱文を只機械的に唱するのみ。基督教徒の祈禱に附着せる熱心誠意と云ふことは全くなし。恐くは彼等口に祈禱文を唱ふと雖も、其心は常に俗事を追ふてさまよひおるなる可し。然り而して吾人々類が徳の道に進み、善の行に入るは、俗界の慾心を離れ、神の座に近づかんとする時に最も著し。

祈禱する前に身体を洗ひ清むることは他の美點なり沙漠の生兒なる亞刺比亞人には殊に緊要なることなり。炎熱蒸すが如く、水濁れて容易に得がたき亞刺比亞の如き土地にありては人は自然沐浴を怠るに至る而して之より諸種の疾病は發生し來る可し。亞刺比亞は其の歴史の初代より疫病を以て有名なり。然るに今沐浴を以て宗教上必要なる義務として課することは、彼等に向て甚だ善良なることなり。是れ摩哈嘿かあまり清潔ならざる亞刺比亞人に向て與へたる最良物なる可し。

祈禱に次て斷食あり。摩哈嘿は斷食の必要を覺り、其の上にななる重目を置けり。彼は斷食をよんで「宗教の門」と云へり。又「斷食せる人の口の香は麝香よりも神を喜ばす」と云へり。又或る回教徒の學者は斷食は宗教全体の四分の一部分なりと云へり。さて斷食に三制戒あり。第一には飲食を斷つこと。之れ今日に於ても回々教國全体に於て、「ラマザン」月の間に行はる「ラマザン」月は古蘭天降の月なりと云ふ。四十一日あり。但し回々教徒は大陰曆を奉ず。此の月に入れば各信徒は、男女を問はず、(大抵十四歳以上なりと思ふ)早朝より全く食を斷つ、水飲むさへも禁せらる。されど、斷食の重荷は眞に勞働者の上にもみ落ちたり富祐者は只夜を盡にかゝるのみ。彼等は晝はひねもす快眠し、而して夜は大に酒宴を開く、其の狀態茲に描寫するに堪へず。されど其の日暮しの勞働者は已を得ず、斷食せざるを得ず、而して其の饑に堪へずして屢々昏倒するものありと云ふ。但し回々教の斷食は全く精神なき死體に過ぎずと雖も、尙ほ回々教國に於ては善良なる効果を有せり。實に回々教國を旅行するもの、ヤ、安全を得るは、只此の月に於てのみなり。之れ又各信徒が一年中聖書を繕きて、何かサツパリわからぬながら亞刺比亞語の文句を少し

く口頭に唱ふる唯一の月なり。

第二には耳目舌手足及び其他身体の諸局部の罪業を制すること。第三には一切の妄想邪念を斷ち、只神をのみ念すること之れ甚だ美はしき戒律なり。摩哈嘿は多分之を猶太基督教の聖書中よりかりたるならん。又閑寂なる洞窟に籠りて日夜將來の事業に思念を凝らせし間、彼自から修めし經驗上よりも得たりしものならん。「ラマザン」月の間に行はる斷食法の詳細は阿爾古蘭第二章牛品にあり、就て見る可し。

メッカ巡拜も亦各信徒の修む可き義務なり。之を修せざるものはクリスチャン又はツューの如き惡人なりと或學者は云へり。又古蘭には左の文言あり。

誠マカに神を拜する爲めに人間に向て撰ばれたる第一の家はベツカにある家なりき。譯者曰ふ、ベツカはメッカの巖なり。同市府を指す。之れ神の祝し玉へる家にして、又一切の萬物が神に祈るときに其の顔を向く可き方向なり其處には著顯なる奇蹟あり。譯者曰ふ、セルス氏の詳釋によると此の奇蹟の中に摩哈嘿の足跡を印せる石あり計余は足石崇拜は只佛教徒の習俗に非ず、之によりて摩哈嘿教徒の間にも亦此の崇拜の行はるを知る人あり。今之を研究す。突するは比擬神學士俗學上甚だ面白き問題と思惟す。他の宗教にも此の例あるを知る人あらば教へ給へ。アブラハムの起立せし場所あり。爰に入る人は何人と雖も、安全を得可し。而して此の處に行くを得る人々には、此の家を巡拜することは神に對する必須なる義務なり。(阿爾古蘭第三章伊無蘭族品)

猶太人がエルサレム巡拜の慣例を有せしことは諸君の熟知せらるゝ處なり。摩哈嘿はメッカの殿堂を以て人類の巡拜所として神之を撰びたまへりと云へる時疑ひもなく、猶太人の習慣を其の心裡に保ちしならん。摩哈嘿は何處よりして此の知識を得たりしか推知し難し。聖歴史によりて學び得る限りにてはアブラハムは嘗て亞刺比亞に巡遊せしこと見へず。而して舊聖書を外にして他

にアブラハムの事蹟の徴す可きものなし。又舊約書全体を索檢するも神一切人類の禮拜所としてメツカの殿堂を撰べりと云ふ事、何處にも見當らず。總ての回教徒は其生涯中少くも一回は巡拜せざる可からざるメツカの殿堂はもと亞刺比亞原始の宗教に屬せしものなるが摩哈嘿之を奪ひて己が殿堂となせしこと既に前章に述べたり。此の殿堂は其名をアルアフラムと云ふ、神聖なる建物の義なり。又ハイト、アルラフとも云ふ、神の家の義なり。回教信徒の外は何人と雖も該市府の防壁内に入るを許されざるを以て、其の狀況の詳細は窺ひ知り難し。只折々歐洲の旅行家が回々教徒に紛して其の内に入り、其の大体を觀察し來るのみ。但し世界にかゝる秘密なる市府二ヶ所あり。一は即ち今述べたるメツカにして、他は西藏のラツサなり。

さて此の殿堂の内には崇拜の本尊たるもの三箇あり。第一の又最大なるものは黒石なり、各巡拜者は之れに接吻するを以て禮拜の方式とす。此の石の由來に云ふ。之れアダム世に生れたるとき天より降り來れるものにして、もとは白石なりしが、衆生の罪業大なるによりて黒色に變じたるものなりと。されど恐くは幾億萬の巡拜者が之に接吻せしよりかく變色せしものならん。又其の眞の由來を尋ぬれば之れ原始拜物教の遺物なる可し。

次に白石あり、アブラハムの石と稱せらる。其の上にアブラハムの手足の形跡を傳ふるもの存す。第三のものはサムサムと稱する靈池なり。其の池水は樂園より、流れ下れるものと云ふ。總ての巡拜者は先づ此池にて身体を沐浴せざる可からず。而して之れ實に今日に於て、否な此の儀式の始めより、メツカに於て虎刺拉病の猖獗を極むる大原因をなすなり。夏天の暑炎砂土を焼くの時

に當て、^{大抵}大くもあらぬメツカの市府に幾萬の巡拜者充滿して、而して同じ小池に入りて沐浴す、實に此の小池は傳染病の好媒介をなすなり。時としては拉病の死者計算すること能はざるに至ることありと云ふ。

余輩は前二者即ち祈禱及び斷食に就ての如く、此の巡拜の制度に就ては證據を呈する能はざるなり。此の點に於ても亦摩哈嘿は新約書に従はずして舊約書に従へり。基督はかゝる事を其信徒に求めざりき。彼か言は明亮なり。曰はく、

我を信せよ、唯に此山のみならず、亦エルサレムのみにも非らずして、爾曹父を拜す可き時きたらん。眞の拜する者靈と眞を以て父を拜する時きたらん。今その時になれり。夫父は是の如く拜する者を要め給ふ。神は靈なれば拜する者もまた靈と眞をもて之を拜す可きなり。

(約翰傳第四章二四)

何故に此の點に於ても摩哈嘿は新約書に従はずして舊約書に従ひたるかは推知すること難し。されど之れ彼はメツカを以て彼が宗教の中心となし、諸國民の富を爰に吸收せんと企てしによる可しと想像せば、當らずとも遠からざる可し。

神施は又回々教信徒の守る可き義務なり。此の點に於ては古蘭は甚だ嚴格なり。摩哈嘿は繰返し古蘭中に惜みなく神施を献ぐべきことを勸誡せり。彼其從者に供給するには一に全く之によりしなり。但し彼れ大軍を得たりし後は一の新しき富源を開けり。即ち奪掠之れ如し。さて摩哈嘿は奉獻を求むること甚だ嚴なりしと雖も、別に其の額は制定せざりしが如し。古蘭中何處を探くるも之に關する記事見へず。(但し猶太人は十分一税を徵收せり。)又現今は神施の事を彼等は

「ザカート」と云へり而して其の所謂神施なるものは竟極何處に收まるかと云ふに、悉く寺院の金庫に收まるが如し。貧民は其の一分の恩施にだにあづかること能はざるが如し。盛に他を征服しつゝありし初代に在りては、あまり神施物奉獻物の必要を感せざりしならん。されど今や寺院は之によりて維持さるゝなり。恐くは回々教國ほど貧民救施の道の備はらざる處はあらざる可しされど此は摩哈嘿の過ちに非らず、今日彼が宗教を支配しつゝある精神の過なるなり。貧民の救助に付ては摩哈嘿は大に其の信徒を勸誡せり。彼は殊に鰥寡孤獨を憐めり、蓋し前章に述べし如く、彼は早く両親に離れ、叔父に欺かれ、つぶさに孤兒の慘味を経験したるを以てなる可し。

孤兒成長して適當なる齡に達すれば彼等か家産を與ふ可し。彼等の善を奪ひて惡を與ふ勿れ。彼等が家産を奪ひて汝等の家産に加ふ勿れ。是れ一大罪業なればなり。(阿爾古蘭第四章女人品)

同章中彼は更に嚴刻なる言をなせり。

不正に孤兒の財産を奪ふ人々は確かに其の腹に火の外何物をも呑み込まざる可く、又もゆる
 火炎の内に熱す可し。

摩哈嘿は又一切種の賭博を嚴禁せり。更に之と共に飲酒をも嚴禁せり。

彼等は酒及び鬩に付て爾曹に問ふ可し。兩者とも之を用ゆるは大罪なりと答へよ。(第二章牝牛品)

飲酒及び賭博の二者は總ての回教諸國に於て行はれざるにあらずと雖ども、之を他國に比せば尙

は甚だ僅少なりと云ふを得可し。然り而して今や回教諸國に於ては阿片を飲用することはいよいよ盛大を致し來れり。是れ彼等の上で大毒害を流す可し。回々教の先導者たるもの宜しく早く茲に着眼して之を嚴禁す可し。彼等は古蘭中の戒律によりて之を嚴禁し得るなり。古蘭中には明かに一切發醉物の飲用を嚴禁せり。

第二部 倫理的の教

此よりは回々教の倫理説を講述す可し。されど、上來述べし内には、倫理に關する點も多かりしを以て諸君は大抵斯倫理説の概質を知識せられたるならん。

先づ結婚の事を説かん。既に屢々述べし如く回々教は基督教の一夫一婦主義に従はずして、猶太教の一夫多妻俗に従へり。故に結婚は二箇の平等なるもの、契約に非らずして全く不平等なるもの、契約となれり。故に又家族の神聖と云ふことは回々教徒は全く之を知らざるなり。是れ他の一夫多妻國民に於けると異ならず。之に反して此の家族の神聖と云ふことは基督教的文明の大根礎たるなり。其の物質的文明は如何に進歩するとも、一夫多妻を全く撲滅せざる以上は、其の國民は未だ眞の文明を以て驕る能はざるなり。

一夫多妻俗に附着して起ることは離婚なり。如何なる國民と雖ども、離婚を許さずして獨り一夫多妻俗のみを保持する能はず。蓋し一夫にして多妻なれば、閨門の内常に風波鎮まらず、而して之を治むるには自から離婚の必要を感し來ればなり。

回々教徒其の妻を去らんと欲せば、單に結婚前にとりきめたる金額を與ふれば足れり。而して其金額は夫たるもの、資力に應じてとりきめらる。只一たび離別されたる女は再びもとの夫に嫁

するを得されば若し二度離別するときは、其の女は一たび他の男子に嫁し、而して離別されたる上に非らずんばもとの夫は之をめぐむを得ず。

姦通、及び強姦は終身禁錮を以て罰せられる。

回々教に於て結婚を禁せらるゝは左の親縁を有するものをもなり。

母、娘、姉妹、伯母(父方母方共)姪、(兄弟及姉妹の女)大姉、小姉、長姉、弟姉、媳姉等なり。又姉妹同時に一夫に嫁するを得ず。但し一死するときは他は其に代るを得。(阿爾古蘭第

四章女人品)

肉類を食することは許さる。されど或る獸肉は禁せらる。而して其最も禁せらるゝは猶太の律法に於て禁せられたるものと異ならず。其の内に於て殊に嚴禁せらるゝものは、豕肉なり、蓋し豕は獸類中最も不潔なるものと思惟するを以てなり。又病死せる動物の肉は食ふを許されず。(之れ亦猶太の律法よりかりたるものなること疑ふ可からず) 兩親を愛敬し、又之に孝養を盡くすことは教示されたり。

汝、其親、片親又は兩親が老年に達するときは之に向て親切を示せ。其故に汝、彼等に向て嫌辭を發する勿れ、又彼等を罵ること勿れ、されど彼等に向ては常に恭しく語れ、又愛情よりして謙遜の翼を下げよ、而して云へ、オ、主よ、我いとけなきとき、彼等我を養育したれば、彼等の上に恩寵を下し給へ。(第十七章夜行品)

人若し過ちて信徒を殺さば、奴隸の信徒一人を放釋し、又殺されし信徒の遺族に一定の金額を拂はざる可からず。されど若し故意に之を殺さば、摩哈嘿は其の殺人者の現世の刑罰は如何なるか

を吾儕に告げずして、彼を地獄の火に投下す可し。一の奴隸若し、他の奴隸を謀殺せば、死に處せらる。されど自由の人奴隸を殺すも敢て罪に問はれず。

摩哈嘿教は奴隸蓄用を禁せず。否な回教國は今日にありて奴隸の存在する唯一の場所なり。此の惡む可き奴隸蓄用の俗が、基督教に於てすら、其の精神の根本的に此の惡俗に反對するにも拘はらず、深く根底をつき入れたりしは實に驚く可きなり。彼全く此の惡俗より免るゝには殆んど十九世紀間の年月を要せしなり。基督教始めて希臘羅馬世界に進入せしとき、爰に奴隸制度の確立せるを見たり、而して現世紀まで之を芟除する能はざりしなり。今や基督教は全く之を脱せり。而して回々教に向て其の例に従はんことを促せり。回々教は之を好まずと雖ども、尙ほ抵抗するの力なし。惟ふに地球上、此の野蠻的風習の全く消失するの日は遠きに非らざる可し。

古蘭は今日に至るまで、否な今日も尙ほ回々教諸國の唯一の成文律として社會上大なる權威を有せり。其の内には人間の行爲に關する一切事の法規戒律を藏せり。此書若し此等の事項を有せざらんには、回々教史の十三世紀間を貫通して毫も變ずることなしに、かゝる高上なる地位を保つ能はざりしならん。摩哈嘿は如何にして其の奉信者に適する律法を制す可きかを熟知せり。余輩は古蘭中に於て殺人、竊盜詐偽等に關する刑法より度量衡に至まで、社會に關する事は一切茲に制定せらるゝを見るなり。而して此等の制法は回々教徒に向ては皆な神聖なる權輿を有するものにして、人間の制したるものに非らず。又其の刑法は甚だ温和にして、殊に對手は基督教徒とか猶太人とか云ふ異教人なるときは、獨り彼等の利益になる様制定されおるを以て彼等は大に摩哈嘿に向て感謝せざる可からず。基督教徒又猶太教徒にして回々教と争を生じ、而して之を回々教

國の法庭に訴ふるは全く無用なり、否や時と金の無益の消費なり。一人の英國人嘗て回々教國政の異教徒に對する處置の偏頗不公平なるを世論に訴て曰く、爰に一人の回々教徒ありて基督教徒百人回々教徒百人ある前に於て基督教徒を殺したりと假定せよ。而して之を法庭に訴ふと假定せよ。此の時に當て百人の基督教徒口をそろへて一回々教徒の一基督教徒を殺せしことを證言するも他の回々教百人然らずと云はば、否な回々教一人にても然らず、其の然らざることは吾之を證すと云はば、基督教徒の證明は全く無効となり、而して殺人者は無罪放免さる可しと。余は本卷第一章中にも云へりし如く、二十五才までは回々教國內に生長したるもの隨て回々教に關しては實地見聞したることとより少なからず、而して余はかの英國人の言を以て眞實を曲げおらず、實に彼の云ふが如しと斷言するを敢て憚らざるなり。

余は以上説述したる所を以て、爰に回々教の講義を終らんとす。而して今上述せる所の言を反省するに、余は敢て摩哈嘿に對して刻評を下さざりしと思ふ。余の望む所は只何事をも陰蔽せず。ありのまゝに説示せんとするにありたりき。而も其の該教の結果及び影響に付ては、やゝ激なる言を發せしは、之れ余輩の見る所の正當なるを信せるを以てなり。歐洲の批評家中には摩哈嘿の出現したる時代の古きを口實として彼が過失を減少せんとするものあり。もつとも今日より見れば彼は古代の人なり。されば彼は遙かにモーセ及び基督に後れて出現したるなり。彼は其の眼前に新舊の兩約書を有せしなり。然るに此等の事あるに拘はらず、暴虐に満ちたるかゝる恐る可き、奇怪なる宗教を發生せしことはそも之れ彼が觀念の粗惡にして、而して其動機の不正なりしによるとするの外なし。

余は本講を順備するに當て、一に只古蘭のみによりしは、之れ此書は斯宗研究の根本的材料なるを以てなり。但し此の事たる之を疑議するもの嘗て一人も現はれしことなし。

余は今爰に正心誠意メツカの偽預言者の軌より數多の生靈を救ひ出し玉はんことを天父に祈りて以て本講を終る。

譯者より

余は今本卷を譯して之を公にするに當り、讀者諸君の寛恕を乞はざる可からざるもの、二三ありて存す。(一)は翻譯の精練ならざることなり。之れもとより余の淺學不文に職因すと雖ども、尙ほ他に二三の事情ありて以て余か鈍き筆をしていよく鈍らしめたり。一には翻譯の日數僅少なりしことなり。余は僅かに二ヶ月に滿たざる日數を以て而も傍ら東京三一神學校に至りて日々本卷の講義を通譯しながら、本卷の翻譯をやりあげたり、故に其の多忙實に云はんかたなく、參考す可き書あるも十分に之を參考する能はず、又譯文にあきたらぬふしあるも之れが爲めに思想を費すこと能はずして止めり。(二)には原文の事なり。本卷所詮の思想はもとより著者が腦裡に凝結したる多年の研究の果なる可しと雖ども、其の之を文に致さるゝや、亦僅かの日數を以てせられたるを以て、文章家たる著者の如き人にありてすら、尙ほ余が翻譯をして一層困難ならしめし所なきにもあらざりき。故に本文中意義のや、明亮をかく所あるも、あながちに、余獨りの罪にも非らずと推恕せらんことを乞ふ。

(二)には附録の事なり。余は始め佛教研究に關する左の諸件を本卷に附録する積りなりしが、前上述ぶるか如き次第なりしと、更に本卷翻譯の終りに近づける頃より、我が一身上の事に付て大に心思を煩はさるを得ざるに至りしを以て、終に其の目的を成する能はざることゝなれり。之れ亦、偏に、讀者諸君の推恕を乞ふ所なり。左に只其の大意を一言しおかん。

(一) 南北佛教と云ふ名稱に付て

佛國のヒュルムーフ氏佛敎史序論を公にせられし以來、此の名稱は歐洲學者の一般に採用する處となれり。而して彼等の思へるには、南部佛敎の原經は悉く波理語を以て書かれ、北部佛敎の原經は悉く梵語を以てかゝると。彼等は此の區別を意味するとして此の名稱を用ひたり。されど此の思想の繆れることは、今や明亮となれり。所謂北部佛敎なるもの、經典中も波理語を以てかゝれしならんと思はるゝもの少なからざるなり。(ヒール氏支那佛敎文學講義第二章及び支那佛敎論第一章緒論參考)

否々北部佛敎國の一なる日本に於て、波理文を刻せる具多羅葉二ヶ所に於て發見されたり。(「アチクドタ、オキアニエンシア」第一卷第一部參看) 故に原經語の區別を意味するとして此の分類を採用する能はざるなり。されば佛敎の性質上より觀察せば如何、南北二派に分類すること能はざるかと云ふに之れ亦嚴密に云は、甚だ不完全なること有名なる英國の佛敎家リス、タヴイド氏既に之を云へり。(千八百八十一年ヒツベルド講義佛敎論第四章參看) 但し氏は北部佛敎なる名稱の不適當なるを論ずるのみにして南部佛敎なる名稱に付ては論せずと雖ども、既に北部佛敎なる名稱の不適當にして而して之を東部北部の二部に分かつこともあまり適當とは思はれねば、單に南部佛敎なる名稱のみを保存する能はざること明らかなる上來論するか如くなれば此の分類此の名稱は全く之を排斥す可きかと云ふに、若し他に適當なる分類あらば余輩はよろこんで之を捨てんなれども、未だ他に適當なるもの、發見されざればヤハリ之を保存し而してヒール氏の云へる如く、南部佛敎とは原始の純粹なる佛敎に近きものを意味し、北部佛敎とは後世種々の思想の混合したる雜複なる佛敎を意味するとして

(二) 佛典の原語

之を解しおかんと欲するなり。又此の分類は地理上より佛敎を研究する上にも便利あり。現今傳存する最古の佛典は二種の語を以て記さる、一は梵語にして、他は波理語なり。梵語佛典はホツマソン氏始めて之を泥波爾の寺院に於て發見し、後ヒュルムーフ氏の研究を経て大に明らかになれり。波理語佛典はターナー、ゴツガリー、チャイルダー、オル、デンブルヒ、リス、メヴイド、フェニスホル、ケルン、マクス、ミユレル等の諸氏の盡力によりて明らかになれり。かく今日に傳はれる最古の佛典に此の二種の區別あるを以て茲に此の二者の内孰れか最も古き、即ち波理語佛典は梵語佛典よりも古きか、或は梵語佛典は波理語佛典よりも古きかと云ふ問題の起り來るは自然の數なり。左に此の問題に關する諸説の主眼を列擧す可し。

始めて梵文佛典を以て最古の佛典となせし人は梵語佛典の發見者たるホツマソン氏なり氏の語に曰く、佛敎の僧侶等は其の宗敎を實際に宣説するに於ては、地方の方言を用ひたり、されど其の敎の基本をつくれる哲學的觀念は初代より梵語にて保存されたりと。氏の説に賛成して此の説を主張する學者少なからず。次に波理語佛典を以て最古佛典なりと主唱する學者中にチャイルダー氏は其最も熱心なる一人なり。氏曰く、余は何人も如何にして波理經を以て梵語經より翻譯されたるものと信じ得るか想像する能はずと。又曰く北部佛敎の梵文經は更に古き波理文經に基づけるものなりと。更に此二説の中間に立ちて折衷説をとれる學者も少なからず。ラッセン氏曰はく、初めより佛は婆羅門に向ては、梵語を用ひ、人民には摩喝

陀語又は波理語を用ひたりと。又曰く二種の經典は第一公會の時より存在せりと。ピユルヌーフ氏は曰へり。一は人民に向て、他は婆羅門學者に向てかゝれしものなり。されど波理語經か其の現形をとりしは梵語經よりは後なりと。余は波理語佛典を以て梵語佛典よりも古きものと信するなり。此は二經典所詮の思想よりしても推知せらる可し。されど現存の梵語佛典を以て全く波理語經より翻譯されたるものと云ふに非らず。其内には後世印度北部に於て發達せる思想を現せるものもある可し。又もと佛教の印度諸地方に傳はるや、其傳はりし地方地方の方言を以て口傳され、後書法の發明（或は他國よりかりし）後其等の方言を以て記録されたるならん。故に波理語經の外他のフラクリト諸方言を以て記されし經典も存在せしならんと信するを以て、（此の説はミナエフ氏始めて其波理語文典の緒論中にのべピル氏は其の支那佛教文學講義第二章に漢譯經より例をひきて之を確めたり）梵語經典中には波理語外のフラクリト語を以て記されたる經典より翻譯され、又之に基きて書かれしものあらんと信するなり。而して今日に傳存するは只梵語及び波理語を以て記されたるもののみなる所以は、印度に於て書本の永く保存され難きこと、佛教の印度本土より放逐されし年代の古きと、更に佛教の錫倫及び泥波爾に傳はりし以來今日まで永續し來れること等を考へ合さば此の問題は明かに解釋さるゝを得可し。

三 梵語經佛典の事

西紀後千八百二十四年、泥波爾の首府貨篤曼頭に駐劄せる東印度會社の公使ブリアン、ホートン、ホッション氏は泥波爾の寺院に於て梵文佛典を發見せしことをベンカルの亞細亞學會に

告知し、且つ其發見せし經典六十部を送れり。之を世人の梵文佛典に着眼せし始めとす。氏は此の點に付て多くの貴重なる論文をもせしが、千八百四十一年之を編集して（佛教徒の文學並に宗教の説明）と題し、セラムポールより出版せり。千八百七十四年には此の點に關する氏の論文を大集し「西藏及泥波爾の言語、文學、宗教に關する論文集」と題してロンドンより出版せり。氏は始め其の發見せし經典をベンガル亞細亞學會に送りしかど之に注意するものなきを以て更に同一の寫本をロンドンの亞細亞學會及びパリの亞細亞學會に送りされどピユルヌーフ氏の現はるゝまでは世の學者等其等の寫本の性質及び價值を知らざりき。氏の研究は二部の貴重なる書となりて現れたり。一は佛教史緒論にして他は善法蓮華なり。ホッション氏が泥爾泥にて發見せし梵文佛典の表は氏の論文集中にあり。又梵文原經と漢譯經との關係に付ては南條博士英語補譯大明聖教三藏錄目の附録を見よ。

日本に於ては阿彌陀經及び金剛能斷波般若波羅密多經等の梵文經發見されたり、又陀羅尼及び經句を刻める貝多羅葉は十八ヶ寺にて發見されたり。内に波理語の經句を刻めるもの二箇あり、一は大阪の寶仙寺にあるものにして、他は京都智恩院に藏するものなり、其の寶仙寺にあるものは殊に面白し、カムボジャ文字を以てウエザンタラ經の句を刻めりと云ふ。（「アチクドタ、オキヅニエンシヤ」第一卷第一部第二部及び第三部、並にマクスミユレル氏論文集第二卷、及び「セルマンワークシツプ」第二卷を見よ）

（四）南北佛典比較の事

之れ佛教研究上甚だ緊要なる問題なり。蓋し南北佛教比較的研究の根礎をなすものなればな

り。されど波理佛典は未だ悉く出版又は翻譯されざるを以て、完全なる研究は行ひ難し。但し其律藏の部は東洋聖典集中リス、マウイド及びオルデンベルヒの二氏によりて翻譯されたるを以て、やゝ満足なる研究を施すを得。ヒール氏は其の支那佛教文學講義第二章中其數例をあげられたり。又經藏中にも既に歐洲語に翻譯されたるものにして漢譯佛典中類同のものあること發見されたり。法句經と達爾摩波陀經の類似の如き其一例なり。余は此の二經の關係に付て聊々研究したる處あるを以て、之を述べんと欲したりしが、更に二三の參考す可き經書あるを以て而して本卷の翻譯に急がしくして之を研究する能はざりしを以て爰に之を述べること能はず。他日に譲る。又涅槃經中にも其文言すら類似するものあるが如し。其一例は本卷第七章中に掲げおけり。又南北佛教共に各々其内に數國を包有するを以て、此の研究に入るに先だち、先づ北部の佛典相互の關係、及び南部の佛典相互の關係を研究すること、緊要なり。泥波爾の梵語經、西藏の「カンツニール」、及び漢譯三藏の比較及關係に付ては南條博士の大明聖教三藏目錄を見よ。南部の佛教は錫倫、暹羅、緬甸等共に波理語經典を以て本據となすこと明らかにしを以て、今や別に之を比較研究するの必要なが如しと雖も、更に究研の積り行きて暹羅佛教徒の内には錫倫佛教徒の有せざる波理經の存在すること發見せらるゝなどの事追々現はるゝに至ては又此の内部比較の必要も起り來る可し。

(五) 佛陀研究の參考書之事

錫論所傳の佛陀傳に付ては、ハーデー氏の佛^{マニエル、オプアズム}教書あり。もつとも精細なり。波理語三藏中にては闇多伽註釋はもつとも參考に供す可き書なり。リス、マウイド氏は「佛敎誕生物語」と題

して其一部を英譯せり。又大涅槃經と、稱するものあり。佛陀臨終の物語なり。其の英譯は、リス、マウイド氏の「佛敎經藏」中にあり。東洋聖典集第十九卷なり。暹羅所傳に付てはアラバスター氏の法輪あり。緬甸所傳に付てはヒガンデー氏の「緬甸の佛陀聖多摩の傳」あり。又摩羅隣伽羅、憐都の英譯あり。西藏所傳中にては普曜經莊嚴經などの原本と思はるゝ「ラリタ、グイヌタラ」經最も緊要なり。(此の經に付ては既に第二章の内に述べたり)漢譯佛典中特に釋迦に關するもの、主要なるものに付ては本卷第二章附註の中に村上專精氏の表をあげたり。而して其の内には衆許摩訶帝經の名見へすと雖も之れ亦此の點の研究に付ては甚だ緊要なる書なり。ヒール氏英譯佛所行讚序論中には之をあげられたり。又二氏の表にあらざるものにて異菩薩本起經と題するものあり。之れ亦參考に供す可し。余は爰に此等諸經を翻譯の年代に従ひて、排列し、且つ其の大意を示さん積なりしかば上述の次第にて之をなす能はず。

以上述べし所、甚だ簡略なりと雖も、讀者諸君の研究上、參考の端ともならば幸甚々々。第三章の附録たる可き漢譯佛典中に見ゆる原語の説明は次卷の附録中に掲載す可し。余は更に基督教に就ては新約全書の考證、基督傳研究の參考書をあげ、摩哈嘿教に付ては、亞利比亞語の事、古蘭の考證、及び摩哈嘿に關する傳説等を述ぶる積なりしが、本卷を翻譯し行く中到底其のなし難きを覺りたるを以て、本文中之を約束せざりき。爰には只佛教に關して本文中に約束せし諸點の大意をあげしのみ。讀者よろしく諒察あれ。

明治廿八年六月廿三日印刷
同 年六月廿八日發行

(第四之卷與附)

譯者兼
發行者

米田庄太郎

印刷者

橘磯吉

發行所

三一神學校女内

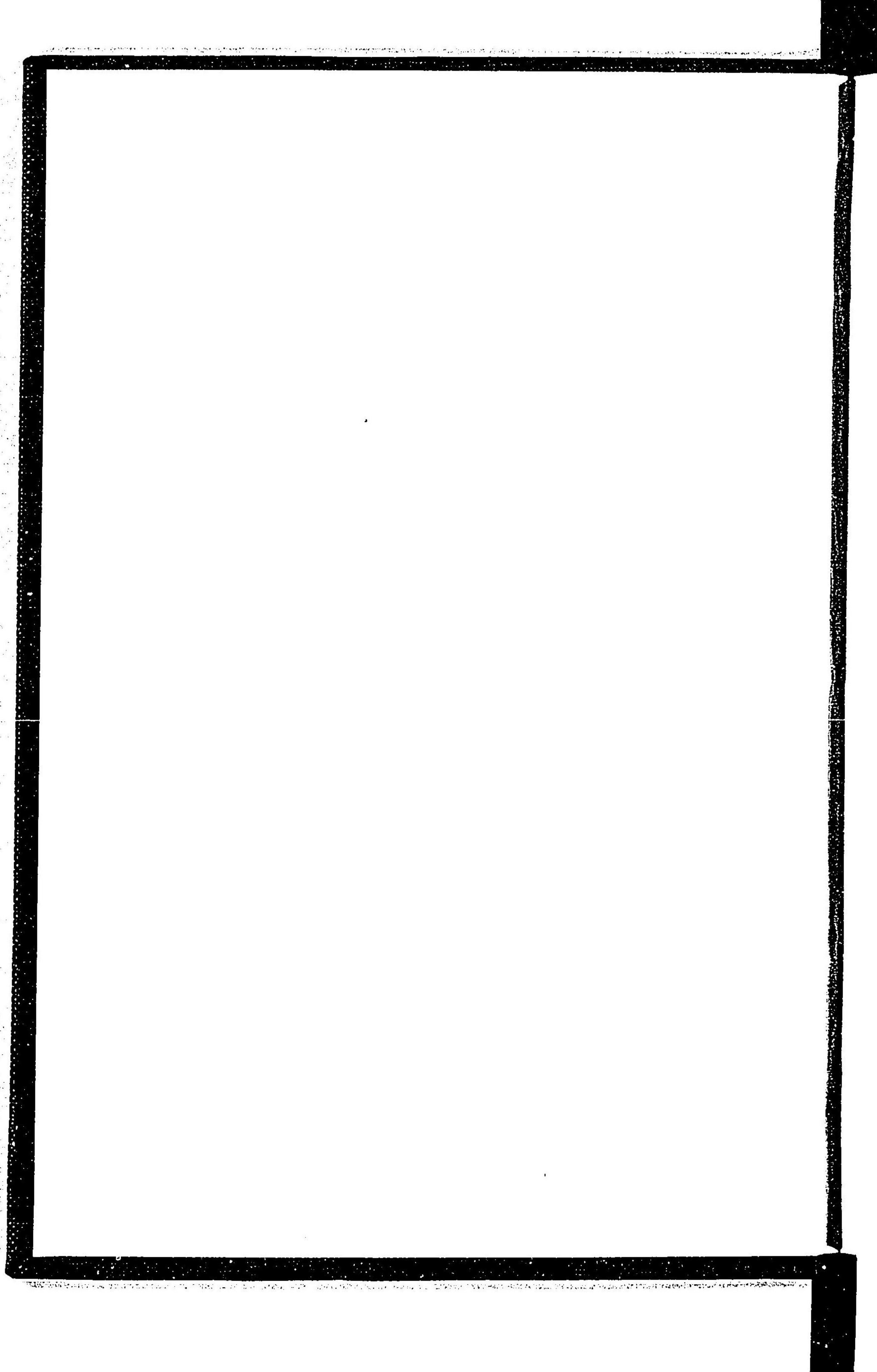
印刷所

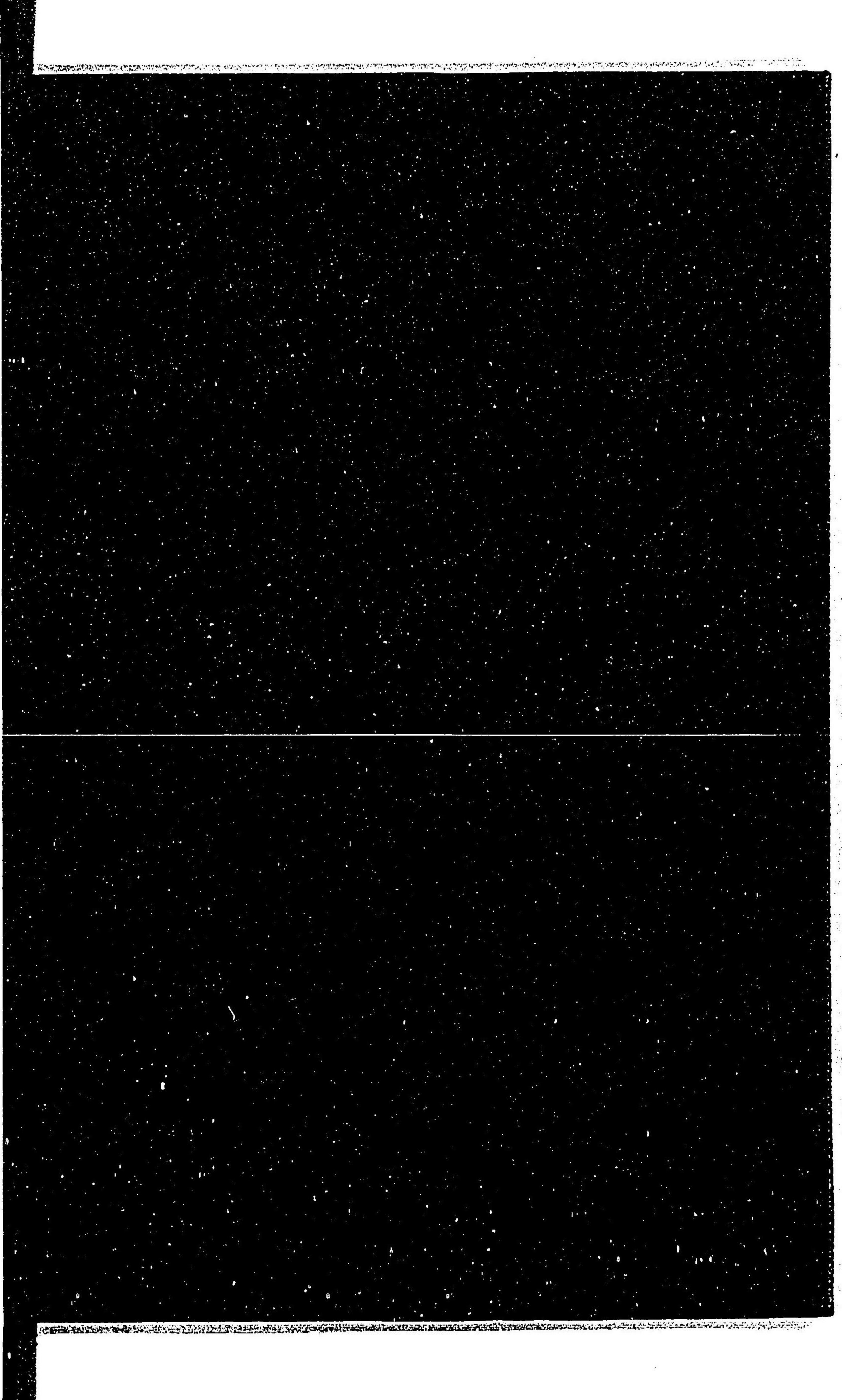
三協合資會社

東京市京橋區弓地
二丁目四番地

東京市京橋區新榮町
七丁目

215K76





43
52

